

RI\*WAC

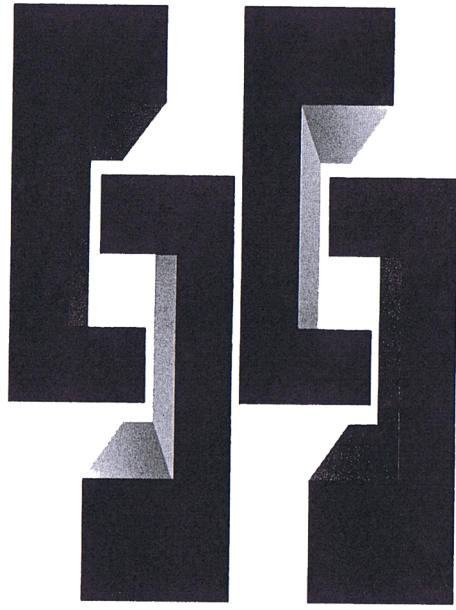
Research Institute for Women and Careers

日本女子大学現代女性キャリア研究所

RIWAC 管理番号	RJO0002
調査タイトル	大正期の本学卒業生に対する調査
論文／雑誌名	「大正期の本学卒業生に対する調査報告」 『大正の女子教育』
著者	山本和代・落合孝子
掲載ページ	pp.152-274.
発行年	1975.05
出版社	国土社

# 大正の女子教育

日本女子大学女子教育研究所編



女子教育研究双書 ⑤

発刊に際して.....道喜美代 1

第一部 大正期の女子教育 5

大正期の女子教育.....中 島 邦 6

臨時教育会議と女子教育.....遠 藤 明 子 53

大正期の家庭科教育.....半 田 た つ 子 74

成瀬仁蔵と宗教教育.....菅 支 那 107

第二部 大正期の本学卒業生に対する調査報告 151

大正期の本学卒業生に対する調査報告.....山 本 和 代 152  
落 合 孝 子

第三部 大正期の婦人 275

大正期における婦人解放の動向	.....	亙理淑子	276
大正期の女流作家・野上弥生子	.....	熊坂敦子	289
大正期の農村婦人	.....	宮崎礼子	304
大正期の「女教員」問題	.....	一番ヶ瀬康子	327

第四部 教育統計 339

付 戦後女子教育研究文献目録(4)	.....	品川和子	343
	.....	真橋美智子	

## 大正期の本学卒業生に対する調査報告

山本和代  
落合孝子

### はじめに

「大正の女子教育」を刊行するにあたって、本研究所では、「大正婦人史研究会」を設け、大正期の文化、女子教育、女教員の問題、婦人の職業、婦人と政治、婦人団体の動向、女流文学などの観点からの研究、討論を重ね、大正期の婦人の動向をとらえることに努めてきた。

その過程において、女子の高等教育に関する資料の多くは、与える側からの教育論、教育政策、教育方法などが主であって、受け手の側からの問題提起に欠ける面があることが明らかにになった。すなわち、従来行われてきた研究は、何を教育したかの歴史であり、カリキュラムの内容、編成に終始する場合が多く、被教育者の側がどのような受け止め方をしていたかについての資料に乏しい状況であった。我々はこの点に着目し、大正期に日本女子大学に学び巣立っていった本学の卒業生を対象とする調査を行った。

第一章「大正期の学園生活」、一「大正期の本学の入学者」においては、大正期に学園生活をおくった者たちの入

学の動機、入学に際しての父母の意見、家庭の背景、入学後の状況などを調査し、大正期の女子高等教育の側面をとらえることに努めた。

また、教育の作用を考える時、教室以外の場を含めた学園生活全般にわたって考察することが必要であると考え、二「大正期の学園生活」においては、創立者及びその後継者による特別講義（当時、実践倫理と称された）、自治生活、寮生活、各種の学校行事などの面から大正期の学生生活の思い出をほりおこし、そこで行われた教育を全人的に把握したいと意図した。同時に、与える側が目指した教育の目標と、それを受け止めた学生の側との印象のずれ、接点などについても何らかの資料を得たいと試みた。この意味から、本学創立者成瀬仁蔵の教育理念を随所に挿入し、読者の参考に供した。

更に三「本学の教育に対する評価」においては、自分たちの受けた教育をどのように受けとめているか、母校の教育に対する評価を通して、当時の教育のもたらした影響、効果をみたいと考えた。

第二章「大正期の卒業生の卒業後の生活」では、教育の成果がどのようにその後の生活に反映され、発展していったかといった点について、家庭生活、職業生活、社会活動の面から調査を行った。

第一章一、及び第二章においては、調査結果を数量的に把握、主として頻度や回答比率などから検討した。特に第二章においては、本研究所がすでに報告した「女子大学卒業生の生活・意見調査（女子教育研究双書『女子の生涯教育』所収）」との関連を考え、結果のまとめ方においても、第一章の調査結果を照合しつつ、卒業後の進路などは、文部省の資料を参照し、卒業生たちの卒業後の歩みを概観した。但し、第一章二及び三においては、記述者の声をできるだけ忠実に収録することに留意し、数量的な取扱いは全体の傾向をみるのみにとどめた。

本調査は、大正期に日本女子大学に学び、その課程を修了した者たちを対象とした限られたものであるが、一つには被教育者の側からの調査であること、第二には学窓を巣立ってからすでに五十年以上を経過した人々に行われたと

いう点において、その独自性と、教育のもつ影響、効果をうかがい知る可能性が存するものと考え。

## 調査の概況

### (一) 調査期日

昭和四十五年五月一日～七月十日

調査の実施に先立ち、調査項目の適否を検討するため、大正時代の本学卒業生の中から一〇〇名を無作為に抽出し、昭和四十五年二月十日より三月十日にかけて予備調査を行った。

### (二) 調査対象

本調査は、大正時代に本学の教育を受けた者を対象とする全数調査である。

大正時代の本学卒業生総数は、桜楓会名簿によれば二、三七七名であるが、すでに故人となった者もあり今回の調査では、このうち一、四五七名が対象となった。

回生でみると一〇回生（明治四十三年入学大正二年卒業）から二五回生（大正十四年入学昭和三年卒業）までが該当する。調査時の年齢は表1の通りである。最高年齢は八十八才、最低年齢は六十一才である。

### (三) 調査方法

調査方法は郵送調査法により、本人に調査票を直接郵送し、配布二〇日後を回収日と定めた。

回収の状況は次の通りである。

調査票発送部数

一、四五七

有効回収部数

六四七

返却部数

六〇

表1 現在(調査時)の年齢

時期・学部	年齢																			無答	合計	
	62才以下	63才	65才	67才	69才	71才	73才	75才	77才	79才	81才	83才	85才	87才	89才以上	実数	%					
回生別	大正前期	—	—	—	—	—	12.9	37.6	21.5	11.8	10.8	1.1	—	—	—	1.1	—	3.2	93	100.0		
	大正中期	—	0.5	1.1	29.2	32.4	25.4	4.3	1.1	1.6	0.5	—	0.5	—	—	—	—	3.2	185	100.0		
	大正後期	10.0	32.7	38.1	14.1	1.9	0.5	—	0.5	—	—	—	—	—	—	—	—	2.2	370	100.0		
専攻学部別	家政学部	6.8	21.3	28.5	15.7	6.0	4.7	5.5	6.4	0.9	0.9	0.4	—	—	—	—	—	3.0	235	100.0		
	家政理学部	3.1	7.9	15.4	14.1	15.9	16.7	11.9	3.5	4.8	3.1	0.4	—	0.4	—	—	—	2.6	227	100.0		
	国文学部	10.7	32.1	15.5	20.2	11.9	2.4	1.2	—	1.2	—	—	—	—	—	—	—	4.8	84	100.0		
	英文学部	4.2	22.2	20.8	23.6	8.3	13.9	2.8	1.4	1.4	—	—	—	—	—	—	—	—	72	100.0		
社会事業学部	6.7	36.7	43.3	10.0	3.3	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	30	100.0			
総数	5.7	18.8	22.1	16.4	10.3	9.4	6.6	3.7	2.2	1.7	0.2	0.2	—	0.2	—	—	—	2.6	648	100.0		



表2 時期別・学部別回収率

時期	家政学部		家政理学部		国文学部		英文学部		社会学部		合計	
	対象数	回収数	対象数	回収数	対象数	回収数	対象数	回収数	対象数	回収数	対象数	回収数
大正前期	77	31	125	56	6	2	16	4	—	—	224	93
大正中期	115	48	189	98	40	20	40	19	—	—	384	185
大正後期	349	156	172	73	131	62	105	49	92	30	849	370
計	541	235	486	227	177	84	161	72	92	30	1,457	648

未回答および無効回答数

二

回収率

四四・六%

集計・製表については、コーディング作業後、自由記述式の回答部分は手集計を行い、その他の部分は機械集計によった。

調査結果は、時期(回生)別、専攻学科別に検討している。時期(回生)については、大正時代を前期・中期・後期に三区分した。

①前期 一〇回生(明治四十三年入学～大正二年卒業)～一五回生(大正七年卒業)

②中期 一六回生(大正八年卒業)～二〇回生(大正十二年卒業)

③後期 二一回生(大正十三年卒業)～二五回生(大正十五年入学～昭和三年卒業)

また、専攻学科については、これを次に示す通り、五つに分類した。(当時の呼称による)

①家政学部

②家政理学部(これには教育学部、師範家政学部が含まれる)

③国文学部

④英文学部

⑤社会事業学部

この分類は、本学における学部の開設状況およびその内容と密接に関連している。

なお、時期別、学部別の回収率は、表2の通りである。

調査票は二部から成っている。第一章では、はじめに入学の年度、入学時の年齢、本学の存在を知った契機、入学の動機、入学に際しての父母の意見、家の職業等についてき

き、さらに、実践倫理、講義、自治生活、寮生活、学校行事等の学園生活の各面について、それぞれ記憶に残っていることや、印象に残っている教師などについて自由記述によって答えを求めている。同時に、学生時代の愛読書や雑誌を問い、最後に、本学の教育に対する評価と現在の生活信条を自由記述でたずねて第一章を終わっている。

第二章は、卒業後の生活についてであり、卒業直後の進路や、家庭生活について、さらに職業・社会活動の経歴について記入を求めている。内容としては、はじめに結婚について既未婚の別をたずね、現在の家族状況を問うた。既婚者については、学校卒業後、結婚生活に入るまでの過ごし方についてたずね、配偶者の結婚時の職業を問い、また子どもの数をたずねている。さらに既未婚を問わず、本学卒業直後より現在までの職業経験の有無、ある場合その継続の様子、職種、継続期間などの職業経歴の記入を求めた。ついで、社会活動の有無、ある場合その活動の種類、所属団体名、それぞれの活動期間についてたずねた。

本報告では、調査結果のうち、卒業直後の過ごし方や職業・社会活動に焦点をあてて報告している。したがって、本稿では触れていないが調査票ではこのほかに、家庭の仕事に対する考え方、いわゆる主婦観や、子どもの養育と母親が社会的な仕事や活動に参加することの関係をどう考えるか、また、現在の生活の中心は何であるか、現在の生活への満足度などに関しても、多肢選択法により回答を求めている。これらの結果については別の機会に、さきに本研究所で行った卒業生（昭和二十二年卒業～同四十年卒業）の生活意識調査結果と対応させつつ報告したいと考えている。

## 第一章 大正期の学園生活

### 一 大正期の本学入学者

本章では、大正期に本学に入学者について、「入学時の年齢」「出身地」「家の職業」「本学の存在を知った契機」「入学の動機」「入学に際しての父母の意見」「入学後の状況」などを概観する。

#### (一) 入学時の年齢

本学入学者の入学時の年齢をみると、表3に示すように、全体としては十七才で入学したものが最も多く五一・四％、ついで十八才が二八・四％となっている。女学校卒業直後、本学へ進学した者が大多数と考えられるが、二十才代で入学した者もかなりの数みられる。年齢の違いとともに、その経歴においても職業経験のある者、既婚者などが含まれていたことが推測される。

#### (二) 出身地

大正時代の本学への入学者は、どのような地方から集まってきたのであろうか。

表4をみると、出身地は平均して全国にわたっており、北は北海道から南は九州・沖縄、遠くは中国・朝鮮に及ん

表3 入学時の年齢

時期・ 専攻学部	入学時 の年齢	17 才	18 才	19 才	20 才	21 才	22 才	23 才	24 才	25 ~ 29 才	30 才 以上	無 答	合計	
													実数	%
回生別	大正大	35.5	29.0	17.2	2.2	4.3	2.2	—	2.2	—	1.1	6.5	93	100.0
	正中大	48.1	31.4	7.0	5.9	3.2	—	1.1	0.5	0.5	—	2.2	185	100.0
	前期中	57.0	26.8	7.0	3.8	1.4	1.1	0.3	0.3	1.1	—	1.4	370	100.0
専攻学部別	家政学部	55.3	27.7	6.4	4.3	1.3	0.9	—	0.4	1.3	—	2.6	235	100.0
	政治学部	49.8	25.6	10.6	4.4	4.4	1.3	0.4	0.9	0.4	0.4	1.8	227	100.0
	文学部	54.8	31.0	7.1	—	—	1.2	1.2	—	1.2	—	3.6	84	100.0
	国文学部	44.4	37.5	8.3	5.6	1.4	—	1.4	—	—	—	1.4	72	100.0
	社会学部	40.0	26.7	13.3	10.0	3.3	—	—	3.3	—	—	3.3	30	100.0
総数		51.4	28.4	8.5	4.2	2.3	0.9	0.5	0.6	0.8	0.2	2.3	648	100.0

でいる。

(注) 出身地・家の職業及び入学後の状況を把握するにあたっては、今回の調査結果の他、当時の学籍簿を参照した。この場合、今回の調査対象者の他に、中途退学者、入学後の消息の不明のものも含まれているので、合計は調査対象数とは異なった数値となっている。

(三) 家の職業

本学入学者の家の職業は表5に示す通りである。これによって、本学入学者のおおよその社会階層が把握できる。

概観すると、公務・管理・自由業が多く、全体の三五・二九%を占め、中でも会社員・銀行員・医者・官吏・教育者等が目立っている。その他、陸・海軍人・法律家・宗教家から著述家・芸術家あるいは政治家など各分野での専門的職業がみられる。

一方、自営業者も多く、農業(一六・一%)をはじめ、水産業・鉱業・工業等の産業にかかわる業主が合わせて二四・四%で、商業(一六・五%)・交通・運輸業と合わせると、各種の自営業が合計で四一・六%にもぼっている。また無職の一二・五%には地主が多く、さらに既婚の主婦学生の場合には、夫の職業が学生といった例も無職の中に含まれている。

これらの職業の分類から、入学者たちがかかなり高い社会階層からの出身者であることがわかる。

表4 出身地 (資料, 学籍簿)

回	出身地	大正(10)	大正(16)	大正(21)	合計	
		前期(15回)	中期(20回)	後期(25回)		
奈	京川	113	200	350	663	
	葉城	17	40	51	108	
	木玉馬	55	47	59	161	
	茨	28	26	49	103	
	栃	22	27	50	99	
	埼	16	26	33	75	
	埼	16	32	54	102	
	群	45	50	76	171	
	長山	20	37	38	95	
	静	40	37	85	162	
	愛	26	41	64	131	
	岐	17	22	29	68	
	三	9	14	40	63	
	滋	8	6	12	26	
	大	37	54	53	144	
	京	17	32	24	73	
	奈	7	8	14	29	
	和	15	22	36	73	
	歌	良山	26	44	60	130
庫		15	9	16	40	
取		12	20	18	50	
根		55	60	85	200	
山		20	43	66	129	
島		30	54	55	139	
口		16	14	25	55	
川		7	20	14	41	
島		9	19	22	50	
知		19	42	61	122	
媛		49	80	101	230	
岡		13	25	39	77	
賀		18	33	39	90	
崎		24	28	53	105	
本		11	14	35	60	
分		15	9	16	40	
崎		9	9	48	66	
児		井	19	17	25	61
		川	25	28	25	78
	山	22	32	33	87	
	潟	36	36	86	158	
	島	22	57	57	136	
	井	16	30	48	94	
	川	20	24	29	73	
	山	8	17	29	54	
	秋	23	15	28	66	
	岩	17	19	19	55	
	青	30	44	62	136	
	海	北	6	7	4	17
		沖	12	4	17	33
		中	1	2	22	24
	朝	7	30	13	50	
	不					
	明					
	鮮					
	明					
計	1,119	1,606	2,367	5,092		

#### (四) 本学の存在を知った契機

本学に入學した学生たちは、どのようにして本学の存在を知ったのであろうか。

表6に示された調査の結果をみると全体的な傾向としては、「家族や親せきの者」と言ったごく身近かな者を通じて本学の存在が知らされている場合が多い。

しかしこの傾向は、大正中・後期になるにしたがってやや減少し、かわって「なんとなく知っていた」という者の数が増加してくる。これは、日本女子大学校の存在がより広範囲に知られ、学校の知名度の高まりを示すものと考えられる。

そのほか、各時期を通じて一貫して女子大学の存在を知る手がかりの役割を果たしているのが「学校の先生」である。

表5 家の職業 (資料, 学籍簿)

職 業		実 数	%
大 分 類	中 分 類		
公務・管理 自由業	会社・団体役員など	39	0.8
	政治 家	14	0.3
	官・公 吏	329	6.5
	医師(薬剤師を含む)	362	7.1
	教 育 関 係	217	4.3
	軍 務 関 係	97	1.9
	法 務 関 係	68	1.3
	宗 教 関 係	59	1.2
	会 社 員・銀 行 員	518	10.2
	技 術 関 係	53	1.0
著述業・芸術家など	37	0.7	
小 計		1,793	35.2
農 業		819	16.1
水 産 業		18	0.4
鉱 業		44	0.9
工 業	製 造 加 工 関 係	111	2.2
	土 木 建 築 関 係	28	0.5
	釀 造 関 係	118	2.3
	そ の 他	97	2.1
小 計		354	7.0
商 業 (交通・運輸を 含む)	販 売 関 係	723	14.2
	金 融 関 係	42	0.8
	貿 易 関 係	23	0.5
	倉 庫 運 輸 関 係	36	0.7
そ の 他	52	1.0	
小 計		876	17.2
そ の 他 の 有 業 者		17	0.3
無 職		638	12.5
不 明		533	10.5
合 計		5,092	100.0

一口に学校の先生とは言っても男女別・年齢・種別(小学校から女学校)などその内容はさまざまであろうが、ここでは明らかではない。本学卒業生で卒業後教職についた者もかなりあること(第二章参照)を考えると、これらの卒業生が母校への進学を勧めたケースもあったかもしれない。それはともかくとして、学校の教師の中に、本学の教育精神に理解を持ち、進学を勧めた者がかなりあったということが推察されるのは興味あることである。

(五) 入学の動機

次に、入学の動機についてみると、表7にみるように全体を通して「女学校だけでは物足りなかったの」という

表6 本学の存在を知った契機

時期・学部		本学の存在				なっていた なんとなく知っ	学校の先生から きいた	家族・親せきか らきいた	知人からきいた	新聞・雑誌等の 出版物から知っ	その他	無 答	合計	
		前期	中期	後期	部								実数	%
回生別	大大大	15.1	25.8	34.4	10.8	2.2	9.7	4.3	93	102.2				
	正正正	24.3	23.2	30.8	5.9	7.0	14.6	2.7	185	108.6				
	大大大	28.1	24.6	31.1	10.0	5.7	10.5	1.6	370	111.6				
専攻学部別	家	21.7	19.1	35.3	14.5	7.2	9.8	3.0	235	110.6				
	家	21.6	33.5	27.3	6.2	5.7	12.3	1.8	227	108.4				
	国	39.3	27.4	28.6	3.6	2.4	10.7	2.4	84	114.3				
	英	23.6	12.5	37.5	6.9	2.8	18.1	1.4	72	102.8				
	社	43.3	16.7	26.7	6.7	6.7	6.7	3.3	30	110.0				
総	数	25.2	24.4	31.5	9.0	5.6	11.6	2.3	648	109.4				

者が五八・二％にのぼっている。その他、「専門の勉強がしたかったので」(二二・二％)、「何か将来社会の役に立ちたいと思って」(一九・四％)などが多い。「資格をとりたい」「卒業後、経済的に自立したい」など、かなりはっきりした目標を抱いて入学した者もみられる。

入学の動機として、精神面を挙げて「精神教育を受けたい」「精神的独立を得たい」と答えている者もかなりあるが、これらは時代が下るに従ってやや減少する傾向を示している。他方それにかわって「専門の勉強をしたい」「何か社会の役に立ちたい」等、目的意識をもって入学してくる者が増加している。さらに、「日本女子大にあこがれて」「教師にすすめられて」という者も漸増し、次第に日本女子大が世間にその評価を得ていった有様がうかがえる。

また、当時女子が高等教育の機会を得るためには、両親その他の身近かな者の理解と援助が必要とされたことは、「両親のすすめにより」一六・五％という回答の中に反映されていると思われる。

#### (六) 入学に際しての父母の意見

では、父母はその子女の入学に際してどのような意見を持っていたのであろうか。

表7 入学の動機 (多答式のため合計は100%を超える)

入学の動機 時期・学部		回 生 別			専 攻 学 部 別					合 計
		大正前期	大正中期	大正後期	家政学部	家政理学部	国文学部	英文学部	社会事業学部	
専門の勉強がしかなかったので		14.0	22.2	22.4	11.9	14.5	41.7	41.7	36.7	21.1
女学校だけでは物足りなかった		55.9	54.6	60.5	71.1	56.4	45.2	44.4	40.0	58.2
日本女子大にあこがれて		7.5	8.6	14.6	15.7	8.4	11.9	11.1	10.0	11.9
上京したかった		1.1	0.5	3.0	2.6	0.9	2.4	2.8	3.3	2.0
よい先生の教えを受けたかった		10.8	9.7	9.2	10.6	8.4	9.5	8.3	13.3	9.6
精神教育を受けたいと思って		17.2	15.7	10.0	17.9	10.6	8.3	11.1	3.3	12.7
精神的独立を得たいと思って		8.6	6.5	4.6	5.5	6.2	6.0	5.6	3.3	5.7
何か将来社会の役に立ちたいと思って		14.0	17.3	21.9	16.2	19.8	19.0	12.5	60.0	19.4
卒業後経済的に自立したいと思って		9.7	6.5	10.0	6.4	12.3	9.5	8.3	3.3	9.0
資格を取りたい(教員免許)と思って		10.8	13.5	7.8	1.3	22.9	4.8	6.9	—	9.9
両親のすすめにより		19.4	16.2	15.9	18.3	14.5	14.3	20.8	13.3	16.5
教師のすすめにより		5.4	9.2	10.0	6.8	10.6	14.3	8.3	3.3	9.1
特に動機はなかった		1.1	3.8	2.2	2.6	2.2	6.0	—	—	2.5
その他		6.5	5.9	4.3	5.1	4.8	3.6	6.9	6.7	5.1
無 答		2.2	1.6	0.5	1.3	0.4	—	2.8	3.3	1.1
合 計	実 数	93	185	370	235	227	84	72	30	648
	%	183.9	191.9	197.0	193.2	193.0	196.4	191.7	200.0	193.7



これについては、自由記述によって、父母別に回答を求めたのであるが、傾向をみるために、回答の内容を「積極的賛成」「消極的賛成」「反対」に三大別し、さらにそれらを次のように細分類して考察した。

積極的な賛成の中では、

- ① 高等教育を受けさせたい（高等教育期待型）
- ② 高い教養を身につけさせたい（教養期待型）
- ③ 専門的な学問や技能を身につけさせたい（専門的学問・技能期待型）
- ④ 精神教育や精神修養をさせたい（精神教育・修養期待型）
- ⑤ 創立者成瀬仁蔵の教育理念に賛同する（成瀬教育期待型）
- ⑥ 良妻賢母教育を受けさせたい（良妻賢母教育期待型）
- ⑦ 精神的独立を得させたい（精神的独立期待型）
- ⑧ 卒業後に経済的自立の能力をもたせたい（経済的自立期待型）
- ⑨ 卒業後に社会的活動ができるようにしたい（社会活動期待型）
- ⑩ 家名を発揮させたい（家名発揮期待型）
- ⑪ 特に理由は明記されておらず、積極的に賛成という場合
- ⑫ その他

が含まれている。消極的賛成の中には

- ① 本人の意志を尊重し希望をかなえさせてやりたい（本人の意志尊重型）
- ② 配偶者が賛成するから賛成である
- ③ 特に理由は明記されておらず、消極的賛成という場合

④その他  
が含まれている。

反対は

- ①女子に学問は不要だから反対(学問不要型)
  - ②婚期が遅れるから反対(婚期心配型)
  - ③子女を親元から離すことになるから反対(別居反対型)
  - ④特に理由は明記されていないが反対という場合
  - ⑤その他
- などである。

このようにして分類集計した結果が表8に示すとおりで、父親の場合も母親の場合も、当然なこととはいえ、賛成した者が多く、反対は少数意見であった。しかし、賛成とはいっても消極的賛成がかなりの率を占めている。父と母を比べると、父に積極的賛成者がやや多く、母に消極的賛成者がやや多い。

賛成の理由としては積極的賛成では、子女に高等教育を受けさせたいという「高等教育期待型」の比率が父母ともに高い。また、消極的賛成では、「特に理由なし」とするものの比率が父母ともに高いが、本人の意志を尊重し、希望をかなえさせてやりたいとする「本人の意志尊重型」もみられる。

そのほか、父親の賛成理由では、「専門的学問・技能期待型」「精神教育・修養期待型」「経済的自立期待型」などの比率がやや高い。母親の賛成理由では、「経済的自立期待型」「専門的学問・技能期待型」の比率がやや高いほか、特に目につくのは、消極的賛成の中で「配偶者が賛成するから」という応答の多いことである。すなわち、夫が賛成するから自分も賛成するといった、夫唱婦隨の消極的賛成者が多いのであり、家父長下の家の中での母親の立場を感

表8 入学に際しての父母の意見

時 母 の 意 見 期		父 の 意 見				母 の 意 見			
		大 正 前 期	大 正 中 期	大 正 後 期	合 計	大 正 前 期	大 正 中 期	大 正 後 期	合 計
積 極 的 賛 成	①高等教育期待型	11.8	8.6	10.5	10.2	9.7	5.9	7.3	7.3
	②教養期待型	2.2	2.7	1.6	2.0	2.2	1.1	2.4	2.0
	③専門的学問および技能期待型	2.2	3.8	1.9	2.5	—	2.2	3.5	2.6
	④精神教育修養期待型	3.2	1.1	3.0	2.5	1.1	1.1	2.2	1.7
	⑤成瀬教育期待型	3.2	—	1.1	1.1	2.2	—	1.4	1.1
	⑥良妻賢母教育期待型	—	1.1	1.6	1.2	—	0.5	0.3	0.3
	⑦精神的独立期待型	1.1	2.2	2.4	2.2	1.1	1.6	2.2	1.9
	⑧経済的自立期待型	1.1	2.7	2.7	2.5	2.2	3.8	4.9	4.2
	⑨社会活動期待型	1.1	0.5	0.8	0.8	—	1.1	0.3	0.5
	⑩家名發揮期待型	—	—	0.3	0.2	—	—	—	—
	⑪特に理由なし	9.7	9.2	7.6	8.3	8.6	6.5	9.2	8.3
	⑫その他	7.5	11.9	7.8	9.0	5.4	9.2	8.9	8.5
小 計		43.0	43.8	41.4	42.3	32.3	33.0	42.4	38.3
消 極 的 賛 成	①本人の意志尊重型	7.5	10.3	13.2	11.6	7.5	7.6	13.2	10.8
	②配偶者が賛成するから	—	0.5	2.7	1.7	4.3	10.8	5.7	6.9
	③特に理由なし	14.0	20.5	18.9	18.7	20.4	21.1	20.3	20.5
	④その他	5.4	3.2	3.8	3.6	3.2	7.0	2.7	4.0
小 計		26.9	34.5	38.6	35.8	35.5	46.5	41.9	42.3
反 対	①学問不要型	4.3	3.8	2.2	2.9	2.2	0.5	1.9	1.5
	②婚期心配型	1.1	1.6	1.9	1.7	—	1.6	3.0	2.2
	③別居反対型	1.1	1.1	1.1	1.1	1.1	1.1	0.8	0.9
	④特に理由なし	1.1	2.2	3.2	2.6	—	1.6	1.4	1.2
	⑤その他	1.1	0.5	1.4	1.1	1.1	1.1	1.1	1.1
小 計		8.6	9.2	9.7	9.4	4.3	5.9	8.1	6.9
無 答		7.5	3.8	0.8	2.6	16.1	10.3	3.0	6.9
死 去		14.0	8.6	9.5	9.9	11.8	4.3	4.6	5.6
合 計	実 数	93	185	370	648	93	185	370	648
	%	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

じさせられる。「良妻賢母教育期待型」「社会活動期待型」「家名發揮期待型」などは、いずれも僅かである。

表9 入学後の状況 (資料, 学籍簿)

学 部	時 期	入 学 者		学部を転	卒 業 者	中途退学	死 亡
		名	%	じた者	%	者及び除	%
家 政 学 部	大正前期	441	100.0	19.7	37.4	42.6	0.2
	大正中期	612	100.0	8.5	43.3	47.4	0.8
	大正後期	995	100.0	4.0	54.7	41.4	—
	小 計	2,048	100.0	8.7	47.6	43.5	0.3
家 政 理 学 部	大正前期	514	100.0	24.1	52.9	23.0	—
	大正中期	562	100.0	8.7	60.3	30.8	0.2
	大正後期	356	100.0	6.7	68.5	24.7	—
	小 計	1,432	100.0	13.8	59.7	26.5	0.07
国 文 学 部	大正前期	40	100.0	5.0	50.0	42.5	2.5
	大正中期	226	100.0	4.9	47.8	47.3	—
	大正後期	412	100.0	5.8	57.0	35.9	1.2
	小 計	678	100.0	5.5	53.5	40.1	0.9
英 文 学 部	大正前期	123	100.0	19.5	43.1	35.8	1.6
	大正中期	207	100.0	6.8	40.1	52.7	0.5
	大正後期	285	100.0	3.5	59.3	36.8	0.4
	小 計	615	100.0	7.8	49.6	42.0	0.6
社 会 事 業 学 部	大正前期	—	—	—	—	—	—
	大正中期	—	—	—	—	—	—
	大正後期	319	100.0	9.1	53.3	36.7	0.9
	小 計	319	100.0	9.1	53.3	36.7	0.9
合 計	大正前期	1,118	100.0	21.2	45.6	32.8	0.4
	大正中期	1,607	100.0	7.8	49.5	42.3	0.4
	大正後期	2,367	100.0	5.3	57.5	36.8	0.4
総 計		5,092	100.0	9.6	52.4	37.6	0.4

では、反対の理由としてはどのようなものがあつたかをみると、父親では女子に学問は不要であるという「学問不要型」がやや多く、母親では、婚期が遅れるのを心配してという「婚期心配型」が、他よりやや多いことがわかる。このように父親または母親の反対にないながらも入学して来た者たちは、この調査対象者の中で七〇九%はあつたとみられる。

#### (七) 入学後の状況

最後に、このように

して本学に入学した者の入学後の状況をみておこう。

表9によると、入学後に中途退学する者が全期を通じてかなりの率にのぼっている。学部別にみると、家政学部、英文学部、国文学部のいずれにおいても中退者が四〇%強を占めている。家政理学部のみは中退者は二六・五%と他学部にして低いが、この学部は教員養成を目的としている学部であり、教育学部という名称を冠した時期もあることを考えると、明確な目的を持って入学した者たちが他学部より多かつたであろうことが推測できる。

また、入学後専攻の学部を転じた者は、前期においては国文学部を除いて二〇%前後を占めている。前期に特に多いのは、かなり自由に転科が認められていたという事情を推測させるものであるが、同時に、「入学の動機」の項にみられたように、前期より中・後期へと移行するに従って、入学の際の目的意識が鮮明になってくる傾向と符合している。

転科者や中退者、あるいは死亡者を除いて、入学した学部を卒業した者が、入学時の半数に満たなかったのは前・中期の家政学部および英文学部である。しかし、大正も後期になると、どの学部においても入学後の学生の定着状況はかなり良好になっている。大正期の女子高等教育の推移を示唆する一資料であろう。

## 二 大正期の学園生活

本章では、大正時代に日本女子大学に学んだ者たちが当時の学園生活を顧みて、どのような感想、意見を持っているか、現在でも、特に記憶に残っていること、強く印象づけられていることなどについて、(一)実践倫理 (二)講義 (三)愛読書 (四)自治生活 (五)寮生活 (六)学校行事などの面から年代を追ってみていくことにする。

### (一) 実践倫理

実践倫理は、日本女子大学における教育の中心として、初代校長成瀬仁蔵が明治三十四年の開校当初から最も力を注ぎ、その死に至るまで担当したものである。その後、第二代校長麻生正蔵によって受けつがれた。

#### 成瀬校長時代

講義の内容は、宗教、哲学、道徳、教育、科学、芸術など多方面にわたり、一週二時間の講義時間をはるかに越えて、三時間、四時間に及ぶこともしばしばであった。

「私はこの壇に立つといつも長くするのであるが、これは用意したしるしであります。私もこのやり方は衛生上から言っても宜しくないから、なるべく二時間で切りあげたいと思うのであるがやむを得ず長くなることがある。始めに申したように私はあなた方と相撲をとるのである。あなた方を生れ変らせるのであるから私も此処に出る前に非常な用意を致します。その故あなた方も十分な精神的用意をなさることを希望するのであります。」（成瀬先生伝）三〇五頁」と述べている言葉からも、成瀬校長の実践倫理に注ぐ情熱がくみとれるであろう。このような校長の熱意に対して、当時の学生たちはどのような態度で臨み、その講義をどのように受けとめていったのであろうか。成瀬校長の薫陶を直接に受けた一〇回〜一九回生はその感想を次のように記している。

「成瀬先生の実践倫理は田舎出の私には高度なもので不可解の点もありましたが、四年間の熱心な先生の御訓話でおぼろげながら人の歩むべき道しるべ、生活信条を会得し、数知れぬ苦難に打ち克つことができました。」（一〇回）

「学生にとって最も重要な厳肅な授業でした。教会堂のような雰囲気、学生は下着から清浄に威儀を正し、成瀬先生と学生が一つになった時は時間を超越し夜暗くなるまで続きました。実践倫理によって自覚し、使命と責任に燃え、信念を植えつけられました。」（一〇回）

「成瀬先生の眼光射るような爛々とした眼差しで御説き下さる熱と力ある風貌は今も眼のあたりに見るようです。自分の理想に対する信念を固く持し、徹底することを教えられ、又内在する自己を見出し新しい物を創造していかなければならぬことを教

えられました。高等女学校時代、画一主義の教育でご無理ごもつとももの教育から抜け出すことはなかなか困難でしたが、将来いかに生くべきかをお教えたいただき現在まで大きな指針となりました。」(一一一回)

「一年生の時、成瀬先生の実践倫理はとてもむずかしゅうございました。英語が多く地方の学校で英語のなかった私には苦しいものでした。寮に帰って、ミッションスクール出の方に教えてもらってスベルを直し頭の中に入れるわけで、二時間の実践倫理は、その頃の自習時間の全部でもありませんでした。」(一一三回)

「成瀬先生は教育の理想を宗教に結び、哲学に結んで話され、古今東西を問わず世界的に知性を養い、その中から人間の生き方、隣人への奉仕を教えられた。自己の謙虚な生活、精神があれば、神の叡知の世界を永久に求めていけるというお言葉が印象的であった。講堂には各リーダーの先生方もご出席で、講義はクラスの修養会に連らなり、実践倫理が当時の日本女子大学の教育と校内の機能・運営の中心となっていたと思う。」(一一三回)

「田舎の女学校で修身の時間に倫理・道徳的なお話を聞いたことのない私には、先生の講義はあまりに高遠で、理解に苦しみました。然しわかりたいと思って一生懸命に聴きました。メーテルリンクの『青い鳥』を読ませられたり、エマーソンの論文集を研究させられたり、また先生の講義で既成宗教によらず帰一的な宇宙の真理を求めることを教えられました。」(一一三回)

「入学の年、明治天皇崩御、乃木大将殉死、第一次世界大戦勃発、大正天皇御即位など国家としての大事件が次々と起り、その時に対して校長先生はよく国家の問題、世界の問題をお教え下さいました。広く世界に眼を開き、自分の進む道をお教えたいた事を、一生感謝しております。」(一一三回)

「成瀬先生の実践倫理の時間は、人生の一大真理とも云うべき先生の大思想を、日本人たるわれわれに母校の娘としてのみでなく、国民として、社会人として、人として、人類として生きていく道を力説して下さいました大事な時間であった。聞き入る間にいつの間にか二時間、二時間半となり、どうかすると三時間にわたることが多かった。」(一一三回)

「授業は靈性開発の為の生きた道場でございます。先生も生徒も一つにとけ合い、名状し難い授業でございます。」(一一三回)  
「成瀬先生の実践倫理のあのお姿！ 熱誠あふれ、こぶしをテーブルに打ちつけながら我等若き学生に人生論を説き、宇宙の真理を究明すべく叫ばれる毎週一回の実践倫理、あの時代の学生生活、母校の空気を生涯忘れることはできない。」(一一四回)

「婦人の天職に就き、あるいは現代婦人の行くべき道、婦人の在り方、果ては信仰につき、信念につき諄々と説かれました。今なお耳朶に残っており、いつまでも私の心の糧となっております。」(一一五回)

「成瀬先生の宗教に対するお考え、すべての宗教はその根本において帰一であると申されたお考えに共鳴しました。」(一一六回)

「わからない事が多かったが、目を開け、社会、世界を見て進めと繰り返し返えされたことは生涯私の根になった。」(一六回)

「入学当初はわからない事のみでただ驚異でした。しかし何か一貫するものが大きな力となっている様なことはうなずけて、理解することに懸命でした。こうして四年間、成瀬先生に教えられたことはやがて一生の指針となった事を感謝しています。」(一六回)

「難解のことが入学当時はわけて沢山ありましたが、驚嘆の思いで一生懸命に伺いました。」(一六回)

「成瀬先生のお教えがなかったら今日の自分の生活はあり得なかったと思います。」(一六回)

「宗教・哲学・国際関係等の大きな問題から、特に女性の健康保持、健康増進など身のまわりの細かいことまで及んだ点が印象に残った。」(一七回)

「信念徹底は帰する処、宗教的信念の徹底である事を、言葉と共に御身を以て示された。(私は卒業後早々に浄土真宗に帰し、熱心な仏教徒として不動なものも、先生に实际的、哲学的な基礎を身につけさせていただいたお蔭である。)先生は道徳教育を第一に掲げられたが、それは単なる道徳でなく超越的で宗教に至るものであった。」(一七回)

「自分のいまだ経験した事のない強い力を与えられました。神の声を聞く思いがいたします。時間の経つのも、夏の暑さも感じられない程夢中で伺いました。瞑想によって目に見えぬ神の心に通う体験を尊く感じました。」(一八回)

「先生はいつも、宇宙の中の自己の存在が如何に大切なものであるかを力説され、自分の生れた意義を自分自身で切り開いて行くと同時に、他人をも大切にして生きる事を説かれました。また「三」という事を非常に力説されました。」(一八回)

「ご熱心に、それこそ燃え上る炎の様子にお話し下さいましたその光景は、今も心にいきいきと残っております。何事にも不器用な性質の私が、失敗しても失敗しても熱心に努めて行きたい、このような根気と申しますか、真心と申しますか、そういうような気持を、年を取りました今も何とか持つていられますのも、先生のご熱心なお講義をきかせていただきましたおかげでございます。」(一八回)

「デモクラシーについてのお話を伺いました。数回にわたってのお講義で、デモクラシーとは何か頭にしみ込みましたので、今の社会になっても驚くこともなく、恐れることもなく、大変任せだとしみじみ感じています。」(一八回)

「先生の新しくして広く深い物の考え方に驚きと感激とをもって実践倫理をきいた。それは宗教的なりヴァイヴァルの経験にも似ていた。」(一八回)

「私が今、キリスト教を奉じ、ゆるみがない人生を過し得ましたその基礎は、先生の深いお教えの賜と深く感謝しています。」



(一八回)

「ノートをとるのが大変で、非常に苦しかった。しかし必ずある感動を与えられ、豊かな心で帰途についた事を忘れることができない。」(一八回)

「この時間に臨むについて、格別の心の準備をし、態度は真剣そのもの、最初は長時間の緊張の連続、かつ又むずかしく思ったが、一言一句聞きもらすまいと全身全霊を傾倒して集中し、私の心底に浸み入る思いで、これが私の生涯の歩みの基盤になったと思っっている。」(一九回)

これらは成瀬校長在世中、直接先生の聲咳に接した者たちの感懐である。そこには未知の思想に触れ、耳新しい言葉にとまどいながらも、何とか先生の熱意に応えようとした学生たちの姿があり、その努力の中から将来の方向づけを与えられ、それぞれの生きる道を見出していった者も多かったのである。その間には次のようなエピソードも紹介されている。

「入学当時、先生のお講義はむずかしく理解できなかった。何と自分の頭の悪い事かと嘆き、個人面接の時校長先生に申し上げましたら、お笑いになって、『そうか』と、そして『皆がそう思うらしいから、聞いているうちに段々わかるよ』と申され、通学生とて時にお庭で先生の、あのインパネスをボタンをかけずに肩にかけたお姿にお会いすると、よく覚えていて下さり、『この頃はどうか』と申され、直立不動でただ『ハイ』と答えるだけだった自分の姿を思い出します。」(一八回)

「或るむし暑い午後、皆さん盛んに居眠りの最中でした。先生は女子教育の必要性をお話中で、ノート書きに一心の時、先生は机を押えていた手をポケットに入れると急に後の方をじっとご覧になり、一分位だまっておいででした。私は前の方の席でしたが、伸び上って後を見ると、居眠りの人の波でしたので隣の人を起しました。でも先生は黙ってじっとしておいででしたので、居眠りの人々も目を覚ましました。先生は、『今日はこれで講義は終りにする。』と申されましたが、その時の事が不思議に五十年を経てもはっきり頭に残っております。」(一八回)

「成瀬先生の時間に『信念について』のお講義を伺いました。わからないと申し上げると、『あなた方は猫である。猫に小判を見せてもわからない。鯉節を見せたら飛びつくだろう。』とたいへん叱られた事を覚えております。」(一九回)

また時期が進むにつれて、

「少し飛躍的な講義が多かった様です。もう少し系統的に講義を受けましたかと思ひます。」(一七回)

「先生のお話しはむずかしい上、技術的には不満もありました。しかし先生のご温容に接した事により大きな力を与えられ、自分なりに努力しようと努めました。全く大変な努力で成瀬先生のお話しを聞きました。今も尚、あの折りのことを思い出しますと身内に力がみなぎります。とにかく先生にお接ししたことが、私を啓発し、人生の発火点になりました。」(一七回)

「先生は教育者であつても思想家ではないので、講義の論理も飛躍する事が多い。しかし情熱と、何となく夢のある講義で面白く伺いました。」(一八回)

「宇宙の偉大なる神の存在を説かれ、人は主の支配によるものと強く印象づけられました。当時の講義は余りにも雲の上の感じがいたし、ノートもどう取つてよいかわからず、五里霧中でした。」(一八回)

といった感想も出されている。恐らく成瀬校長自身も、時には笛吹けど踊らずのもどかしさを感じられたこともあつたであろう。

#### 麻生校長時代

成瀬校長の実践倫理にかけた情熱と教育理念は、そのの死後も後継者麻生正蔵によつて受け継がれていった。麻生校長時代(二〇回生以降)の教え子たちは次のように記している。

「毎時、心の中に光を与えられるような喜びで緊張して耳を傾け、週一回のこの時間を待ちわびる思いでいたことを記憶していません。」(二〇回)

「遠大な宗教に近い程の熱心なお講義が四年間を通じて深く心に残り印象深く思い出され、自分の心の心棒はやはりそれによつて培われたと現在でも思っている。」(二〇回)

「公立の学校ばかりを歩いてきました為、宗教教育というものを学校で受けたことがありませんでしたので、実践倫理は私には新しい事ばかりで非常に興味がありました。殊に女子である前に人間であるという事にひかれました。」(二〇回)

「女学校では四十五分授業であつたのに、急に二時間の授業、しかも今まで聞いたこともないむずかしい講義でびつくりすると同時に鐘の鳴るのが待ち遠しいこともあつた。でも二年になつて次第に理解できるようになつた。」(二〇回)

「成瀬先生を知らない娘たちに、何とかして創立者の遺志を体得させようとする先生の必死の努力が次第に私にもわかつてきて

熱心にうかがいました。」(二〇回)

「先生の信仰、又哲学の深いお話、十七、八才位の時の、あの新鮮な驚きと喜びを忘れることができません。私の一生を通じて求め続ける求道の道の燈火となりました。」(二〇回)

「私共が実践すべき学問に基礎を置かれ、系統立ててわかり易くお説きになりました。一年の時には本校の教育目的・本学校生の生活・研究目的・授業を受ける心得・社会と個人・価値の種類・科学的にみた個性・気質等々、極めて懇切にお話になりました。細かい心遣いをなされ、親切に温かく成瀬先生の理想実現に協力なされた誠実な先生と、心から尊敬申し上げます。」(二〇回)

「『人類の最高の理想の姿は母性愛の進化した愛の心によって創り出された世界でなければならぬ』というお言葉がすべての思想を貫くものと信じられます。」(二二回)

「田舎の女学校でいわゆる、修身教育、しか受けていなかったのので麻生先生の実践倫理は、はじめはまるで雲の上の話のようであつたが、大変感動を受けた。特に最初の、自我について、というお話は、それまで深く考えたことのない問題だったので大きなショックを感じた。人間形成の上でこの講義は誠に有意義であつたと思う。」(二二回)

「成瀬校長が日本女子大学創立のため、信念に生き信念に終始されたこと、日本女子大学の教育の根本理念である三大綱領、『信念徹底・自発創生・共同奉仕』について現実即した人格形成のあり方、自分の天分の大きさを自覚し、それを十分に生かすこと、生きるということは自分だけの生命でなく、もっと大きな生命の中で生きていくこと、私心、私情を捨て、宇宙の心を持つて心とすることなど、流汗淋漓のお姿でお話し下さいましたの息をつめて伺つたことが思い出されます。」(二三回)

「創立者の精神維持と発展に力を入れられ、創立者の燃えるような力を温く保持されたように考えられます。あの三大綱領の額の下で順々と説かれたお話は、それ程流暢な面白いものではなかったのですが、その熱意に打たれました。毎回の講義は近代及び現代の哲学思想を紹介されて、新しく広い精神的視野を育てていただいたと思ひます。」(二三回)

「先生の読まれた書物、観られた映画、思考されたこと、折ふしのご感想等、すべては先生の深いご体験、人格を通しての講義でした。時には熱涙を以つて話されたことはいまだに忘れることはできません。」(二三回)

「女子の一生の方針として、愛、について終始されました。あらゆる角度から(歴史的、地理的にも)、愛、の分析をされ、科学的と考えられるほど母性愛を研究になつた上でのお話が、今もって身にしてみています。」(二三回)

「沢山の講義を伺いましたが、自己を発見すること、個性を磨くこと、天職を見定めること、これが私には一番の問題の個

所となり、一年から卒業までこの問題と取り組んで過した形です。」(二三回)

「田舎出の女学生には実践倫理のお講義はむずかしうございましたが、それでも純真でしたから、一生懸命に聞きそれを実行していきました。それが現在の自分を造り上げてくれたことを感謝しています。」(二三回)

「人間は欲望が強い程生活力が強いのでから欲望を正しく導き発展させることが大事だとおっしゃったことを覚えていきます。」(二三回)

「私の心の窓を開いて下さり、魂を呼びさまして下さった温いお方だと思っております。成瀬先生のお話しを伺います度に、何か麻生先生がその化身でいらっしゃるように思われ、お二人が一つになって私の魂の奥深くを揺り動かして下さい、終生変わることのない心の拠り所をお与えいただきましたこと、年経る程に感謝の心を深くしております。」(二四回)

「人間として女として真の生き方について、繰り返し教えを受けました。現時点におきましても、その信条が誠に正しいものであったと思います。自分を生かすためには、他を生かすことであると、生きる限り信じて居ります。」(二四回)

「先生はよくダルトン・プランとおっしゃっていらっしゃいました。これは現在の六・三制における、宿題で実力をつける方法、をすでに大正年間に提唱されていらしたわけで、誠に先見の明がございましたと驚いたり、感心したりしています。」(二四回)

「信念徹底、自発創生、共同奉仕についてよく伺ったように記憶いたします。愛、至誠如神、母性愛、ということも講義にありました。卒業の際の回生の決議文中に、愛神無我、という事を誓ったのも、先生のお講義の影響であったと存じます。」(二四回)

「自分に少しでも哲学的に物事を考える面があるとすれば、それは実践倫理の時間に麻生校長によって教えられたのだと思えます。」(二四回)

「高等女学校時代と全く違ったこの時間には最初はびっくりしました。でも自発創生、共同奉仕・信念徹底等、ここで初めて精神生活に開眼させられました。麻生先生は創立二五周年を期して総合大学建設を希望していらっしゃいましたので、その実現の為に拳を振り、ある時は涙をこぼしてご自分の意見を述べられた様子が印象的でした。」(二五回)

「四年間を通して麻生先生に叩き込まれた信条が、今日確固たる信念となって心強く生きていかれる事をいつも感謝して居ります。」(二五回)

「麻生校長の平和主義と申しましょうか、広い人類愛に徹したお考えが記憶に残っていて、現在の私の生活信条となっているよ

うに思います。」(二五回)

「社会情勢を知り、それに対処する態度等を教えられました。」(二五回)

「人生について、又女性として指導的立場に置かれる私共の使命、責任というものをひしひしと感じさせられました。」(二五回)

「宗教の必要を教えられ、今も宗教に関心を持っておりませんが、キリスト教でも仏教でもない帰一教的な何かを信じたい気持ちを持っています。神愛・母性愛等についての講義は今も心に残っています。」(二五回)

「自分の物の考え方、大きく言えば人生観、特定の宗教にとらわれない広い意味の眞の信仰等、人生に処する態度の根本的なものを植えつけていただけだと思っている。」(二五回)

「麻生先生の実践倫理は講堂の広い場所であり、お声が通らないこともあって、全部了解するのに困難であったが、今も心に残っている教えは、『人生を歩むには片手に聖書、片手に経済書を持っていくべきだ。』ということ、これをもっと広い意味に解して、精神生活、物質生活の調和を保ち、より高い生活への指針としている。」(二五回)

以上みてきたように、それぞれとらえた角度は異なっても、実践倫理の講義を通して啓発され、人生の指針を与えられたことに感謝している者が多い。しかし、こういった感想を述べている者もある反面、

「真面目な立派な先生だと思っておりますが、余りにも『成瀬先生、成瀬先生』と言う声が大きく、麻生先生御自身の影が薄れてしまう感じがしました。」(二〇回)

「哲学的・心理学的・宗教的基礎や視野を持つことができて大変嬉しく思いましたが、講義が断片的であったように思います。」(二一回)

「必修科目であったので、興味の有無に関係なく聴講しなければならず、仕方なしに出席していたような者もあったと思う。」(二二回)

「大変緊張した心持でお講義を受けました。今思うと何故もつと楽な気持で聞けなかったかと残念に存じます。周囲の厳しい空気に身も心も硬直した態度でありました。」(二二回)

「大きな講堂で全学年の生徒と一緒に講義を受けましたせいか、何となく興味が持てない上にノートの提出をせまられたりで、大分困った次第です。しかし講義の内容は、哲学が主で、又東西の文学や詩歌などが引用され、実に深みのあるよいお講義であ

ったと思います。」(二三回)

「内容そのものは今から思うと実に立派であつたと思うのですが、若い頃の事として、それにユーモアにも乏しかったのか、何か退屈したような印象が残ります。自分の怠慢と、とかく興味本位の若い時代の欠点だつたと反省と悔やみの交つた感慨です。」(二五回)

「一つの考え方を押しつけられるより、色々な思想をきかされて、自分自身で考えさせていただく方が生き生きしたのではなかつたかと思ひます。」(二五回)

「講義を時間内ぶつ通して聞くだけで、教授との問答が全然ないのは淋しい気がした。時間中、多少の問答はあつてほしかつた。」(二五回)

「リーダーの先生方が実践倫理の時間をあまり神聖視しすぎておられ、緊張しすぎていられたので重苦しい空気でありました。」(二五回)

「講義の内容は非常に充実したもので、よく用意されて講義に臨まれたことは感じましたが、講義の時間が昼食後の午後一時からであつた為、眠くて困つたことがありました。」(二五回)

といった素直な意見もみられるのである。しかし、学生時代に批判的であつた者たちでも後年になるに従つて、これらの講義によつて培われたものがいかに大きかつたかを認識し、次のような感想を寄せている。

「公立の女学校を卒業したので精神教育を受けていなかった為、入学早々濃厚な精神主義教育に会つて面喰つた。又エマーソンとか、カーライルといったようなむずかしい本をいきなり読まされ、大いに反発したり苦しんだりしたが、今にして思うとすべて感謝です。」(二〇回)

「入学当初は何やらむずかしく、今までの生活とは全く違つたことを何うようで苦痛だつたこともありませう。年と共に自分にも理解され共感もあり、今日に至つては時々あの寒い暗い、時には暑くて眠くなるような講堂での講義が、何かの折りに力強い生活の指針となつて居ることを感謝して居ります。」(二二回)

「大して興味もなく、出たりさぼつたりしていましたが、今にして思うと自分の生活がそれによつてある程度規制されているように感じます。」(二四回)

「繰り返し、繰り返し、成瀬先生のお話やその遺訓、理念を聞かされているうちに、段々とその道の姿がはつきりしてきて、や

表10 実践倫理

項 目 回 生	肯 定 型			批 判 型			価 値 認 識 型	理 解 困 難 型	そ の 他	無 答	合 計	
	全 面 肯 定 型	理 解 肯 定 型	心 情 肯 定 型	全 面 拒 否 型	内 容 批 判 型	印 象 批 判 型					実 数	%
大 正 前 期 (10~15回)	11.8	10.8	30.1	—	—	1.1	4.3	10.8	23.6	7.5	93	100.0
大 正 中 期 (16~20回)	3.8	11.4	28.4	—	2.7	0.5	8.7	10.9	18.5	15.1	185	100.0
大 正 後 期 (21~25回)	2.7	13.8	24.4	0.8	2.4	8.1	11.9	7.9	19.2	8.8	370	100.0
全 体	4.3	12.7	26.3	0.5	2.2	5.0	9.9	9.1	21.5	8.6	648	100.0

はり自分はこの学校に学んでよかったと思うようになりました。自然に学びとったものは今に至るまで心の奥に流れて、生きるということの出発点をしっかり学ばせていただいたことを深く感謝して居ります。」(二四回)

「むずかしい言葉の講義は大変難解で、正直な所、感動を受けるというより苦痛であったように記憶しているが、それを具体化する修養会によっていつか心の底に動くものが芽生えているのに気づき、今に至るまで根をはっている。」(二四回)

「寒い冬、暑い夏は実倫の時間が早くすめばいいなと思ったこともありましたが、卒業して年をとるに従って、学校のそして先生方のありがたさがしみじみと深まっています。」(二五回)

「学生時代は特に興味も関心も薄かったと思いますが、卒業後現在も、宗教、哲学、文学或は科学等に関心を持ち、常に何か学ぼうとする意欲を保ち続けていることは、実践倫理の講義で広く社会に眼を向けてものを考える基礎をつけられた為と思います。」(二五回)

以上、代表的な意見、感想、を紹介してきたが、これらを含め、アンケートにあらわされた考えを、「肯定」・「批判」・「価値認識」・「理解困難」などの型に分類し、時期別に応答結果をまとめてみよう。表10に示すように、全般的に「肯定型」が最も多く、「批判型」はわずかである。当初、批判的であった者でも、後年その価値を認識した「価値認識型」、理解が困難であったと述べている「理解困難型」とはほぼ同比率を占めている。肯定型では、講義の内容について「理解」した上で肯定している者より、講師の人格、熱意などに傾倒し「心情的」に肯定している者の比率が高い。中期・後期と時

代が進むにつれて、「心情肯定型」がやや減少し、「理解肯定型」が若干増加する傾向がみられる。また後期では「理解困難型」がやや減少し、「価値認識型」の占める割合が多くなっている。「ただよかった」といった種類の応答は「全面肯定型」として分類した。「批判型」では、講義内容についての批判というよりは、その場の雰囲気、印象などについて批判している者が多い。自分自身の受けとめ方の記述はなく、内容・状況などについてのみ説明しているものは「その他」として区分した。

これらの分類は、あくまで便宜的なものにすぎず、このような回答内容を分類すること自体に無理があるが、一般的な傾向をつかむための一つの試みとして参照していただきたい。

## (二) 講義

大正期に本学の講義を担当した者には、成瀬校長の他、第二代校長麻生正蔵（倫理・哲学・心理学・教育学）、長井長義（化学）、丹下梅（化学）、大沢謙二（生理学）、松本亦太郎（心理学・美術史）、渡瀬庄三郎（博物学）、阿部次郎（美学・現代文学思想）、姉崎正治（宗教学）、木村泰賢（宗教学）、桑木巖翼（哲学）、武島又次郎（国語・国文学）、久松潜一（国語・国文学）、前島春三（国文学）、近藤耕造（物理）、山内繁雄（生理学）、大橋広（生物学）、奥田義人（法学）、中村進午（法制）、二木謙三（保健）、中村孝也（日本史）、高橋誠一郎（経済史・社会思想史）、塩沢昌貞（経済学）、戸田貞三（社会倫理・防貧・救貧事業）、永井享（社会政策）、友枝高彦（倫理学）、大島正徳（倫理学）、井上秀（家政学）、河野清丸（教育学）、渡辺英一（修辞学）、岸本能武太（英語・国文学）、上代たの（国文学）、ミス・フィリップス（英語）、ミス・クラーク（英語）、手塚かね（西洋料理）、白井規矩郎（体育）、木内愛（体育）、茅野儀太郎・雅子（近代文学・文芸思潮・短歌）、橋本進一（言語学）、などの諸氏の名がみられる。

これらの講師たちの講義を、当時の学生たちはどのように受け止めたであろうか。



まず、講義についてみていくことにする。

### ■講義について

「当時はどの講義も立派な、大抵は博士の方々で面白く教えて下さいました。今日、孫達に化学の記号などみてやれるのも、お講義の賜物と感謝しております。」(一〇回)

「体操が当時より外国式でピアノの伴奏に合わせて現在のテレビ体操と同じであったし、ソーシャルダンス等も習った。(当時はそんな学校は他になかった。)成瀬先生は講堂をダンス・パーティに許された位であった。」(一〇回)

「学科の講義はその当時の一流の先生方のお講義でしたから、大変立派なむずかしいものでした。それでも学芸係として、皆でわからないところを知ろうと随分努力し、段々面白くなってまいりました。」(一一回)

「家政科なので大体講義を聞くだけで試験のない科目が多くありました。試験のことを思わず、聞かせていただく講義は誠に楽しく有益でした。」(一一回)

「ご立派なむずかしい講義、ノートを取るだけが精一杯で、ノート整理が毎日の仕事でした。むずかしい参考書をこなす力もなく、苦しかったことを思い出します。」(一一回)

「いずれの先生の講義も親切で楽しかった。」(一二回)

「どの先生も立派で感謝しておりました。授業としましては、研究の時間とディスカッションの時間が欲しかったと思いました。」(一三回)

「各講義については、それぞれの大家の先生がいらっしやいましたので大変合わせでした。」(一三回)

「渡瀬庄三郎先生の講義は組全体が何となくということなしに博士に心酔しておりました。学理でなくお人柄として……今と違って科学として、学問研究としての感じや価値ではありませんでした。」(一三回)

「講義としては特に心に残るものはないのですが、講師の先生のご人格に接し得たことはありがたいと思っています。」(一三回)

「各先生方は専門の知識を授けられたこと以外に、先生方のご人格が言葉のはしはしにまで表われ、人生の師として今もなお尊敬いたしております。」(一三回)

「講義はむずかかったがとにかき勉強しました。熱心に聞かなければ落伍するので真剣でした。長井長義、奥田義人(私の在学中、法務大臣になられた)姉崎正治、大沢謙二、井上秀の諸先生の講義は今なお、脳裏深く刻まれています。」(一四回)

「東大の今でいうアルバイト的な先生方の講義が多かったので、卒業してから帝大の聴講に行く機会を作られたと思います。本  
当の大学の講義に憧れていました。」(一六回)

「当時の一流の先生方の講義が聴かれましたことは誠に幸でした。」(一八回)

「基礎の講義を受けたのですが、先生方の豊かな人間味が感ぜられ、自然にその講義の中に投入していったものでした。」(一八  
回)

「家政学を系統的に学んだことは、学問を実践的に広くみる視野を深めたことに役立っていたと思います。」(一九回)

「私共の時代には必修科目の他に副専攻・自由選択科目があつて、この制度はともよいと思つています。時間があれば、文科  
の方の聴講もできるというような仕組になっていました。」(一九回)

「自分で選択した学課でしたから講義は大体楽しかったと記憶しています。それにあの頃の先生方は講義の先生だけでなく、学  
生との接触が多かったと思います。」(二〇回)

「先生方が素晴しかったので幅広い啓蒙を受けることが多かつたし、先生から受ける人格的な影響が豊富であつた。」(二〇回)

「今にして考えますと、社会に出て家庭に入る女子にとっては研究そのものも学生生活として大事ですが、講師のご人格が一番  
長く生涯心に残されると思います。」(二〇回)

「それぞれの先生のご人格が学生の精神生活にも働きかけ、生活を楽しく豊かにし、学生の人格形成に自ずから役立っていたと  
感じる。」(二〇回)

「成瀬先生の精神教育に理解のある教授の方々が、どっしり学校に落着いていらして実力をつけて下さつたこと、クラスの人数  
が少なく先生方と学生の親密なつながりがあり、専門の授業のうちに、本学の精神的な感化力が大きかつた事が挙げられます。」

(二〇回)

「各科別の小数の教室の講義は、本当に人間的なその先生方の人格に触れられる立派なもので、ありがたく思いました。」(二二  
回)

「大正時代の女子大の講師は、東大、慶大、早大それぞれの有名な当時一流の先生方が来て下さり、個人的にもよく指導してい  
ただき、忘れることのできない教師と生徒とのつながりがありました。」(二二回)

「大抵の先生方が、いかにもご自分の専門に生命をかけているといった情熱が感じられれば良かったです。」(二二回)  
「先生と生徒とのつながりが、親しさと尊敬と和して美しいものでした。」(二二回)

「どの先生も立派で一生懸命にノートを取りましたが、ついていけないようにあせった事も思い出されます。」(二二回)

「人間生活の基礎になる勉強・研究、人生を哲学的・宗教的に考究する講義は、今まで未知の世界であったため大変な喜びをもつて勉強しました。しかし、研究といったことに重きを置かれたので、中々追いついていけず苦しかったことを覚えておりません。」(二二回)

「当時、専攻科目・副専攻科目とあって、副専攻科目は自由選択であったので、興味を持つ科目はどうしても自由選択科目の講義であった。そして先生方との交流も深く、一番思い出も多い。必修科目の講義も面白いこともあるが、これは多人数(学年全体又は学科全体)なので、印象といっても、壇上の先生としての特徴なりくせなりであって、人格的なものはなかった。」(二二回)

「講義時間と次の講義時間の間に研究時間があるのは大変よいと思った。選択科目があった事もよかった。」(二三回)

「家庭科の学科は殆ど理解できて身についたと思います。論理的なむずかしい学科については勉強不足の為か、今思うと誠に残念な程身についていません。しかし、物事に対する理解力は充分養われていた様に思います。」(二三回)

「当時その道の第一人者であられる先生方の講義で、入学当時胸をわくわくさせたものです。」(二三回)

「学問をするということを高く評価する雰囲気があり、人生を真面目に探求する気分が学園に漂っていたように思います。」(二三回)

「白井先生の体操は面白いと思いました。音楽のリズムに合わせて自習させるなど、現在ではあたり前の事でも当時としては斬新でした。何しろラジオもない時代でしたから。日本女子大には前衛的名教授が沢山おられました。」(二三回)

「生徒の人数も少なかったし、風格のある講師の人格に触れるだけでもよかったです。」(二三回)

「家政科であったために資格にとられずに勉強できてよかったと思います。専攻科目に集中できて研究の仕方を習得できました。自分にやる気がないと素通りできる利点と失点があります。」(二三回)

「何もかも新しい知識でありましたから、大いに楽しく意欲的でした。」(二四回)

「学問の序の口をのぞかせていただいたようなものだと思いますが、一年生の時には誠に得意な気持ちで楽しい勉強であったように思います。」(二四回)

「講義そのものは田舎の女学校を出たばかりの私にはかなり高度のものだったように思います。それだけ格調の高い雰囲気の中でお教えたいただいた事を仕合せに思っています。」(二四回)

「体育の授業は大変充実していました。英語の号令、機械体操、社交ダンス共にとても楽しく一心にいたしました。」(二四回)  
 「総合していえることは、先生方の各自の専攻への真面目な態度がにじみ出ていた点、学問へかけられる情熱と、生徒の質問に對しての誠実さでした。」(二五回)

「もっと知りたい、学びたいという意欲を起させられた。教授法なども、ダルトン・プラン等新しい事を習いましたので、戦後アメリカ式の教授法になってもまごつきませんでした。」(二五回)

「よい先生方がおいでになりましたので、専門の学科については大変満足しておりました。そして卒業後も続けて研究していきたい気概をもたされました。なお選択の科目制度がありましたので、専門以外の学科で興味のあるものの講義を受ける事ができて研究生活に豊かなものがありました。」(二五回)

ここに出てくる科目選択制度とは、従来の必修科目を減少し(全体必修科目は実践倫理と体育のみとする)、選択科目の範囲を広げたもので、大正六年四月より実施された。選択科目は、主専攻科目、副専攻科目、自由選択科目に分かれ、主専攻科目の選択によって、所属学部が決定された。同時に、授業時間が減少され、学生の出席規定時間は週一九時間〜二五時間として自学自習を奨励した。また、学習年限も三年〜五年と個々の能力、健康、その他の事情によって伸縮が認められた。これらは、自学自動主義的教育論の具体化として、また、女子総合大学実現のための一つの準備として実施されたものである。

こういった意見がある反面、次のような印象を抱いた者もある。

「専任の先生が少なかったので、名高い博士がおられた割に充実感が少なかった。」(一〇回)

「講義の内容がむずかしくてわからないまま、ゆっくり復習する時間がなかったように思いました。」(二一回)

「講義はいずれも一流の先生方でそれぞれ面白かったのですが、女学生から一足飛びに背のびして、間に合わない感じがしたこともありました。」(二二回)

「私達の時代には、ゼミ、というものがなかったので、二時間なら二時間だけの講義で物足りないものであった。しかし、一流の先生方のお講義には心をうたれるものがあつた。」(二二回)

「クラスが縦・横と各科合同の場合には大きな講義室で先生の講義を速記し、およそ今考えてもつまらない時間つぶしをしたもの

と思います。その先生方の講義録を読めばよいような印象でした。」(二二回)

「とにかくその頃の各界の一流の權威ある先生の講義を聴き得たことは、嬉しくもあり誇りでもあった。しかし、現在のようにマイクなどのない時代の学年単位の講義で、難聴だったことは不満であった。」(二三回)

「科目が沢山あって浅く広い百貨店式でした。もう少し専門的なものを身につけたかった。」(二三回)

「帝大、慶大、早大、高等師範など一流の大学教授の講義が多く、名講義を伺えたことは実に仕合せであったと思います。ただ、男の教授の中には、女子は頭が低調であるといつて、わざわざ調子の低い講義をなさる先生がなかったわけではなく、そのようなことが感ぜられると勉強する気にならなかった思い出が残っています。」(二三回)

「一般教養は大切かもしれませんが、余り幅が広く奥行きが浅い様に思います。もっと専門課程を突っ込んでいった方がよいと思います。」(二四回)

このような側面があつたにしても、全般的には良き師との出会いによって、その人格的な感化を通じて次第に学問の世界に目を見開かれていった様子がうかがえるのである。

大正十年九月には社会の要請に答えて社会事業学部が開設され、「児童保全科」、「女工保全科」の二部門が新設された。この学部に学んだ者たちの感想を拾ってみよう。

「今でも一番深く心に残っていますのは社会倫理の中で、戸田貞三先生が『私共はその事実がわずか一%にすぎないという事で、その事実を忘れてはならない。当人にとっては一%即ち一〇〇%である』とおっしゃったことです。」(二二回)

「社会学部の講義はすべて興味を持ちました。殊に綿貫・永井・戸田先生の講義が印象に残っています。自分は恵まれた境遇に育ちましたが、四年になって実際に施設等を見学し社会の恵まれない人に接し、結婚して子どもを育て上げた上は少しでも社会に貢献したいという理想を持って居りました。」(二三回)

「社会事業学部の講義は活気にあふれ大変興味があった。私の今日の精神生活、社会生活の基盤となる程感銘深かった。」(二三回)

「大正年間にこのような教育を受けられたことは、私の人生にとって大変意義深いことであつた。」(二三回)

「どの講義もよく、専門のものは卒業後役立つ。」(二四回)

「社会学・社会政策・社会心理等の講義は興味があつた。心理学も現在の仕事に役立つ。新聞・ニュース等の時事問題に接しても理解の助けになり、子どもとも話し合える喜びを得ている。」(二四回)

次に、卒業後幾十年を経過した今もなお、人々の心に温かく鮮やかな思い出として残っている講師たちの印象を紹介してみよう。

#### ■講師について

**麻生正蔵** 「実に祖父のような優しさと温情をもって、心の隅々まで浸み渡るご親切な方でした。」(一〇回)

**哲学・心理学**、ことに児童心理は印象深く伺いました。」(一一回)

「温かい人格の溢れた講義でした。」(一六回)

「麻生校長の個人面会は印象的で強い記憶を今に残しています。特に卒業前の面会で先生は『この学校を出る人は、何の宗教でも必ず一つしっかりとしたものを持たない者は卒業できないくらい確信を持つてほしい。』と温情のある面持ちで言われたのを忘れることができません。」(二二回)

「麻生校長には面接で一度お目にかかっただけでしたが、『友達とけんかするのさ』『いいえ』『あまり自尊心が強すぎて、けんかもようせんのだろう。もうよろしい』これで恐ろしく偉い先生もいるものだとびっくりいたしました。」(二二回)

**長井長義** 「先生の講義は田舎出の私にはとてもむずかしかつたのですが、日常生活と切り離すことのできない学科で益々必要性を感じております。先生は女性の向上に努められ、目黒ビル会社、逗子のヨード会社に連れて行って頂き、見聞を広めることができました。」(二一回)

「化学の研究の難しさ、深さ、又折りにふれてお聞かせ頂いた処世の話など、今でも思い出されて貴いご恩と思っています。」(二一回)

「田舎の女学校の出身で化学記号など知らず苦しみました。先生の所謂詰め込み主義でない指導法に驚きました。」(二三回)

「長井長義博士の四年間のご薫陶が一番楽しみでした。小人教の人間的なつながりが一番身についております。」(二三回)

「教授の方法が一寸変わっていて、講義の内容も豊富であり、お人柄がにじみ出た講義で印象深かった。」(二五回)

**井上 秀** 「食物のカロリー計算など初めてお習いし楽しうございました。この計算はやがて家事教科書に載るようになりました。その先鞭をつけたのは母校と伺っております。又建築の面においては英国の建築として大隈邸、フランスの住宅として三

井邸などを見学させていただき、私共の盲眼を開いていただきました。」(一一一回)

「食品のカロリー問題は当時新しいものであったし、病人料理を自主的にクラスで勉強したこと、住居の問題では先生のご指導で市内の洋風建築を見て回り、各自小さな研究課題をもって発表会を開いた楽しい思い出がある。」(一一三回)

「井上先生の論文『最低生活の研究』は私の生涯の指針として生涯を通してありがたく思っております。学校を卒業してから大震災を初めとして世界大戦に至るまで、その後の生活すべて最低生活の実践であったと思います。」(一一四回)

「三年間にわたり家事一切(衣・食・住・家庭管理・育児法等)の講義を伺った。先生の講義は早口で講義に熱中すればする程早くなり、学生はペンを置き、先生ももう少しゆっくり講義して下さいとお願ひしたことを記憶している。」(一一四回)

「いつも温情にあふれ、春の日の感じでした。」(一一八回)

「家庭管理は当時としては最も新しい家庭観を教えていただいたのだということがよくわかる。」(二二五回)

「食物学講義は非常に学力を深めていただいたものです。当時英語の原書を使って学びましたが、先生が淡々として述べられるにもかかわらず、ノートを整理してみると実によくまとまって頭の中に入り、当時としては大変程度の高いものであったように思います。後年、栄養学など非常に進歩してきたものの、その時に得させていただいた知識は少しも遅れをとらず、いつまでも役立っています。」(二二五回)

「原書を使った講義はむずかしかったが、ビタミンの話など当時としては最高の知識を得られたのが嬉しかった。」(二二五回)

「講義が原書でしたので、その当時も字引と首つ引きで大変でしたが、今思えばもっと続けばよかったです。」(二二五回)

**松本亦太郎** 「週一回の心理学の講義は実に私共を引きつけました。教室内のみならず通学途中でお会いしても先生独得の会話は忘れ得ぬ事でございます。」(二二六回)

「帝展に連れて行って下さって、伊藤深水画伯の『黒髪』の絵について心理学上から、笹の一本一本にも黒髪を中心にして心が表わしてあると説明していただいたことが心に残っております。」(二二八回)

「実験心理学の時間はむずかしいけれど心をひかれました。」(二二九回)

「美術史の時間は、毎回先生自ら日本の絵画、桃山〜江戸時代の浮世絵の数々の複製の写真を沢山抱えてこられ、丁寧に説明されましたのには本当に頭が下りました。」(二二二回)

「美術史講義を二年伺いました。参考写真を壁に沢山張って見せて頂いた思い出は、昨今のテレビ放送(美術・歴史関係)で再教育の楽しみを味わっております。」(二三三回)

阿部次郎

「文学原理論・美学等実に新しく、心の眼を開かれました。」(一八回)

「文学原理論・美学の講義により、心の深みに沈潜することを知り、形式、表面的なものに対して生涯反発を持つ人間になりました。」(二〇回)

姉崎正治

「高い人格に啓発されました。」(二一回)

「心に響く根深いもので、宗教心の基礎づくりとなりました。」(二二回)

桑木厳翼

「物静かにじゅんじゅんと説かれるので楽しく伺いました。或る日講義の途中、ふと顔を上げられにっこりして犬が入ってきた。」(一八回)

「学者の風格、人間としての親しみ深さに心ひかれる。学期末の一つの仕事として、当時出版されたデューイの『哲学の改造』を自分で読んで概要を書いて出すようにと選ばれたが、よい勉強になった。」(二〇回)

「いかにも哲学者らしい現実離れた天真爛漫なお顔、動作等、今なお目に浮びます。」(二二回)

「講義の内容はもとより、先生の人格の立派さがにじみ出て大変心を打たれ、教卓に近い席を取るために早朝登校したものであった。」(二三回)

「哲学概論・哲学思潮など、今日なお、私達の心の奥にしみ込んで物の見方に役立っている。」(二五回)

手塚かね

「お母様とおしたい申しした優しい、しかも行き届いた教授ぶり、今だに忘れられません。」(一〇回)

「料理室でのマナーが厳しかった。ご馳走の出来、不出来は勿論だが、私達の身づくろい、又調理台の整理や跡片付などまとめをするのではなく、作りながら不用のものは整理して、雑然と器物などを並べることは許されなかった。」(二〇回)

武島又次郎

「師範家政科を選んでおきながらその方の学科についての記憶は全然ありません。そして自由選択で選びました武島先生の教えが今でも頭に浮んでまいります。」(二一回)

「四年生一人一人に短冊と扇子にご自分のお歌をご自筆で書いて下さった事など、敬愛の念を深めさせられたものでした。先生の掛物の書は今でも大事にしております。」(二二回)

「国文科館の二階に、ユートピア」と称する部屋があって、国文科の先生方の休憩なさる所でした。寮生が交替でお茶やお菓子等を毎日整え、朝は七時から八時の間に行つて掃除をしておきました。先生と親しくお話できたのもあの部屋でした。先生と生徒との交わりは、温かい会話から育つていったように思います。」(二二回)

「とても温かくお導き下さった事、強く心に残っています。」(二四回)



「万葉集・源氏物語等をお教えいただきましたが先生のご人格は、お講義の中に生きておりまして本当に温かい楽しい時間でございます。」(二五回)

「国文科のお父様のような先生でした。上代の文学を教えて下さったご様子は、上代の大官人の趣をもっていられました。」(二五回)

**木村泰賢**

「私の人生に感銘の深いお講義でしたので、昨年全集を求めまして学生時代を思い出しています。」(二二回)

「人生というものを深く考えさせられました。特に仏教・信仰の諸問題について意義深いものを教えていただいたと思います。」(二三回)

**近藤耕造**

「先生の原始仏教思想論は、自分の精神面に非常に強い理論を与えて下さったと強く印象に残っています。」(二四回)

「先生の講義は大変人気があり、殆んど各学部(家・国・英・師・社)の学生並びに寮監の先生方が聴講された。」(二四回)

「私に仏教の芽を与えて下さいました。」(二四回)

「現在のお講義に対する私の考え方の基礎が養われたと思う。」(二五回)

「業のお講義がその時は難しく思いましたが、今日私の人生観を強く支配しています。」(二五回)

「物理の理論を具体的に日常生活に結びつけて、実に巧みに教授されたのに感服しました。」(二二回)

「明快な講義でよく頭に入りました。」(二五回)

**山内繁雄**

「立派な板書など今でもよく覚えていています。未熟な学生に動じない立派な人格者、腹の底から学生を愛するが故に、どなられてもそれは学生にとって終世忘れたい教訓であります。」(一九回)

**中村進午**

「法律と人間、社会の関係を色々の面から興味深く話されました。」(二二回)

**綿貫哲雄**

「先生の講義を伺い、早く卒業して社会事業に働きたいと思っていました。」(二〇回)

「先生の社会学は、生きた社会を相手にして考える糸口を与えられたような感深いものがありましたことを、いまだに覚えて

います。」(二二回)

**岸本能武太**

「本も何もお持ちにならず机の間をゆっくり歩まれながら文法の説明をして下さった先生の福々しいお顔が、

いまだに見えるような気がいたします。」(二二回)

「先生の英語・英文法の時間は単に概念的な講義でなく、

実際生活に結びつけて教えていただいたことを覚えています。」(二五

回

次に、特に印象に残った講師として、比較的多くの者が共通して挙げた諸氏を時期別に記しておく。(表11参照)

表11 印象に残った講師 (順度順)

大正前期	大正中期	大正後期
義秀蔵二太ね愛造午	郎郎秀治翼義ね郎三	郎郎賢秀義雄翼也郎一三
長正謙牧か耕進	亦次正蔵長か次謙	次太泰長哲蔵孝一潜春
井上生沢藤塚内藤村	本部長上崎木井塚島木	又亦村上井貫木村橋松島
長井麻大後手木近中	松阿井姉桑長手武二	武松木井長綿桑中高久前

のが挙げられている。

雑誌では「中央公論」・「婦人公論」・「婦人の友」・「新潮」・「改造」・「文芸春秋」などが比較的よく読まれている。

(三) 愛読書

次に、大正時代に女子大学の学生たちが愛読した書物を挙げてみよう。

各学部に通じた傾向をみると、日本のものでは夏目漱石(虞美人草・全集)、道草・全集)、有島武郎(惜しみなく愛は奪う・或る女・生まれ出づる悩み・全集)、島崎藤村(破戒・夜明け前・春・家・千曲川のスケッチ・詩集・全集)、倉田百三(出家とその弟子・愛と認識の出發)などが最もよく読まれている。次いで国木田独歩・石川啄木(詩集・全集)、森鷗外(雁)、徳富蘆花(自然と人生・思い出の記)、阿部次郎(三太郎の日記)、西田幾太郎(善の研究)などがある。

また、外国のものではトルストイ(戦争と平和・復活・アンナ・カレーニナ・全集)、エマソン(論文集)、ドストエフスキー(カラマゾフの兄弟・罪と罰・虐げられた人々・全集)などが圧倒的に多く、次いでチェホフ・ツルゲーネフ・ゲーテ・タゴール・ベルグソン・メーテルリンク・ニーチェなどのもの

#### 四 自治生活

日本女子大学の教育の一大特色をなすものに自治生活がある。成瀬校長はその著『新時代の教育』（大正三年刊）において、「教育の根本方法は、青少年の自発的動力を開発培養し、其の効果を實地に生ずべき生活法を自得せしむるに在り、是れ即ち吾人の所謂自学自動主義の教育なりとす。」（『新時代の教育』二一七頁）と自学自動主義の教育を提唱し、この具体化として自治生活の必要性を次のように説いている。「自ら為し自ら治むる生活法は、自動的意志の社会生活上に於ける発表にして、人生のあらゆる場合において必要なり。家庭に於て、学校に於て必要なると共に、社会に於ては殊に必要なりとす。自ら為し自ら治むといふ一面に於ては、必ず他人のあることを予想す。即ち自治の意は孤立に非ずして共同生活の方法なり。共同生活を円満にし、且つ共同関係の中に独自の生活を保持して行く方法なり。是故に自治生活は、個人と社会を調和し、個人主義と国家主義を調和し、各個人の生活と全体の活動を調和する方法なり。」（前提書、二四七頁）

この成瀬校長の教育理念、教育方針に基づいて創立当初から学生自身の手によって自治組織が設けられ、学校全体を一つの自治体と見なして自治生活が形づくられていった。

自治組織は創立当初の明治三十四年には一級に代表者数名を置き、級に関する一切の事務、教師との連絡、他級との交渉などにあたる程度であったが、次第に組織的となり、学部（縦の会）、学年の会（横の会）、級会、修養会、懇話会などの会合から、運動会、研究発表会、展覧会、音楽会などの諸行事もすべて自治生活から生み出されるに至った。各学部・学年・学級相互の連絡も緊密さを増し、大正十二年には連絡機関として委員制度が設けられた。また主任・副主任・代表主任などが置かれ、幹部会（四年級委員・三年代表主任をもって構成）、各学部・学級の委員会などがつくられた。同時に理想会・修養会（全体・各学部・学級・組・係）、夏期修養会などの修養機関も整備された。各係（研究・趣味・体育・整理・経済・編集・栄養など）の会も活発になり、各種の学校行事はこれらの係が中心となって計画

し、全校に呼びかけ、展開していった。

当時の学生たちはこれらの自治生活をどのように考え、実践していったのであろうか。

### ■自治生活全般

まず自治生活全般についてみていこう。

「種々の会合により自分の思想をまとめる習慣をつけられたと思う。」(一三回)

「場合によっては窮屈な感じを持ち、不自然な形に終ったこともあったが、それによって精神を磨かれ堅い信念を持つ要素となつた事は、種々の会合によって得られた賜物と思う。」(一三回)

「この自治生活によって自分の意見を述べることに次第に慣れてきました。発表するということは、自分の頭の中にその内容を明瞭に組み立てなければなりませんので、現実社会につながる仕事をしていくのに大変役立ちました。」(一四回)

「目標を定めて行動する活動の運営としては、これらの会が必要であるから、勉強も実験もこなせなくてはならぬ。随所に主となれば随所また楽しの域にならねばならぬ事を教えられた。」(一四回)

「実に会合が多いことで入学当初驚きました。通学生でした関係上、放課後の会で結論が出ず當々と続き、バスもタクシーも無い頃でしたので帰りが遅れ困つた事を思い出します。」(一五回)

「女学校時代と違って会の多いのに驚き発表に悩まされました。そして地方の女学校でも、意見をまとめて発表するよう訓練すべきではないかと考えさせられました。」(一七回)

「成瀬先生の教育方法は、人は究極において自己が確立した理想を生活に実現するのが真の道徳であるとの見地に立って自律自治主義を採られ、学生の修養も注目的、試験勉強的でなく、創始的、自発的努力で物事が漸次完成する方法をとられた。自治組織も学生の集団生活においてこれを育てんとするもので、知らず知らず影響を受けたことを思う。」(一七回)

「家庭では女の子でしゃべりとか発表は控え目に育てられた故、一番困難なのは発表の時で、ご自分の考えをスラスラとお述べるなる方は何と家庭教育に恵まれた方かと、今考えても大変なショックで、家庭教育の大切な事を身をもって経験いたしました。」

(一七回)

「毎週の自己の意見発表、これが自分の思想を自由に発表するという訓練となつた。」(一八回)

「人間のつながりを非常に大切する習慣が身につき、人のために心の限り誠意を尽くしてやろうという気持が日常に働いています。」(二一回)

「入学当時は会ばかりで、いつから講義が始まるかと思っただが、これらの会により段々発表力も養われ自分の考えもまとまり、次の会で進んで発表に立つ事ができるようになった。」(二一回)

「自治生活(他の学校にはまだなかった)によって自分たちが社会人として立っていく上に教えられたことがよかったと思います。」(二二回)

「自治生活はその当時の他の大学・専門学校などに比べてとてもよくできていると誇りを持っていました。」(二二回)

「目まぐるしい程、いろいろの会を重ねて忙しかったのですが、あの修養会があったからこそ今日社会に出て荒波の中を漕ぎ抜けていけるのだと感謝しています。」(二三回)

「点取り虫であった友達よりも自治生活に入り込んでいたために、幅広い人生航路がみられたと思います。自治生活で時間を多くとられても集中して勉強できた自覚は持っています。」(二三回)

「人生の最後の日まで続く修養の出発点になったことを感謝している。」(二三回)

「結論会での発表によって、婦人が人前で話すという事の良い訓練となった。自分たちが自治的に運営していくことによって、社会に出ても責任ある行動を団体の中でやっていくことができる能力を身につけることができた。」(二三回)

「自治生活は学生が学園の活動に責任を持ち、また、ひととしての内面を深める上で学生生活を通して実に貴重な体験であったと思っています。」(二三回)

また、クラス会・個人の会・係の会・縦の会・横の会・瞑想会などといった個々の会については、次のような感想が述べられている。

#### ■クラス会

「一週に一度木曜日は全学全部のクラス会である。目的・責任・使命・信念等、学生生活を通して如何にして実行するか、実践倫理を主として語り合った。クラスの統一を図り、個人の自覚を促すのはクラス会により、又クラス全員も親密になり共同奉仕を喜んで実行した。」(一〇回)

「クラス会は地方の出身の方が多かったせいかなかなかじめませんでした。裁縫の上等の布地や時計が紛失した時、クラスの方が我々皆の責任だからといって一人一人が熱心に夜の遅くなるのも忘れて祈り、とにかく上手に本人を責めず、温かい気分の中で当人に責任を持ってもらった時、さすが女子大だと感心したものでした。」(一五回)

「卒業式を目前にして、皆の気持が一つに融和し、燃え上るまで毎日のように語り合った真剣なクラス会の雰囲気は、今もなつかしく思い出され勇気づけられる。」(二一回)

「クラス会の話し合い形式は今も座談会等を活発にする訓練になった。」(二三回)

「クラスの修養会などで個人個人の欠点につき深く考えお互いに反省し合ったことは、他日血となり肉となり目に見えない尊いものを植え付けてくれたと思う。」(二三回)

「一年に入学するとすぐクラスの修養会に参加して自分を見つめることを教えられた。又個人の会では、自分というものが他人に写った姿を覚えていただいで参考になった。」(二三回)

#### ■個人の会

「利己主義が削られ、友情や師弟の關係がここで育てられ温められました。個人の会などで泣いたりしながら自分を先生や友人が訓練して下さった点、他人に頼る依頼心がなくなり独立心が育てられ、宗教心が培われました。」(一九回)

「指導者から、級友から、寮監から、寮友からどんな良い点を指摘され、又欠点を言われてその厳しさに自分を見失い呆然として暗に道を迷う経験をしますが、次は四方八方から助け手として暖かい指導があり助成があり、遂に学校の重要な目標に到達するまでの苦しい歩みは各々にあったと思います。これが母校の第一の修養生活であって、人生の歩みに最も大切なものであったと感じています。」(二二回)

#### ■係の会

「料理係の大きな働きぶり、先生を頼らず計画をたて授業を進行していただいた。今なおその時の毛筆書き、謄写版の綴りを大切に保存している。」(一四回)

「係の会は趣味を同じくする人の集まりなのでとても楽しみでした。上下のクラスですから年齢は異なりますが卒業してからもなつかしさを感じます。」(一五回)

「四年の時、農業係を新しく作り同志と一生懸命に働いたことは、今でも思い出として新しい力が湧く様な思いがします。」(一六回)

「私にとって係の会は大変有意義だったと思います。私は趣味係でしたが小集会で各自の趣味を語り計画を練りましたことは、自分をのばしてくれた楽しい思い出です。」(一七回)

「研究係・趣味係・体育係の係活動がよく行われた。」(一八回)

「趣味係として音楽部を担当し、聖歌隊を組織して修養会・瞑想会に役立った事が学生生活を一層充実したものに思いますが。」(二四回)

「四年間体育係をいたしましたので、運動会を学生だけで運営するという尊い体験をしたことを感謝しています。そしてチーム・ワークの如何に貴いものであるかをしみじみ味わいました。貴重な体験であったと思います。係に分かれていたことは、六・三制のクラブ活動の源泉をなすもので、これも我が母校は先見の明があったのだと一人で自慢しています。」(二四回)

#### ■縦の会(学科の会)・横の会(学年の会)

「縦の会・横の会は学生全部が一つに繋がって統一された形となるのに必要な会であり、先輩が指導し、今なお先輩・後輩ともに親しく。」(一〇回)

「縦の会、横の会など多くの時間を要しましたが啓発されることが多く、いろいろ思いを練ることができました。」(一〇回)  
 「我々回生の目標が定まらず、熱心に話合いました。家政科の考えと師範科のそれが一致せず、遂に成瀬先生にお出で願って漸くまとまり、共同奉仕」と決定した当時を追憶して血湧くような感慨を感じます。卒業の時には「正義の勝利」というモットーをいただき世に出ました。今も脈々として忘れることはできません。」(一六回)

「縦の会・横の会・係の会等、まだ未熟ではあっても自分達のクラス及び学校をよくする為に各自が責任を分担しているような感じをもったことはよい事だと思っています。」(二二回)

「思い出の一つは三年生から四年生になるに際して、計画をたてるまでの度重なる家政科・文科合同の討論会、まず日本女子大学をよくしようとする自治の精神がみなぎっていた。小さな自我をなくして心を合わせて一つの目的を決める心構えになるまでに人間の性格、それぞれの考えの相異、その他種々の障害があった。それを乗り越えて共同の目標をたてていくためには、個人の生活態度・修養が問題になるのでまとまりがむずかしく、朝早くから夜遅くまで会が続く、寮舎に泊ることさえあった。しかし、ひたむきに良きものを生み出そうとする努力から最後に現われるものが、きれいな心になっての共同奉仕とでもいうものであるのか。皆が到達し得た心境は一応すっきりしたもので、自分を掘り下げていく過程において得られた親密さ、あるいは苦しんだ精神生活の体験は卒業後も相互の結合力となり、日本女子大と自分を離れられないものになっているのを感じる。」(二〇

回) 「三年の終り、次の学年の自治組織を決める会に、英文学部僅か六、七名であらゆる指導者、他学部の方々を相手にして『代表主任』の制度について一週間孤軍奮闘の結果、翌年には私共の希望のように全学部支障なく新制度が用いられたことは今なお忘れられません。」(二三回)

「横の会で特に三年の学年末に自治計画の会がありました。自治生活の目標に始まり、各係の具体案まで、討論に討論を重ね、朝から夕方まで一週間位続いたのでしたが、それがとても楽しい会であったのを今もなつかしく思っております。」(二四回)

#### ■ 瞑想会

「月曜日の朝、始業前に瞑想会が開かれ、これに参加することが心からの喜びであった。」(一六回)

「私が一番印象に残っているのは寮監先生方の修養会です。毎日曜日六時から全寮監が集まって、成瀬先生指導の修養会(瞑想会)をしていらしかったです。」(一九回)

「毎週月曜日の瞑想会が一番印象に残っています。学校全体が集まっている広い講堂、大勢であるのに講堂全体しわぶき一つなく静寂そのものである事が、そしてただ一人孤独になり切って瞑想のできる、雰囲気、が印象に残っています。今日でもあのような時と場を欲しいと思います。」(二〇回)

「三年の三月の瞑想会に壇上に立ってお話させていただいたことが、今日の社会生活に非常に役立っている。」(二三回)

こういった積極的、肯定的な感想が出されている反面、次のような問題を指摘している者たちもある。

#### ■ 問題点

「あまりに会が多すぎて煩わしい気がいたしました。」(二〇回)

「どの会も形式的で、実践的でなかったような気がします。」(二〇回)

「いろいろな会で発表する人は頭のいい人というように先生に印象づけられた面があったと思います。発表に立たなくても考えのしっかりした人は多くあったと思いましたが、その点が認められなかった事は残念でした。」(二〇回)

「限られた方ばかりいつも発表され、大半は聞き役でした。」(二一回)

「どの会も団体生活に必要だと思いましたが、会に取られる時間が多すぎることは考えねばならぬ事だと思います。」(二一回)

「あまり会が多すぎるので、静かな読書時間が欲しいと思いました。」(二一回)



「現在の学生のように発表の訓練を受けていない私の時代には、クラス会はむしろ苦痛に思いました。」(一一回)

「クラス会でも発表会でもよく発表なさるが一向に実行なさらぬ方があったので、何となく不言実行をと思う気持ちになったこともありました。」(一二回)

「当時、自治生活は非常に進歩的であったと思う。しかしクラス会、係の会などあまり多すぎて真理探求に燃えて入学した自分としては、どうしても喜んでいろいろできなかつた。クラス会、修養会などもよいと思つたが、それらの会の調整がとれていないので、学生として専念する真理を探究する時間が大分そがれた。それについて意見を述べると批判と受け取られ、とり入れられなかつたこともあつたのは残念であつた。」(一四回)

「発表が下手だつた(というより思想がお粗末だつた)せいか、どの会も皆苦しく悲しかつた。そのため退学しようと思つた事もしばしばあつた。一時帰国していた時もあるが、月田先生の熱意ある手紙を受けて帰校した。」(一四回)

「クラス会といえれば大体週一回の修養会のように記憶している。自分は消極的であつたので修養会の発表が非常に苦痛に感じられた。それに若年なので何かと経験が浅いので発言の資料が少なかつた為もあつたと思う。」(一四回)

「修養会など行き過ぎて人身攻撃のような結果になる失敗もありました。」(一五回)

「発表力の乏しい者には修養会は殊に苦痛でございました。反省することの多い人間になつてしまい、それが周囲を気にしすぎることにもなつたと思います。」(二〇回)

「修養会などでも自己批判が過剰になり、臆病になり若々しい積極性を失つたようです。」(二二回)

「いずれの会も熱心のあまり時間がいくら延びても意に介さなかつた。この傾向は後に社会に出てからの生活にも影響して改めるのに骨が折れた。」(二二回)

「指導者の先生方がご熱心のあまり、個人生活に入りこんで一つの型に入れようとしたり、反感をかきたてるようなこともあつた事は遺憾でした。」(二二回)

「私は性格が内向的なので会というものは何によらず苦手だつた。いつも上級の方々の方々の発表の上手さには驚いていたが、その用語はいわゆる目白調の型通りであることがだんだんわかり魅力を失つた。特に修養会はまことに苦痛で、他の方々の哲学的な抽象的な実に立派な発表をうかがつて劣等感を強くするばかりだつた。」(二二回)

「あまりにも会が多く、毎週木曜日の朝に行われた瞑想会などは出席することが負担に思われました。それにまだ人生経験が浅くただでさえ反抗期の時代に、ひとの内面に立ち入つて批評をする修養会は時に残酷にさえ思われたことがあります。」(二三

回)

「意見の発表を強いられる会には抵抗を感じた。修養会では、個人追求が、あつて貧血した人もあつたことを思い出すと、あのような残酷なことを平気でやったことを悔いる。」(二三回)

「自治生活は非常に活発であつたが、その為個人への干渉が非常に多く愉快ではなかつた。学問より自治生活の方に重点が置かれていたらしいのが不満であり、本末転倒であると思つた。しかし人間関係の訓練には大変役に立つた。」(二三回)

「自治生活といつても真の自治生活でなく、指導され型に入れられた自治生活であつたと思つた。」(二三回)

「学校でも寮でも、修養会といつて個人の会をしたのですが、殆んどの場合個人の欠点(団体生活と個人の生活の調和のむずかしさ)を責めていくような形が多くて、個人の立派さ、美しさ、個性の問題等明るい面を突っ込んで語り合うような機会が少なすぎたのは今考えて、残念でなりません。」(二四回)

「自治生活は、形式や度数がますます複雑になるのに反比例して、内容は空虚になりつまらないと思つました。」(二四回)

「地方出の者は言葉の關係上発表が苦手で、修養会の時などしめつぱく、懺悔の生活ばかり、もつと陽気な潑刺とした中でも自己形成はできるのではないかと思つたものでした。」(二四回)

「自治組織がいかによく整えられていても、その構成員個人個人が積極的に加わらなければこのような会合は時間の浪費になつてしまうような気がいたします。縦の会、横の会についてそのような感を深く持ちました。自分自身の心の反省と共に、学生個人が積極的に元氣よく、自主性ある生活をすすめて行けるような方法を考えるべきだと思います。」(二五回)

しかし、このように学生時代、自治生活の在り方に批判的・否定的であつた者たちでも、卒業後の生活の中で、その意義を認識した者たちも多い。

#### ■ 価値認識

「その当時、私は理科の学生(物理・化学・数学・演習など)として会が多すぎ、時間が惜しいように思つたこともございました。しかし一度もどの会にも欠席せず学生生活をいたしましたことは思い返して悔いがなく、卒業後五十余年を過して、只今誇りにさえ思われております。義務と責任を果して初めて誇りを持つてるといふことを私は母校で身につけていただきました。」(一四回)

「当時はわずらわしく煙ったく思つたことも度々であつたが、他校にはみられぬ人と人との心の触れ合いの場であり、自己の成

長の源泉であつたと思つている。」(一五回)

「会が多くて本当に嫌だと思いましたが、一生の間に魂と魂を打ちつけ合うという事は、あの学生の四年間だけだつた事を思うと、やはりあつた磨かれ方がよかつたと思ひます。」(一六回)

「女学校時代宗教教育を受けて居りませんので、初めのうちは修養会とかクラス会とか言われると一寸恐いような気持もありましたが、馴れるにつれて自分を見つめることができ、友達からも長所とか短所とか言つて頂くことが出来たのは、今考えてみると大変ありがたいことと思ひます。」(一九回)

「あの真剣な求道的会合は『若い時代』なればこそできるものだと思つて卒業してから懐しく思う。もっともその当時は学業の上に加わるそれらの会の面倒さに少し閉口させられました。」(二一回)

「学生時代の自治生活はまことにわずらわしいものであつたが、卒業して月ふる程、人間としての生活に深みと自信を与えられたと言へるように思つている。」(二一回)

「修養会、その他の会の度毎に感じた事は、思つている事を十分に言葉に表わせない発表力のつたなさで、自分を卑下し劣等感を覚え苦痛であつた。会の為の時間が多く、学ぶことより精神修養に重点が置かれたような印象を持った。しかし卒業後、先輩の方々と心から話し合い信じ合える友情を現在まで得られたのは、様々の会によつて生まれた貴重な賜と思ふ。」(二一回)

「自己批判を自らのみでなく友人達から『個人の会』として真剣にやられた当時は辛かつたが、後に大変役立つたと思つた。」(二一回)

「当時はそんなに特別な印象は持てませんでしたが、後年ホーム・ルームの運営に大変役立ちました。これは当時から自治活動に主眼を置かれた学校並びに先生方の先見の賜と感謝しております。」(二二回)

「クラス会、縦の会などの組織は一応全体で作られ、それぞれにあてはめるので、せしめられる、よふな印象が強かつた。しかし、せしめられたにしても、今考えるとクラスを単位として苦しみ磨かれて来たように思う。自治活動において、一年生の時四年生は驚嘆する程立派に見えた。」(二二回)

「めまぐるしい程色々の会を重ねて忙しかつたのですが、あの修養会があつたから今日社会に出て荒波の中を漕ぎ抜けて行けるのだと感謝しています。」(二三回)

「色々の会があつて意見を發表しなければならぬのは田舎出の私には大変つらい事でしたが、戦後仕事や又社会活動をするようになつて、その時のことが非常に役立ちました。」(二四回)

「個人の会では自分の自尊心を随分傷つけられましたが、今考えると自分をよくみつめる習慣がついてよかったと思い直しております。」(二四回)

「卒業まで代表主任をさせられておまして、自治精神の確立の為とはいえ在学の間中、会の運営に頭を悩まされ苦しんだ経験が多くありました。それだけに年老いた今日になって、常に個人生活に閉じこもらず、職業を通じて社会福祉の保護司になったような心持ちで日々を暮しております。」(二四回)

「学校時代はわざわざわしいと思った時もありましたが、机の上や教科書では勉強できないものを体験させて頂きほんによかったと感謝しております。」(二五回)

「修養会などは若い時にはやや重苦しく感じられたが今になってみると、心を洗われるような思い出になっていきます。」(二五回)

「色々な会合が多く、現今のように発表能力を持たない時代でしたから会が重荷でありました。でも卒業してしまつた後で、会議とか自治生活のあり方などから得たものが多く、不平を言い続けながらやっばり母校の教育によって将来の考え方、生き方が示されており、自分がいつかその線に沿っていた事を知りました。」(二五回)

これらの意見を時期別に「肯定」・「否定」・「批判」・「価値認識」(卒業後に価値を認識)などに便宜上分類して応答の傾向をみると、各期とも「肯定型」が多いが、時代が進むに従つて「否定型」・「批判型」が増加する傾向がみられる。その中で「係の会」・「夏期修養会」などは肯定的に受け止めている者が各期を通じて多い(表12参照)。

特に毎夏(明治三十九年より)軽井沢三泉寮においてもたれた夏期修養会(二週間〜三週間、三、四年生が参加)は感銘が深く、次のような感想が寄せられている。

#### ■夏期修養会

「夏期修養会には三年間参加しました。互いに議論をたたかわせるのみでなく、個人個人の心深く戒め合い、全員涙ながらの集會を持ったことは、今尚記憶も新たにございます。この結果、基督教に入り今日に至ることができました。」(一〇回)

「何といつても軽井沢で校長先生と共にした樅の木の下での修養会は忘れられません。その時の写真を眺めては、にぶる自分の心にむち打つたものです。」(一三回)

「何といつても軽井沢という大自然の中で、あの澄んだ空の美しさ、あの山上の大樫の木の下に円座して承った成瀬先生のお話はありがたかった。三泉寮の生活も一段と美しく、私の人間としての開眼も軽井沢の自然の中であつたと思つてゐる。」(一三回)

「大正五年大学部三年の時、印度のタゴール氏が母校を訪問された。そして夏期休暇中(七月下旬)信州軽井沢三井家の別邸に一週間程滞在し、毎日あの山頂の大樫の下で講演された。平野先生の通訳で、タゴールの思想の幾分かをくみとることに誠意努めたこと、又お帰りの前夜の晩さん会の雰囲気は生涯忘れることはできない。タゴール氏は印度国歌を自分で歌われ、通訳のムツール氏は英国の国歌を、また程孝福様(大学部二年)は朝鮮の国歌を、私ども学生(大学部三年)は君が代を歌い、国際色豊かなその雰囲気は深く印象に残つてゐる。」(一四回)

「卒業年次の夏期寮での三週間、毎朝大樫の樹の下で瞑想会・クラス会、午後はリーダーの先生との面接、成瀬校長・麻生学監との個人面接は私の生涯を通じてのはげましであり、御教導は人生の目標となつてゐる。」(一四回)

「大自然の中でエマーソンの友情論を読み、瞑想したこと。特に忘れ得ぬことは、タゴール翁との未明の瞑想会であり、「人上磨」が如何に大きく私の人生を支配していたかを痛感いたしております。」(一四回)

「軽井沢夏期寮での山上の講義は、一生を通じて私の力となつた(一五回)

「軽井沢三泉寮の思い出は、限りなく尊く思います。反省会によつて自分の醜さを認め泣き伏しました。リーダーの先生や同室の方の慰めのお言葉もありがたく、今も記憶に新しく存じます。」(一六回)

「ことに軽井沢の三週間の修養会は神堂に入ったように厳しく、ここに青年時代の尊い精神の糧を得た。」(一八回)

「学生生活の思い出として永久に忘れることができないものは、何と申しましても軽井沢の生活でございます。聖地軽井沢での生活は、学生生活とは違ふあの雰囲気の中に、各自自分を見つめて、本当に無我の境地に入ることができましたが、これは今の生活に光明を与えてくれます。」(一八回)

「四年生の夏休みに行なわれた軽井沢最後の日の修養会が一番印象的で、初めて三年何か月ぶりかで自分の正直な心を吐露いたしましたところ、先生方始め皆さんが賛成して下さいましたので、案外自分の考えや生き方も間違つていなかったのだと自信がきました。」(一九回)

「夏期軽井沢の大樫の下での瞑想会は、終生忘れることのできない思い出です。まだ若くて汚れを知らぬ娘が、只一筋に道を求めて瞑想することのすばらしさ。精神統一の一つの手段として、神に近づくことができなくても、まじめに真摯な一時

を過ごしたことは尊い思い出であり、体験でした。」(二〇回)

「軽井沢の修養会は、生涯忘れることのできない心のふるさとである。四六時中神を求め祈りに明け暮れた生活は、此世における天昇のそれであった。」(二一回)

「最初は強制的でいやだと思いましたが、ああした生活が何事に対しても付和雷同せず、一応考えてから行動に移す心の余裕を習慣づけられました。」(二二回)

「私自身の精神的強さというものを確立させられたのは、夏の軽井沢の三泉寮での修養会でした。自己を深く掘り下げて反省の時を持たされた経験を感じています。」(二二回)

「軽井沢の修養会は、一色色々な意味で忘れられません。自然の美しさと人間のみじめさ、自然の雄大さと自分の貧しさ等を感じた修養会でした。」(二二回)

「三泉寮での修養会は特に印象強く、家庭生活で行きづまった感じの起きた時にはそれを思い出すことによって切り抜けたことが度々でした。」(二三回)

「自己反省と人生に対してあんなに真剣に考えたことは、一生涯の中で尊い経験でした。社会に出てから反省して考えることを教えていただいたことは、言葉につくせぬほど感謝しております。」(二三回)

「激しい電雷の中、大樅の樹下で行なわれた最後の結論会、大きな鉄槌で打たれたように激しい心の脱皮、そしてその大きな苦しみの中から生まれた歓喜等、今でもありありと思ひ出します。」(二三回)

「軽井沢の三週間の生活は辛かったですが、一番懐かしい思い出として残っています。特に、個人の会で皆自分を忘れ、友達になりきれた心情は尊いと思います。」(二三回)

「光に向って私共を導びく師の心にふれ、素直さを味わいました。只あまり方法が激しかった為、私などは出る釘は打たれるの通り、立ち上がるのが難しい経験もしました。けれどもその反面、自分の無力さ、貧しさを今も切実に思い返させる数々があります。この経験は四十有余年の間、心の糧となり、積極的に奉仕したい心にさせています。人の善意を素直に受け入れられることは、嫁姑の関係に生かされました。」(二四回)

「軽井沢三、四年生の修養会が、私のそれからの人生の根底をつくったことを感謝し、懐かしく思う。」(二四回)

「本当の精神生活の意味を知り、人生の価値を認めることができ、お互いのために生きる喜び、楽しさ、ありがたさを体験できました。」(二五回)

表12 自治生活 (実数)

回	項目		クラス会	個人 の会	係 の会	縦(学 科の 会)	横(学 年の 会)	発(計 画・ 結 論 の 会)	願 想 会	夏 期 修 養 会	一 般 修 養 会	自 治 生 活 全 般 に つ つ い て	合 計
	肯定 承認 の	定型 型 他											
大正前期 (93)	肯定	定型	5	—	10	9	4	1	—	8	8	12	57
	否定	定型	—	—	—	—	—	—	—	—	1	6	7
	承認	型	1	—	—	—	—	—	—	—	2	12	15
	その他	型	—	—	2	1	—	—	—	1	—	5	9
	肯定	定型	3	—	1	2	—	—	4	3	—	13	
大正中期 (185)	肯定	定型	17	3	24	7	4	3	3	13	22	14	110
	否定	定型	1	—	—	2	1	—	—	—	1	11	16
	承認	型	1	4	—	—	—	—	—	—	9	11	25
	その他	型	3	—	5	4	1	1	—	3	—	8	25
	肯定	定型	6	—	4	2	1	1	7	10	—	31	
大正後期 (370)	肯定	定型	26	2	34	19	12	1	6	63	31	30	224
	否定	定型	5	2	2	3	—	—	—	1	21	30	64
	承認	型	7	3	2	6	4	—	—	5	12	28	67
	その他	型	5	1	4	3	2	1	3	12	11	21	63
	肯定	定型	13	—	7	4	3	1	1	27	16	3	75

(注) その他は自治生活の中で特に印象に残ったものとして、会の名称のみ記入したものである。

「有意義な生活であったと思うが、何か既定の概念にはめ込んでいくような行程があつて、短い期間に問題をもち、考え、解決し、悟りを得ない者は、異端者扱いされるような雰囲気があつたことは残念に思う。」(二五回)

「自分をつめる時間を持つことがとてもよかつたと思います。広い宇宙、大自然に接して謙虚になれたのは、あの雰囲気があつたからこそと懐かしく思います。大自然の中にある人間の力ではどうすることもできない不思議な力、これは神の力ともいえるかと思いますが、神の心を感じる事ができたのではないかと思います。」(二五回)

#### (五) 寮生活

寮生活は成瀬校長の教育理念実現の場として創立当初から極めて重視され、学生の精神生活・自治生活の実践の場として大きな役割を荷なつていた。寮生活について、成瀬校長はその著『女子教育』(明治二十九年刊)の中で、「吾人の理想とする所の寄宿舎は、監獄的若くは兵營的の寄宿舎にあらずして、家族的寄宿舎なり」(『女子教育』一七五頁)と寮教育の方針を明らかにし、家族的寄宿舎

とは「小形なる平屋作の家屋を幾棟も建築するか、若くは二、三棟の長屋を建築して、之を敷軒に分割し、台所・風呂場・客室等より裝飾器具に至る迄、悉く家庭同様に之を具へ、各戸に生徒十名許宛を住ましめ、可成知識あり、徳望あり、兼ねて家族生活に経験ある女子を聘して、舎監となし、慈母の代理として全生徒の管理を負担せしめ、各戸の生徒は年齢に従て姉妹の關係を有ち、喜憂を共にし、強弱相扶け、慢らず、嫉まず各々相当の役目を分担し、會計又は料理の如きも皆生徒自ら之に従事し、殊に順序を守り規律を遵ふべし。又各戸は親戚として屢々相往復し、時々茶菓若くは音楽の会などを順番に催ふし、或は病めるものある時は、之を見舞ふ等より裝飾・礼儀・作法・挨拶・言語に至る迄、悉く之を善良なる家庭に模して実行せしむべし。且つ寄宿舎の規則の如きは、只その大体を示すに止め、詳細の点は之を各自の道義心に訴へて判決せしめ、不知不識の間に自ら規律ある生活を営むに至らしむべし。決して嚴格詳密の規律を設け、生徒の手足を束縛すべからず。是れ実に却て生徒をして偽善に流れしむるの弊あればなり。其の要とする処は女学生をして常に家庭に於ける生活を離れしめるにあり。」(前掲書、一七六―一七七頁)とその抱負を述べている。

さらに、『新時代の教育』においては、「理論上に於ては、家庭に於て見るべからざる特長を有し、従つて他に換ふべからざる教育的価値を有す。……家庭より通学する学生と雖も、或る時期に於ては、必ず学生を寄宿舎に收容し、其の特殊の生活を味ひ、修養を経しむるを可とすべし。……寄宿舎は教室と異り、学生の全生活を包容する処なるを以て、各種の指導を実地上に与へ、生活の主義理想を実行し、以て学生各個を感化し、其の融和統一を計り、校風を樹立するが為に、最も緊要適切なる機関たり。」(『新時代の教育』一九〇頁)と述べ、人格修養に重きを置く学校においては、必ず寄宿舎を設けることを提案している。

大正十年の家庭週報では大正期の寮内の自治組織のあらましを、次のように記している。

「一名の寮監と大学四学部的一年生から四年生までの学生が二十四、五名乃至三十三、四名配分されて一寮一名の女中を使用し



て居る。之等の人々の日々の生活は勿論開校廿年の経験に築かれた校風に基づく不文の修会があつてそれが厳格な寮規の基礎とはなつて居るが、本来が自治組織であるからみだりに拘束を加えない。即ち経済、炊事を別にした各寮では寮監はその一寮の指揮監督の任に當つて居るとはいへ、上級生から選ばれた二名の当番主婦はその寮監の助手となつて所謂家事万般を掌る。各寮との連絡を計る為には各寮主婦が会合して打合せを開く。尚この外に各室の上級生は室長の任に當つて寮規の実行を促進するといふ風で言語・動作・衣食住・経済・裝飾等寮生活のすべてに亘つて自ら講究し実行して行く。この為には又、主婦及上級生以外の寮生のすべては各々係を分けてその責任を分担して居る。即ち修養・趣味・衛生・農芸・経済・食物・整理等の各係がそれである。(この係の分類は寮によつて多少の差異がある) これ等の各係が活動してその寮生活の内容を充たすと共に相助け相励まし、友愛の情、団結の念、勤勞の趣味、犠牲の精神を養ひ和氣あいあいたる内に規律整然たる寮の美風を養つて行くのである。

(家庭週報第六百二十号 大正十年七月八日)

寮教育にかける成瀬校長の期待は、当時の学生たちにとどのように反映し、どのような生活が展開されていったのであろうか。ここで、寮生活を経験した者たちの思い出をたどつてみよう。

#### ■よかつた点

「人と人との關係(性格の理解と融和)、仕事の分担、家庭としての経済・献立・交際等、一人娘として育ちました私にとつて、よき姉妹であり、すべて楽しく、四年間の学校生活の上で一番印象に残つた懐かしいものといえます。」(一〇〇回)

「梅花女学校三年終了と共に、日本女子大学附属高等女学校四年に転校。それと同時に曙寮に入寮。井上先生の寮監の下、大学二年まで指導を受けた。入寮してよかつたと思うことは、凡てにおいて人に頼らぬこと。自分で学び自分自身で消化すること。不可解な点だけ必ず質問してよく了解するまで勉強することなどである。」(一〇一回)

「寮こそ実践倫理や講義をいかして実行する場所であつた。日常行為とならねば実践倫理ではない。日本女子大学の特色は当時の寮である。厳しい寮生活によつて自己を反省し、寮監を慈母の如く慕ひ、寮監はまた身をもつて導びかれた。寮生活をしてこそ今日現在の自分があると感謝している。私の寮は経済困難で購買会に借金があつたので、粗食を進んでし、卒業時には貯金をして財豊富かになつた。右の心構えの為、問題は一つもなかつた。」(一〇一回)

「寮生活は何よりの思い出でございます。女学校一年生から大学三年生まで共同生活をしたことで、学校生活のみでは見られない美しい感情(愛情)が生まれて大変によかつたと思ひます。時間の浪費をいう方もありますが、各自の心掛け次第で解決でき

ると思います。」(一〇回)

「寮生活は私にとり非常に有意義でした。先生や上級生、同級生、下級生、お手伝いさんなどと一緒の日々の生活は、学ぶこと、考えさせられることが多く、互に励ましたり励まされたりで、その当時も今も、ふり返ってみてよいと思うことはかりでございませう。」(一一回)

「寮生活をしてよかったと思うことは、自分を抑えて人々と共同してすべての点に生きられる力ができたこと(他日四十年の長い教員生活の上に非常によかったと思います)。一番私の欠点だった己れを殺して堪えていく力のできた事も寮生活をしたからと感謝しています。」(一二回)

「諸国から集まったそれぞれ風習も違い、いろいろと異なった性格の持主が、長所は見習い、短所を補い合って規則正しい寮生活を体験したことは、忍耐と信念を養う為非常に効果があったと思う。特に少人数で家族的な制度であったことは、目白の誇りとして、多くの方に自信をもって入寮をおすすめした。」(一三回)

「初めて入寮した時、羽二重の御被布姿の弘田先生はお姫様のようにでした。然し、味噌屋の娘の私が急に宮内省式の教育の中に入ったのですから、びっくりすることが沢山ありました。」(一三回)

(注) 弘田由三子寮監は明治四十五年以降、東伏見・伏見両宮妃に国文学の進講を行ない、大正五年一月から同十一年四月まで、澄宮(現三笠宮)ご養育係の責任者として出仕した。

「寮の共同生活の楽しい思い出の一つにお主婦さんがある。卒業の年は忙しいというので二年生になるといわゆるお主婦さんという役が回ってくる。誠にさわやかに張り切ったものである。私にとって当時の寮監は、少し中老でいらしたので、姑さん氣質も学んだし、新家庭をつくった時に少しもうろたえなかつた。」(一三回)

「寮生活は本当によかったと思います。兄弟が多く、それに一番上の女という立場で、昔風に何かと家事に慣れておりましたが、寮に入り自分のことだけになり、すつきり勉強に専念できたことが何よりも嬉しいことでした。当時入学された人々は、お嬢さん育ちで、洗濯などしたことのない人がほとんどでしたが、私は大家族でそれをしておりましたので、本当に勉強に専念でき、地方の人々の生活を知り、又対人関係のことも知って大変よい経験でした。」(一四回)

「私は通学生でしたが月一度(土曜日・月曜日)寮生活をさせて戴き、共同奉仕が如何に団体生活に大切かを体験させていただきました。」(一四回)

(注) 当時は通学生も寮外生として寮生活を味わえるよう配慮されていた。

「家には当時召使いが数多く仕えてくれまして、自ら手仕事をなす機会が少なく、他人のお世話をすることがなかったのですが、寮舎では主婦の役があり、一心に寮の面倒をみ、誠に良き経験を積みました。そして一身上の御相談を先生に求め、日常の修養会には寮友より種々のアドヴァイスを頂き、それらが非常に私を育んでくれました。」(一六回)

「家政科も英文科も同じ寮に起居することにより、他人の専門学科への理解を広めることができた。」(一六回)

「全国各地故郷を異にする寮の友人の集まり故に、自分で現地へ旅行しないで各地方の風俗、習慣等の面白さ、美しさを知り楽しむことができた。」(一六回)

「寮監及び上級・下級生同居の寮生活は、長幼の序を知り、共同奉仕の精神を養い、集団生活の尊いよき体験を得ました。」(一六回)

「家庭生活ではわからぬこと、他人に対しての心の配り方等が身につけてよかったと思います。」(一七回)

「お互いを充分に知り合う点で、寮生活は最も望ましいと思います。卒業後五十年を経た今日も、一番親しく懐かしいのは寮で得た友達で、同期の者の集まりとなると何をおいても馳せ参じたくあります。」(一八回)

「寮生活をして思い出すのは、早朝誰よりも早く起床し、洗面する音がしないようタオルを水道の蛇口に巻いて水を出して使用したこと。毎晩自習時間が済んだら食堂に集まり、寮監先生を中心に讚美歌を歌ったこと。週二回位体育館に上靴を持参し、ダンスをしたことなどです。」(一九回)

「学校の色々な教訓を生かすためにも、又交友関係についても一生忘れることができないのが寮生活です。寮生活があつてはじめて精神面も生かし得られたと思います。」(一九回)

「封建的な家庭から離れて他の家庭の種々様々のあり方を知り、厳しい躰を身につけられたことを生涯感謝しております。」(二〇回)

「地方色が豊かであるために生活習慣の多様性を学んだこと。実践性を身につけたこと。様々な性格の仲間と協調生活を送ったことが自己本位な私の性格を変えたことなどです。」(二〇回)

「自分の家だけが家のように思っていた私に、寮生活は広い意味の家、個人対個人のあり方について考えさせるものがあつたと思う。」(二一回)

「女学校時代から連続の寮生活で、独立的精神を身につけた。社会性を養い、人の振り見て我が振り直せの反省が得られた。肉身に勝る情愛、規則的生活、奉仕の生活を学んだことがよかつたと思う。」(二一回)

「起居を共にする同室の友人と親しく交わる機会を得て幸福であった。又、お主婦様として一家を取り締まるに近い経験もありがたかった。」(二一回)

「母校の一つの家庭としての寮であったので、とかく机上の学問になりがちな家政を少しでも実生活で経験できたことがよかったと思います。」(二一回)

「卒業後四十年の今日、寮生活は実に懐かしい限りで楽しい思い出に満ちております。上級生、下級生、又各科別、各地方別と幅広くいろいろのお友達を与えられたことは、私の半生の一つの宝庫と申せましょう。」(二二回)

「自然に無理なくできていた寮の規則でしたから皆よく守って不平はありませんでした。互いにその規則を守る為に助け合ったりもしました。寮生の心をしっかりとつかんでいくくださった先生の見えぬ振りの寛大さなどもほほえましく思い出します。」(二二回)

「全寮制こそ望ましいと思います。人間形成の上で生活と行動を通じて役に立ったのは、少しうすぎない和風寮で過ごした寮生活でした。」(二二回)

「本当の修養は、同じ屋根の下で、しかも一緒に暮らすこと、即ち寝食を共にすることによって徹底できると思う。この意味で、寮生活をさせて頂いたことに感謝しています。」(二三回)

「よかったと思う点は、独りで生きる強い意志を育てられたこと。他人の世界を侵さぬ心をうえつけられたこと。生活技術を身につけたことなどです。」(二三回)

「私が社会学科だというのでわざわざ食事係にして家事を見習わせて下さった配慮。何か悪いことをした時、やった事柄でなく、その態度を追求されたことなど。」(二三回)

「寮監が大変趣味の豊かな方で、風雅な雰囲気にも恵まれ、アットホームな寮生活であった。連帯責任を持ち合って、自由が与えられたので窮屈ではなかったこと。やんわりとよい躰をしていただいたことなどを感謝している。」(二三回)

「ミス・フィリップスを寮監にいただいて外寮で生活いたしました。先生の愛の庇護の下にはぐくまれ、信仰を得、人生の方向と支えを得、その感謝は筆紙に尽くせません。」(二四回)

「ミス・フィリップスの面影を常に心の支えとして抱きしめ、師が実行によって示された教訓の数々を、私の生活に取り入れることを祈りと共に心がけております。」(二四回)

「寮生活をしてよかったと思います。外面は色々に性格が違う人々の集まりであっても、結局、お互いを知り合えば誰も気持は

理解し合えるという事。人間は互いに長所・短所があり、またたとえ利己主義な人であっても、誠意を尽せば互に信じることができるようになることも知りました。」(二四回)

「寮生活を経験してよかったですと思っております。同世代の若い人たちが寄り集まり、社会に巣立つ前の大切な準備教育の場としてのよい経験を積んだと思います。」(二四回)

「寮生活によって私は今日の私の姿を作って戴きました。最良の種を蒔いていただいた為に、何十年かの間にそれが育って、実っていく、そんな風でございます。友情の尊さが私の一生を支配しています。先輩の指導、同期生の友情、苦難の人生を如何に力強く生きぬくべきかを身体と身体に触れ合いで教えていただいたように存じます。」(二四回)

「目白の生活のうちで、学生生活の母体となり、私に沢山の良いものを得させてくれたのは寮生活であり、これあってこそ目白に学んだ意味があったと思う。暖かい家庭的な雰囲気、長幼の序が自然に行われ、精神生活は勿論、女としての成長過程にある者にとって、様々な教えを実践・実行によって受けられたことは、私の終生忘れることのできない深い思い出である。」(二五回)

「当時、女子の大学が少なかったため、寮には北は北海道から南は台湾の人まで一緒だったので、日本中の人と毎日生活できることがとても楽しみだった。礼儀作法はやかましかったが、時間の観念をいつも持ち、自分のことは自分でやるあの寮生活の良さは、とても自分の家ではできないと思う。親から離れた生活は、若い私をしっかりと人間にしたと思う。」(二五回)

「多感な若い時代に、同じ年輩の人々と共同生活することはとてもいいことだと思ふ。規律を守らないでちゃっかりした人、寝坊の人、早起きの人、努力家、まじめ人間、人を知る上でこの生活は得がたい経験であった。寮監先生が外人であった為、合理的な生活の知恵を生み出すことを習ったのは幸せだった。」(二五回)

以上は寮生活をしてよかったと感じている者たちの声であるが、問題点として、次のような感想を持つ者たちもあつた。

#### ■問題点

「実質的でないおままごとの延長のような気がいたしました。火災訓練もありましたが、そんな時には実践倫理のノートを第一にといった風で、寮ばかりでなく校内一体にそういう気風が流れていたように思ふ。」(一〇回)

「食物はカロリーについては考えられていたが、動物性純度の高い蛋白や果物等が不足であった。当時食費は七円五十銭であつ

た。国全体が現在より乏しい時代のせいもあり、一般社会よりは比較的上等ではあったが、成長盛りの若者には不十分な感があった。」(一三三回)

「寮監先生に盲従したことは問題だと思う。」(一六六回)

「外出の時間が厳しく、映画なども殆んど自由に見られなかった思い出があります。」(一六六回)

「世間と全く隔絶されたような生活で、何とかもう少し社会との触れ合いを多くしていただきたいと思ったと思います。」(一八八回)

「問題点と申いましたことは、胸の病気の人と同室でしたので卒業後その病気になる、希望の職もやめて病床の生活をしました悲しい思い出があります。」(一八八回)

「約一年間(一年生の時)寮生活をいたしましたが、当時は寮監の命に絶対服従で、悪く申せば籠の中の鳥のような感もありました。」(一八八回)

「同室で三、四人が同じ電燈の下では勉強が困難だと感じたこともあった。卒業の頃から別々の机に小さな電燈下で勉強するよう改められた。」(一八八回)

「週日は主婦として餅菓子を求めに福井家に行く以外には出ることもなかったが、晩香寮の応接間で寮生活改革の会を持ち、校外での講演会、特に丸善や神保町あたりの本屋には行けるように改められた。」(一八八回)

「門限など六時で、放課後神田あたりへ本を探しにいきたいと思う時など不自由いたしました。」(一九九回)

「風呂掃除、玄関の床(コンクリート)みがきなどで、一日の労力をすり減らし過労となったのは問題(体力の個人差)と思います。」(二〇〇回)

「平均二畳に一人の割当になっている生活では狭く、衛生管理も乏しかった。」(二〇〇回)

「寮監はどこまでも公平で温かい方であることが必須条件だと思います。感じやすい時代に抱容力の少ない方は失格と思います。」(二〇〇回)

「今一步、心からの自由と明朗さが欲しかったと思います。」(二二一回)

「生活環境があまりにも貧しく、上級生が必要以上に威張る。絶えず雑用に追いまわされ、勉学に勤しむ時間が少なかったことを残念に思う。」(二二一回)

「帰寮時間を午後六時迄と制限した点や、親書等について人格を無視した規則等があったのは問題であると感じた。」(二二一回)  
「もう少し勉強時間の自由が欲しいと思った(少くとも上級学年に於て)。六畳一部屋三人、八畳に四人の構成では無理があっ

た。」(二二回)

「当時はあまりにも閉鎖的で、自由のない修道院的な生活に息がつまる思いで、凡そ青春などはかけ離れた封建性の強いものであったように感じたこともあった。」(二二回)

「寮生活は一面、温室の中の暮らしのようなもので、四年間世間知らずで過ごしました。もっと社会的な、又地理的な連がりがあったもよかったです。」(二二回)

「自治生活に熱心の余り、無理をして健康を害した面もあったことは少々問題であったと思う。」(二二回)

「在寮当時は問題として感じなかったことであるが、一室(八畳)に六人のすしづめでは思考能力も育たないのではないかと思う。雑居生活の煩わしさの中からは、優れた精神生活は生まれたいのではなからうか。」(二三回)

「自治寮であるのに凡てが寮監の権限下に置かれていたこと。真の自由が束縛されていたこと。外出時の門限が厳しかったこと。映画・観劇が罪悪視されていたこと等は問題でした。」(二三回)

「朝起きるのが早く、授業中にいねむりがでて困った。もっとよく睡眠がとれていたら講義もよくわかったことと残念に思う。」(二四回)

「もっと楽しく、個性をのびのびと伸ばし得るような方法が考えられなかったかと思う。」(二四回)

「共同生活の中で自分の個性を見つめ、それを伸ばしていくことは難しかった。」(二五回)

「あまりにも個人を忘却し、個性を尊重しない生活だったと思います。」(二五回)

「外出時間に制限があったこと。郵便物を届け出たこと。兄が訪問して来るのも禁じられる男子禁制であったことなどは反発を感じました。」(二五回)

「あまりにもおっとりしていて、やがて巣立ち行く世の荒波に立ち向って行くには、いささかひ弱なところがないでもないと思えました。」(二五回)

以上、寄せられた回答をありのままに紹介してきた。在寮の時期・期間、寮監の教育、寮の雰囲気、また寮生各自の性格、生活態度、寮生活への期待、考え方などを反映して、その受け止め方もさまざまであり、思い出も異なってくるようである。全般的な傾向としては、よかった面として、「人間関係」の在り方を学んだ、「生活技術の修得」ができたといった点を挙げた者が各期を通じて多く、また問題点としては、「寮の規則」が厳しすぎたとするもの、「研究

時間・自由時間の不足」をなげく者などが比較的多くみられた。

#### (六) 学校行事

運動会、文芸会、研究発表会、展覧会、音楽会などの諸行事も、自治生活の一環としてすべて学生の手によって産み出され運営されていった。これらの諸行事は、共同奉仕の実践のための機会であると同時に、次のような成瀬校長の言葉からも明らかのように、「発表」の教育のための有効な場ともなったのである。

「人は単に考へ、単に論ずるのみでは、何の価値もない。真に考を持つならば、それは己が級に向つて、学校に向つて、又自分の家庭に向つて、発表せざれば、其の考は水泡に帰し、何の益する所なくして終るのみである。」

「発表は我々の人格を作り、全品性を作る上に、大切な要素であるが故に、印象と発表とは併行して進む様に計らなければならぬ。」

「発表に就いては、欧米でも昔は学校教育が寺院等に委ねられて居た為に、少しも重きを置かれなかつた。然し其の短は家庭で補はれたのである。然るに今日では、交通機関、其の他凡ての事が工業的組織となり、便利を来した為に、之が家庭で補はれる機会がなくなり、教育上には非常なる影響を及ぼしたので其の弊を救ふ為に、音楽・体操・手芸等の必要を認めるに至つた。我が国の教育に於ては殊に遺傳的に物を覚えると言ふ事即ち印象する事を奨励する事は度を越えたのであるが、近来漸く学校教育に手芸の方面を加へ來つたのであるが、大抵は形式に止つて、精神が働いて居らないから、やはり発表の点が非常に遅れて居るのである。本校が特に自然研究、手工教育等を奨励するのは、やはり此の発表の欠けたる所を、補はんが為である。」

「其の他例へば運動会・文芸会の如き、今回のバザーの如き、皆目的は此の発表の教育にあるので、此の発表の欠けたる事を補ふに、やはり本校の取つた方針が叶つて居る事を信するのである。故に諸子は、此の原理を応用する事が



大切である。」(成瀬先生講演集第五、二〇〜二二頁)

これらの行事のうちでも、明治の末期から大正期にかけて目白の名物となった「運動会」、大正期から昭和期にかけての「展覧会」などは特に印象深く、五十年を経た今日でもいきいきとした思い出として人々の心に残っている。

### ■運動会

体育の重要性は、成瀬校長が女子教育に志した当時からの主張であり、日本女子大学においても、体育は実践倫理と共に開校当初から各学部・各学年に共通した必修科目であった。課程表によれば、体操は普通体操・遊戯体操・教育体操・容儀体操の四つに区分されている。

第一回の運動会は、すでに明治三十四年一月二十二日に飛鳥山の渋沢邸において挙行され、本校創立委員及び職員生徒五百余名が参加した。第二回は翌年本校運動場において行なわれ、本校関係者以外に公私の教育家、新聞、雑誌記者、父兄・保証人千二百名の参観者を待た。三十六年に行なわれた第三回は、午前十時には既に入場者三千人を突破、当日の入場者は五千余名、家政学部の生徒が来賓の昼食のために、夜を徹して作った寿司、サンドウィッチ、菓子等も足りず、各寮舎一釜つつ四斗余りの御飯を炊き、ライスカレーを急造して間に合わせたということからもその隆盛ぶりがうかがわれよう。特に成瀬校長考案の日本式バスケットや自転車競技は、運動会随一の呼び物であった。大正期の運動会の模様を、当時の学生たちは次のように懐古している。

「その頃社会の注目的となった程の運動会、他校のとは違い、特色があった。その方法が、いっさい先生方のお考えは入れず、いわば生徒の作品展覧会とでもいわれる程、生徒丈での構想によりての会であるから、いっさい生徒まかせで出きる。期日前に予行演習があり、会当日は混雑とて此日見に行く者も多数あって、運動会が二日あるように外から思われていた。会場や競技の種類はもとより、其日の作品の売物・売場などすべて合又合合で計画を立て実行していった。入学当時から沢山の係(傾向・整理・料理・会計・体育・接客・会場・連絡係など)が決められ学期初めに選ばれ、改選が適不適あるいは好き嫌いにより行なわれていた。料理係などは徹夜で作ったりしたものである。当日は先づ校門を入ると、赤白の幔幕が会場一杯に張りめ

ぐらされ、競技場には積敷がしつらえられた。門から高等女学校の前まで、生徒の作ったサンドイッチ・ドーナツ・寿司・赤飯・お団子など山程通路の左右に積まれたが、競技場に着くとなかなか動きがとれないので席につくまでにサンドイッチや寿司などのお弁当を買うので、売店は大体昼までに売れつくしてしまう。そして競技を見るのであるが、其競技が当時の他校では見られない物ばかり。その内の二、三は、リボンをつけたおさげで色とりどりの袴の女生徒が、自転車競走とか、スエーデン体操（金輪や金棒を持ちピアノのリズムにあわせる）とか、ホークダンスとかであったから、市内の誰もが女子大の運動会というところとかして入場券を得られないものかという工合で、其時江戸川橋が市電の終点であったが、為に増発又は増発という程評判だった。」(二三回)

「運動会、特に紅白に分かれての根限りの応援では、家政科・文科に分かれて思う存分その方法を創造力を働かせて工夫した。全部が終わった後、両方が一つに融け合って、一日中残りくずなどを校庭で燃やした一瞬を忘れることができない。」(一八回)

「運動会のための弁当、菓子づくり等、何日も前から係がまとまって心を合わせて行動した満足感、全部の行事が終了した後の後片付けの素早さ、整頓の見事さは、精神的高揚、生命の充実を深く印象つけてくれました。」(二〇回)

「目白の運動会の多彩なプログラム（白井先生の体操、日本式バスケット、自転車等々）には、日本女子大の持つよきものが形になって現われ、又大正時代の自由な精神を持った、しかもどこかつましく、地味な日本女性の美しさが思い出される。」(二〇回)

「運動会での全校生徒（先生方も）が一丸となって競技に、バスケットボールに熱狂し、応援歌を歌い、声を頂らして青春の血を湧き立たせた思い出は、今も昨日の如く思い出されます。」(二三回)

「体育係として運動会のために敢闘し、係全員が心を合わせて責任を果たし、運動会場の後片付けをなし終えた時の感謝と安らぎ、共同の精神を体験した喜び、これは忘れ得ぬ思い出です。」(二三回)

「すべてのことを学生のみで計画し、全学生一致協力で一糸乱れず行なわれていた運動会の立派さを誇り得る。体育の教授は基本を教えるのみで、体育係が運動会に出場できるまでに、クラスの統率、練習すべてを行っていた。始業前、放課後の練習は思ひ出深い。」(二四回)

「毎年秋に行なわれた真に幼稚園より大学までの運動会は、最もよく自治生活を現わし、一致共同の精神が今もお思い出される。」(二五回)

「運動会の時に、各学年・学部が一つの目的に向かって奉仕したことが、皆で力を合わせて努力した具体的な体験として思い出さ

れる。」(二五回)

「運動会の運営を通して、全学生がこぞって自治組織の一員として働いたことは、生き生きとした自治生活を体験できた最も大きな事柄であったと思います。日頃とかくうとましくさえ思えた諸種の自治会に比べて、具体的に実際に自治生活を体験できた運動会は、本当に力強い自信をつけてくれたと思います。」(二五回)

「運動会は自治生活の総決算であり、自治気分の最も大きな盛り上がりであった。縦も横も緊密な相互関係を充分意味つけて、一つの大きな総合研究芸術を体育という実活動に表わした様なものであり、最大の思い出であった。」(二五回)

#### ■展覧会

大正十三年、関東震災後の経済復興、特に輸出入の問題に関して婦人消費者の立場から、「国産品奨励展覧会」が桜楓会(本学卒業生の団体)との共催で開催された。また、昭和三年には創立二五周年及び高等学校部の開設を記念して女性文化展が開かれている。これらの行事には、当時の皇后はじめ、各宮妃殿下が多数来校され、通学生も寮に泊り込みで全校あげて夜を徹して準備が行われた。この時の感激は一つの仕事を協力して成し終えた喜びと共に、現在でも生涯の思い出として記憶している者が多い。

(注) 高等学部(修業年限三年)は、女子総合大学建設の一段階として、昭和二年五月に開設された。さらに、昭和五年、高年学部卒業生の入学の時期に合わせて、大学本科(三年)が開設されたが、四回生をもって打ちきりになっている。以後、専門学部と高等学部および大学本科の二本立てを廢し、本科四年、研究科二年に一本化された。

また、成瀬校長の永眠という日本女子大学にとって重要な転換、及び関東大震災に当たっての学校行事は、当時の学生に強い印象を植えている。

#### ■告別講演

成瀬校長は、「全く安心だ」、「総て満足だ」との言葉を残して、大正八年三月四日永眠した。これに先だち同年一月二十九日日本学評議員、教職員、学生生徒、桜楓会員を集めて後事を託した告別講演は、その席に連らなつた者たち

に終生忘れ得ない感銘を与えたのである。

「あの最後の告別講演は、偉大な先生が尊い生命をかけて私共に教えて下さった最後の実践倫理であったと思います。」(二五回)

「卒業前、成瀬先生の御逝去に直面し、死について考え、死にのぞんでの態度を教えて頂きました。」(一六回)

「成瀬先生のお別れの御講演を聞き、偉人のお姿に目の当たりに接し得た感動はいつまでも心に残っています。」(一七回)

「成瀬先生の最後の御講演、『死は人生生活の一部である。』と言われた深いお言葉は、私に死をのりこえた死を恐れぬものをお教え下され、今日もお言葉に従っております。」(一七回)

「成瀬先生のこの世での最後の講堂における告別講演は、私の今日までの苦しい時にも光を与え、勇気呼び起こしてくれました。先生にお目にかかれ導かれたことの幸福をしみじみあげたいことと存じています。」(一九回)

「二月二十九日の御講演は今も胆に銘じており、今日に至るまで心の支えになっております。」(一九回)

三月九日に行なわれた告別式に参列した学生たちは、当時の感懐を次のように綴っている。

「最後の先生とのお別れの日に、過去、現在、未来を通じて不滅の生命の生き続けるであろうという証明をお与え下さいました。沢山の花の中に埋もれて逝かれた先生とのしばしのお別れを、あれほど悲しく涙を流しておおくりしたことは、私の生涯にまたとありません。両親を亡くした時よりも、もっと深い愛と悲しみでございました。この悲しみの中から私たちは、先生が深い愛と限りない賜をお与え下さいました母校の娘である幸福と、先生のお遺言を守り育てねばならないという責任感とを与えられたのでございました。あのフリージャとアラファームの花輪の押し花が、黒のリボンに結ばれた永久の誓を今も感じます。ちようどキリストの復活の事実を感じた使徒のように。」(一八回)

#### ■関東大震災

大正十二年九月一日、関東一帯を襲った大震災は日本女子大学にも被害をもたらし、講堂及び家政研究館などが崩壊した。大学の授業は十月二十五日には開始されたが、学生たちは罹災者の救護、衣服の配給、人口調査、託児などに活躍した。

「私が女子大生の時は日本が平和にて、親も経済的にも豊かであり、親も子ものんびりと気楽に暮らしました。関東大震災が四年の時だったので、二学期は全然授業がなく、三学期に一寸勉強して卒業式を迎えたのが残念でした。二学期より綿服となり、少しひきしまっていました。初めて入学した時、何と派手な学校かと驚き、そのことに次第に慣れていったのが心身緊張し、それが幾分とも戦後の生活に役立ったように思います。」(二一回)

「関東大震災の時、一般の方々より数日前に帰校し、学校の託児所や市の配給のお手伝いなどをいたし、人間のギリギリの時の心境にふれ得たことは、社会勉強として忘れられません。」(二一回)

「早稲田より都電で神田橋まで乗り、後は歩いて両国の緑町を二人一組になって焼け出された人々の数を調べたことです。被服省の焼け後にはトタンが落ちてありましたが、下駄や髪の毛が見えました。」(二一回)

「大正十二年大震災の折、災害者のために皇后陛下御下賜の袷を縫ったこと、ミルクやその他の食料品を多量に上野のバラックに、クラスの方々ともに配給してまわったことなどは忘れ得ぬことでした。」(二一回)

「関東大震災にあいましたが、それを機会に服装その他を質素に改めるよう、講堂に集合して討論会を開いたことも思い出の一つです。」(二一回)

「四年生の三泉寮生活の終りに関東大震災が起り、修養会の最中にゆれましたが、誰一人立つ者もなく、肅然として修養会の討論会を終了したことなど鮮やかに印象に残っています。」(二一回)

「震災の時、災害状況を調査したこと。社会の実態を見たはじめてでした。もっと各方面の社会を見ておくべきであったと思いました。」(二一回)

「日暮里のセツルメントにお手伝いに行ったことです。わずかな資金で、不遇な多くの子どもたちがわずかでも合せであるようにとの先生方の心身共のご苦労が身にしみました。託児所の先駆であったでしょう。」(二三回)

「震災での講堂がこわれたことは悲しいことでした。十月から二学期が始まり、その頃白いエプロンをかけ、トラックに乗って上野公園に行き、被災者のお世話をしたことは、四年間の学生生活の中で一番有意義なことであったと思います。」(二四回)

#### ■その他

「講堂の屋根が漏電して火事になった折、学生も協力して消火作業を助け、図書も無事に避難させ、女手でグラランドピアノを持ち出した。」(一一回)

「寮生は炊き出しに従事し、消火の終る頃には運動場は食堂と代わり、消防夫や多くの方々から賞讃を受けた。」(一三回)

「タゴール、ヘレン・ケラー、新渡戸稲造氏らの講演を聴くことができた。」(一五回)

「講義をエスケープして哲学堂に遊びに行き、大いに談笑した。」(一九回)

「週二回、夜、体育館でダンスができた。」(一九回)

「種々の講演会に出かけて社会思潮(ロシア革命の影響)の洗礼を受けた。」(二〇回)

「英語劇はすべて男装を禁じられていたので、男性になってもスカートをはいて熱演した。」(二〇回)

「一ツ橋大、外語大の学生と英文学の研究をした。」(二〇回)

「帝国ホテルの見学をした。」(二二回)

「タゴール、アインシュタイン氏らの講演を聞いた。」(二三回)

「禁をおかして寮のバルコニーで友人と語りあかし、夜露にぬれながら星を眺めた。」(二四回)

「日曜日に、厳格な寮を出て上野の美術展を見たり、外国映画を見たりしてやっと門限に間に合った。」(二五回)

「卒論の代わりに婦人参政権に関する展覧会を共同で開催し、最後の研究をした。」(二五回)

「目白、徳川邸の台所の設計依頼があり、グループに分かれて熱心に考え、一番よくできたものが採用された。」(二五回)

など、大正時代を背景に練り広げられた多彩な学生生活の思い出が綴られている。

### 三 本学の教育に対する評価

最後に、各節において述べた点と重複する面もあるが、大正期に日本女子大学で学んだ者たちが五十余年を経た現在、自分たちが受けた母校の教育をどのように評価しているか、最もよかったと感じている点、問題があったと思われる点をまとめてみよう。

#### (一) よかった点

日本女子大学の教育を受けて最もよかった点として多くの者が挙げているのが「精神教育」である。特に、実践倫理、講義、自治生活、寮生活などを通して魂の教育を与えられ、「人間形成」ができたとする者が多い。「宗教心が涵

「養」されたとする者もある。知的面では、「一般教養」を与えられ、思考力、判断力が身についた点、「専門教育」がられた点を挙げている者が多い。「人間関係」では、よい友人を得たという者が多く、また、「本学の教育を受けたこと」受けたとの自負・自信」を述べている者もみられる。「生涯教育」を続けていきたいとする意欲・姿勢を持つこと」ができたとする者、「社会奉仕」の精神が養われたとする者などもある。その他、「学校の雰囲気」「職業教育」「家政上の技術の修得」などが挙げられている(表13参照)。

以下、具体的にその声をきいてみよう。

#### ■精神教育

「教育は知識だけでなく精神を修養することであり、より高い理想を持ち、且つ信念を持ってこれを実行することに人生の意義があるということを考えてようになりました。」(一〇回)

「専門教育以外に、精神生活面に於いて常に自分を反省することを教えられました。母校在学中に得たこの精神は、私の生涯に忘れることのできない尊いものを与え、常に感謝を捧げ、反省の日々を送っています。」(二〇回)

「知識のみでなく人格教育を受けられたこと。」(一〇回)

「私が本校で教えられた教育は、人間としての教育であったと思います。」(二一回)

「精神的な方面は全く母校の賜で、私の一生はこれで基礎づけられたと思います。」(二一回)

「自分なりに明日を切り開く力を持ったことは、母校の教育の賜と感謝しています。」(二二回)

「困る時、苦しい時、迷う時、成瀬先生の精神を思っ心ての燈としています。」(二二回)

「種々の困難に打ち勝って今日になりましたのも、みな成瀬先生の、心の真実をつかめ、とのおさとしの体験があった為と存じます。」(一三回)

「学生時代に学んだ知識が役に立った時代はすでに去りましたが、私が日本女子大学に学んだことの中で、命の糧を求める生活態度と隣人と共に喜ぶ生活は、人生の尊い鍵となっています。」(一三回)

「逆境にある時も決して倦まずにがんばられる底力が得られたことは、母校の精神教育の賜と思う。」(一三回)

「自分の在学中は成瀬先生の生涯中末期に当たり、先生の思想・信仰・信念が最高潮に達し、先生の人格の円熟期と思われま

す。そして、世界人類の進むべき道、又高遠なる理想を説かれ、私共桜楓会員の彼岸に達せられることを念願していられたことがうかがわれ、かくの如き精神教育を受けたことが、今日の自分をあらしめていることを成瀬先生はじめ恩師の先生方に深く感謝する次第です。」(一四回)

「人として、婦人として生きていく上の土台を築いていただけたことを感謝しています。」(一五回)

「精神修養、精神的な生活態度、公私の区別を明確にすることなどを実生活の中で教えられたこと。努力・克己の精神を養われたこと。常によい面・明るい面を見ること、他を信じる生き方に慣らされました。」(一七回)

「成瀬先生の人格教育を受けたことは、私の一生を支配する一番重要なありがたいことだったと思います。」(一八回)

「卒業後五十年にならんとして社会の種々の面を見ますと、人生長い間には山坂あり、波がありますが、いついかなる場に逢っても、その場その場を乗り切るだけの内面的な力が必要だと思えます。その点について、精神の教育に重点を置かれる女子大の教育を受けたことが、今日の私の生活には大いなる利点となっていると思えます。」(二〇回)

「桜楓会員として誇りをもって忠実に職責を果たし得たこと。事にあたって思索・反省のできることは、母校での精神教育の賜と思えます。」(二〇回)

「精神生活を豊かにすることが何より幸せだと考えるようになり、精神生活、あるいは人間としての生活の真髄が、だんだん体得できるようにしむけられたことです。」(二〇回)

「人間形成に大きな意味があり、深く人間を考えるようになりました。特に、四年生の計画発表やそれについての討議などを通して、自治の意識を深めました。今のデモクラシーの教育が五十年も前から行なわれていたこと、成瀬先生の先覚者としての歩みに誇りを持ちました。」(二一回)

「人間形成の上に、寮生活は貴重な関所であった。在学中はよくわかりませず反発もいたしましたが、年を経るにつれて感謝の念を深くしています。」(二一回)

「どんな逆境にあっても自分を見失わなわないで、勇気をもって進むことができました。この思いが戦争中の苦しい生活を支えてくれました。」(二一回)

「自治生活は、主体的な素晴らしい本校の特色と存じます。人間形成ということが、やはり学府といえども第一だと思えます。知的にのみ走って人格の伴わなない人間は、社会的な落伍者であります。」(二二回)

「すべての技術・才能も大切ですが、まず人間的に立派であること、そしてこれは母校で教えられたものであり、年と共にその



ことを感じています。」(二二回)

「精神教育、これは声を大にして誇るに足るべきものであると自覚しております。それを生活化していくことが更に大切なことだと思っています。」(二二回)

「学問をしたというより、精神的に鍛えていただいたいように思います。何を勉強したかときかれても、何も身につけておりません。しかし、生きるために本当のものは何かを教えていただいたのです。感謝して生きていられるのは、目白での生活が私の生涯のうちにあったからと思います。」(二二回)

「精神教育の立派さを最も尊敬しております。この教育があったればこそ、我が子も教育してこられたと思い、苦しい戦争時代も乗り越えられたものと信じています。とにかく、我が道に対して信念を持つことがどれだけ大事であるかをつくづく経験してきました。人として本当の道を迷わず進むことも。」(二二回)

「精神教育を受けたことが一生を通じてよかったと思います。特に永く療養生活をした時、第二次大戦で主人に殉職され、物質は凡て鳥有に帰してしまった時、心の支えとなり、起ち上る勇氣を与えてくれたのは、四年間に自然に心の中に沁みこんだ日本女子大の教育の賜と信じています。」(二二回)

「知的な面では私自身の能力の限界がありますので、身についたものは生涯役立つ程度ですが、精神的なもの、特に私は反省と修練の繰り返しで、少しずつ向上して行く心構えを植えつけて頂いたことをありがたく思っています。信念徹底・自発創生・共同奉仕の教えは常に私の家庭生活に、在住の町の教育、環境整備に、婦人会の創立と養成に、食生活改善の仕事にと役立ち、周囲からも認めていただいたことは、みな女子大学にて受けた教育のおかげであると深く感謝しております。」(二二回)

「徹底した精神教育に深く感謝しております。終戦直後の大変な時に主人を失い、主人の両親と当時小学校におりました三人の子供をかかえ、実に苦戦の幾山河を経て今日に至りました。これでもかこれでもか、という様に神の試練は私の上にもふりかかりましたが、そのすべてを切り抜けてこられたのは、ただただ母校の教育のおかげと感謝あるのみです。」(二三回)

「最もよかったことは、自分を反省し、みつめ、自己を発見し、自分の将来の歩みについて決意ができて卒業したことです。卒業まではどうやら人生観がまとまり、自分の生涯の方向が決まったことが、最もよかった」と表現できる事だろうか。これは成瀬先生はじめ諸先生の御指導の賜物と感謝している。」(二三回)

「学問の研究のみを目的としていた者に、魂の生活の大切さを教えられたこと。当時あまり会が多く嫌に思ったこともありましたが、結論において、多分他校では得られないものがあつたと感謝しています。」(二三回)

「学校時代、一番いやだった信念徹底、共同奉仕の言葉が私を支えました。」(二四回)

「誠心をもって困苦にも負けず、創意工夫により切り抜けることを身につけたことは、戦中・戦後の生活にどんなにか役立ち、感謝しています。」(二四回)

「常に自分をみつめ、反省しつつ自分の理想に近づくべく、たゆまず努力・精進すること。他の忠告を素直に受け入れる心を養われたことなどがよかったと思います。」(二四回)

「自発創生・信念徹底・共同奉仕とくり返したき込まれ、説きあかしていただいたことが、現在に至るまでどんな生活の中でも自分を反省し、また進路を見出す心の糧とさせていただいています。」(二四回)

「学校で受けた細かい講義の内容は忘れましたが、女子大学の教育は其の後の生活経験の基礎となり、長い人生を比較的順調に送られたことを感謝しています。殊に自発創生、共同奉仕、信念徹底のスローガンは、今も変らぬ私の信念で、ございます。」(二四回)

「当時、日本女子大学の教育で最も特色あるものであった人間形成について、ずい分きたえられたことは、何と申しでも非常によかったと思っています。そのおかげで、社会に立ちましてもいろいろな事柄に直面する場合、大きな誤りもなく、中道的な道を信念を持って選ぶことができたような気がします。利己主義でなく生きていくことを教えられたことを、本当に感謝しています。」(二五回)

「精神的な教養を身につけたこと。三つの目標の意義をその後の生活の中で大いに納得でき、それを他にも及ぼそうとしていく。」(二五回)

「最もよかったことは、人間如何に生きべきか、その中心となる精神的教育を深く受けたこと。従って、実社会にあって、我欲を離れ、色々の問題を自発的に、真剣に解決していく精神、態度を植えつけられたことなどです。」(二五回)

「母校が精神的の教育主義だったことを、いつも感謝しております。社会生活をいたします時に、色々な問題に当たります時に、先ず一步退いて、自分の心に反省して、大きな立場からそれを考えてみて、自我にとらわれず判断のできる信念を培っていただいたことです。心豊かに世の中を眺めてゆきたいと願う精神は、何事も至らない私にも、本当に力強いことと存じております。」(二五回)

#### ■ 宗教心の涵養

「永遠の大生命に帰還することを教えられた。先生にめぐり会うことができ、宗教に対する根本的な教育を受けることができた

幸せを感謝している。」(一七回)

「宗教心を芽生えさせていただいた点、信仰の基盤をつくっていただいた点です。キリスト教に入信したのは卒業後まもなくでしたが、キリスト教を信じたことができた喜びで一杯です。」(一九回)

「人の真の姿、生涯育てねばならない何か大きなものに通じる自己を知り、みつめて、人生の苦難にぶつかっても、人間同士の難しさの中でも節操を曲げず、自分の信念で生き抜く力を与えられたことです。」(二〇回)

「キリスト教、仏教の話をきいても、皆根本は同じで、自分がおごらないこと、すべて平等にすごせることなど、知らぬ間に備わったことを喜んでおります。」(二一回)

「自分の力の限度を知り、いつも神の知恵の偉大さに恐れられる生活ができるように、祈ることを教えられたことは感謝です。人生で一番大切なものは何かを考える態度を植えていただいたことは、女子大に学んだおかげと思っております。」(二二回)

「人間としての目を開かせていただき、神仏、宇宙の真理に対して敬虔な念をもつことができる心を培われたこと。」(二三回)

「全人格的な教育を与えられたこと。学問偏重でなく、霊的な生活へと導かれる基礎になったことを感謝しています。」(二三回)

「人間以上の存在について考えるようになったことは、女子大に学んだお蔭と思っております。」(二五回)

#### ■一般教養

「女子大の教育を受けて最もよいと感じたことは、どのような時にあっても物事の判断を正しくすることを教えられたことです。」(二三回)

「他の高等教育機関には無い、広い哲学的・宗教的な教養を与えられたこと。実践倫理などで、最も新しい理想主義にふれ、鍛えていただいたことなどです。」(二四回)

「女子大の教育を受けさせていただきましたおかげで、表に出て働いてはおりませんが、家庭で色々困難がありましても、信念のもとに決断いたし、力強く生きさせて頂き、ただ感謝のみです。」(二四回)

「社会に出て色々な難事に出会う時、物事を判断する基準のようなものが育てられているように思います。その基準のようなものが心に構えられることによって、人生を素直に、誤りなく生きてこれたように思い、これが女子大で受けた最大の賜物と思います。」(二〇回)

「考える力を与えられたこと。いつも目標を見失わない生き方を教えられ、それによって少しでも勉強心を失わない生活が続けられたように思います。」(二二一回)

#### ■人間関係

「よき師に接し、よき友を得たこと、大方の方々が真剣に真実を求めてその人なりに生きていられる姿に接する日常であったことは、逆境にあった時も決してうまずにがんばった底力となりました。」(一三三回)

「あの自治生活の訓練のおかげで、社会に出てからも、そして家庭生活にあっても、人間関係であまり困ったり、苦しめられるということもなく、また苦しいことがあった時なんかも、それらから切り抜けることができたこともたびたびでありました。」(一九九回)

「よき師、よき友を得たことが生涯を通じての仕合わせでございます。我が母校で学び得たことの最も大きな収穫でした。」(二〇〇回)

「日本女子大に学び、寮生活をしたこと、よき師、よき友をいつまでも思いつつ、社会生活をする上に今でも心の支えになっています。」(二二一回)

「人間的なつながりを非常に大切にする習慣が身につくとき、人の為に心の限り誠意を尽してやろうという気持が日常に働いています。」(二二一回)

「人間関係を考え、縦と横との織りなす社会性を身につけさせていただきましたこと。人間関係の一切万事が判るようになったことは、女子大、殊に成瀬先生の教育の賜と存じ肝に銘じて有難く存じています。」(二二二回)

「寮生活を通して、他人との生活の和を知らず知らずに考えていたことで、三〇代になって教師をやりはじめた時に周囲の人と仲よくやっていくことができ、大変よかったです。」(二二四回)

#### ■本学の教育を受けた自負・自信

「女子大の校風の中でプライドを持って勉強し、人生に対する自信が持てたことを感謝しています。」(一一三回)

「四年間の生活を通して、自分は目白で育てられたという誇りのようなものが心身に浸み込んでいます。」(二二一回)

「長い人生を振り返ってみた時、苦しかった時に心を支えてくれたものは、教育を受けたという自尊心でございます。同時に、その苦しさに溺れなかったのも自尊心、その苦しきから救ったのも自尊心のように思います。人間の本来の強さというものを知っているということのように考えます。この知識への第一歩の踏み出しを教えられましたので、女子大学の教育を受けてよか

ったと事ある度に考えております。」(二二回)

「多くの隣人と交際するにも、子供を教育するにも、常に自信を持つことができませんでした。尚、人に接するに常に謙虚な気持を失わないでいられることは、母校日本女子大の教育を受けたお蔭であると思います。」(二四回)

「自分の意志をよく人前でも発表できるようになり、婦人会などでも堂々と発表もでき、また会員、役員たちの統率もできたのだと思います。」(二五回)

「他人に依らない自治の精神を身につけたこと、自分の力に自信を持って行かれたことは今日迄の生活に於いて強い支えとなった。」(二五回)

「学問生活上に自治を仕込まれたことが、後に職業の上に生かされ、意欲に満ちた活動ができました。」(一五回)

#### ■生涯教育

「生涯求めて勉強し、研究してゆきたい意欲に常に燃えていること。社会の為に何か尽くしてゆくべきことを、与えることの喜びを感じて生きていきます。」(一〇回)

「現在、七〇才を過ぎてもいつも自分を育てるための教育を忘れない、その必要を教えてください。そしてそれを社会に、隣人に返すことを忘れない気持を教えてください。」(一五回)

「私の生涯の指針となりましたことは、成瀬先生の生涯教育の精神と思われれます。世の中に一番大切なのは、精神生活の実践であること。現代のように物質的な生活になり、人間の断絶が言われます時にこそ、一生をかけて精神生活の大切さを実践して、人にも呼びかけてまいりたいと存じます。」(一八回)

「講義の内容は忘れても、それによって本を読み、更に研究していく糸口をみつけたことは仕合わせでございます。」(二〇回)

「学生時代、悔なくよく勉強したと思います。寸暇も惜しんで勉強したことを思い出します。そのお蔭で、今日でも人間は一生勉強していくものだという気持を持ち続けております。」(二〇回)

「いつまでも、多分死ぬまで、勉強しようとする意欲を持ち続けていくことができたこと、広い視野で物を見ることができるとなどは女子大学の教育の賜と感謝しています。」(二五回)

#### ■社会奉仕

「私は社会事業学部に入りました。自分だけ幸福であってはならない。社会の人がみな幸福にならなければならないということ

表13 本学の教育の評価（最もよかった点）

(実数)

回	項	目	精神教育		専門教育	一般教育			人間関係			社会奉仕	この自負・自信 本学の教育を受けた	生涯教育	学校の雰囲気	職業教育	家政上の技術の修得	その他	無答	計
			人間形成	宗教心の涵養		先	友	先	先	友	先									
大大大	正正正	前中後	34	12	2	7	—	5	2	4	4	6	3	1	5	1	7	93		
			91	15	5	12	1	9	9	7	19	8	5	—	1	8	—	185		
			210	29	24	27	12	30	11	11	19	13	6	3	1	7	—	370		
全	体	335	56	31	46	13	44	22	22	42	27	14	4	7	16	7	648			

を知り、少しでも社会に奉仕することを教えられたことが最もよかったと思っています。」(二二回)

「自ら常に育つことを考え、且つ社会に何か役に立ちたいと奉仕の日々を持たせていただいたことは、女子大の教育を受けさせていただいた賜物と思っています。」(二三回)

■学校の雰囲気

「成瀬先生により、学校全体が一つの家庭のごとき清らかな精神的な空気の中に生活し、また訓練されました。」(一八回)

(二) 問題点

一方、問題点としては、「専門教育・研究時間の不足」を挙げている者が比較的多い。精神教育に関する批判としては、「修養生活」の問題を指摘する者がある。その他、「実社会からの遊離」「特権意識」「職業人としての訓練の不足」「学校の雰囲気」に対する批判などが出されている(表14参照)。

次に、その代表的なものを拾ってみよう。

■専門教育・研究時間の不足

「学校及び寮生活に会合が多かった為、自由な読書・研究時間などが殆どなかった事を残念に思っています。立派な先生はおられましたがお内気な私など進んで質問という事など思いもよらず、老後になり若い日になぜもっと研究し、知識の方も広く深く得ることができるよう努力しなかつたかと残念に思います。」(二〇回)

「種々の会に取られる時間が多く、勉強や読書の時間に不自由を感じたことなどは、もっと研究され善処されるべきだと存じます。」(二一回)

「当時に顧み、今少し専門的な研究・知識を得られなかったかと遺憾に思っています。」(一一一回)

「実際に学生らしい読書や研究の時間が少なかったことを反省しています。」(一二三回)

「実利的・経済的に独立する精神が、私の場合希薄であったと思います。」(一二三回)

「学科(勉強)を軽んずる風潮があり、実力が乏しかったのではないかと反省している。」(一五五回)

「高等常識的なもので、専門に入り難かった点があったと思います。修養と同時に、学問的にももっと打ち込めるような教えられ方であったらと思います。」(一八回)

「自分で好きな勉強をして、自分でその勉強をまとめていく才能を刺激されるような勉強が望ましいとは思いますが、学問の厳しさを感じさせる教育には欠ける点があったと思います。しかし当時の女子教育環境としては、これ以上求めがたいでしょう。」(一九回)

「精神生活があった事は大変よかったと思う。人間としての成長を考えるようになったし、自己の洞察ということも知った。しかし学問の基礎ができていないし、専門の研究が身につかないという、いわゆる教養の域を出ない学問の在り方に不満を持った。」(二三回)

「よい先生が沢山いられたのに、もっと専門的に突込んで勉強しなかったことが残念です。」(二四回)

「最後の二年間はもっと一つの専門を得る為に努力したかったと思います。」(二四回)

「高等教育といつても要するにお嬢さんのお道楽といった感じで、真に学問をしたという実感はありません。」(二四回)

「私個人としては、専門の研究を怠ったこと、特に家政科であった為よろずや的になり、自分の専門に自信がありません。」(二五回)

「多少不満に思う事は、今少し研究生活に重点を置いて、もっとのびのびと勉強できる自由が欲しかったと思います。」(二五回)

#### ■精神教育に関する批判

「常に非は我にありと反省する習慣を養われていた為、批判精神に欠け、批判的に物を見る力に欠けている点があると思う。」

(一七回)

「社会に出て感じましたが、反省し人に目立つことをひかえる事は結構ですが、もっと積極的に、欠点を出すことを恐れずそれを取り越えて行く勇氣があると思いました。」(一八回)

「学問することと共に、精神生活の芽を育てていただいたことはよかったと思う。しかし、あまりに修養会と名づけられるものが多く、学生にやや強制される感じを与えたようであった。」(二四回)

「精神修養を重視して切磋琢磨を建てまえとしていたかも知れませんが、必要以上に他人のことに干渉し過ぎた嫌いがあります。自分の心が畏縮してしまつてのびのびとした気持が無くなったように思います。」(二五回)

「他人に依らない自治の精神を身につけた事、自分の力に自信を持つて行かれた事は今日迄の生活に於て強い支えとなった。一方、他から強いられる生活には抵抗を感じるので、若い何事にも感応し易いと同時に、総てに反抗心の強い時代には、おおらかな広い眼で(例えばリーダーの師、寮監の先生が)見てほしいと思つた。」(二五回)

「指導者や寮監の先生が少々世話を焼きすぎたくらいがなかったかと思ひます。そのためいらざる反抗を試みる方があつて混乱を招くこともあつた様に思う。もつと現代風に思うことをやらせても、それ程脱線する事もなかったのではないですか。」(二五回)

#### ■実社会からの遊離

「環境に恵まれすぎた方々の学校であつた為、消極的な点、実社会の厳しさの理解に欠ける点があつたように思う。」(二三回)

「実社会、実生活からほど遠いふんわりした空気に浸らせて頂いたことはありがたかつたと思うが、結婚生活に入つてもさつぱり役に立たず、羽仁もと子さんの友の会、婦人の友等によつて、生活の仕方を教えられました。」(二五回)

#### ■特権意識

「自分は日本女子大学の出身者であるという一種の誇りを持っていて他を受け入れない一部の熱心すぎる卒業生があり、ややもすれば目白出身者を最高の人格者であるかのような錯覚を持つ方も出かねない様な雰囲気も当時受けた事があります。」(二三回)

「当時(大正初期)、世間の人はみんな眠つていて専ら精神生活を知らない、目覚めているのは女子大学(卒業生も含めて)の者ばかりだと考え、一人よがりの不遜な気持を持つ人があつたのは遺憾でした。」(一四回)

「現在、女子で大学教育を受ける事は当り前の様になりましたが、私共の年代、或はそれ以前に女子大を出ているという事は、世間の人からエリート意識を持つていると色眼がねで見られがちで、それがプラスになる場合もありましたが、またマイナスになる場合も多く、よほど気をつけないと鼻もちならぬばあさんと言われるおそれがあります。」(二四回)



表14 本学の教育の評価(問題点)

(実数)

項目	時間 の不足 ・研究 専門 教育	精神教育		実社会 からの遊 離	特権 意識	職業人 としての 訓練の不足	学校の 雰囲気	その他
		修養生活	宗教教育					
大正前期	8	4	1	2	4	1	1	2
大正中期	7	7	2	2	1	1	5	2
大正後期	34	20	1	12	4	7	2	15
全体	49	31	3	16	8	8	7	19

## 四 ま と め

第一章においては、大正期の学園生活を、主として教育の受け手であった学生の側から概観し、当時の教育のもたらした影響、効果及び問題点をみようと努めてきた。

大正期の女子教育界は、高等女学校数の変遷からも明らかのように、数の上では飛躍的に発展し、第一次世界大戦

## ■職業人としての訓練の不足

「学問の時間に比して、会合の時間が多かったこと、後日社会に出て勤務してみても事務的な訓練に欠けていた点があったと思います。」(二二一回)

「娘として教えられ、職業人としての教育、指導が不足だったと思う。」(二二二回)

「精神主義と寮生活を通してかもし出された独得の校風の中に、人物育成がなされてきたことが最もよかったと思いますが、この反面学問の追求とか職業人としての職業上の実力涵養に弱さがあったと思う。」(二二三回)

## ■学校の雰囲気

「当時の母校の修養は既成宗教(キリスト教・仏教)は愚夫、愚婦が信ずるもので、宇宙の実体を合体するための瞑想、思索に徹することが奨励されていました。家庭的にも環境的にもキリスト教者として成長してきたまだ若かりし頃の私には、悩みの多い日々でした。今は当時の迷い、思索、祈りの日々はみな感謝であったと実感をもって言えますが……。」(二二三回)

「全体をひっくり返して、つまり反抗も矛盾も感動も苦痛も、四年間のすべてを通してそれが大学生活というもので、それを体験したことが私の一生を通じて最もよかった事だと思っている。ただ学校の空気が何となく宗教的色彩が濃くて、少し暗い、若さのない感じであったことは不満だと思う。」(二二四回)

後の好況とあいまって、女子教育の普及をみるのであるが、その内容は、修身・裁縫・家事・情操教育などに重点が置かれ、男子の中学校とはかなり異なった性格のものであった。女子が教育を受けることに對する世の風潮は、大正七年九月に開催された臨時教育会議の際の「女子教育」に對する各委員の見解にみられるように、女子には裁縫・音楽もしくは簡易の読み書きを教えれば事たりるのであって、それ以上の教育は女子を「生意氣」にし、「虚栄心」を増長させるだけであり、「婚期を逸し」「死亡率を高め」、「民族の繁栄に害あり」とする意見が強く、依然として女子の高等教育は無用であり、有害であるとする傾向が支配的であつた（「江木千之委員の発言（臨時教育会議速記録第二十三号五八頁）」同、山川建次郎委員の発言（同第二十五号二四〇二六頁）」などはその代表的なものである。このような傾向は、本学の入学者の進学に際しての父母の反対理由（一章（内参照））とも一致する。女子が勉学を続けることの困難さは、また中退者数となって現われ、大正期を通じて本学の中退者は三割から四割を占めている。

このような状況の中で、北は北海道から南は九州・沖縄・遠くは中国・朝鮮などから向学心に燃えて本学に入学者たちも、入学当時の年齢はわずか十七才といった者が最も多く、入学の動機も「女学校だけでは物足りなかつたので」「両親のすすめにより」といった、ばく然とした期待、あこがれから本学の門をくぐつた者が多かつた（中期以後は「専門の勉強をしたかつたので」「何か将来社会の役に立ちたいと思つて」と答えている者が次第に増加する傾向がみられる）。

これらの者たちが実践倫理、講義などを通して本学の教育にふれた時、それらはすべて目あたらしく、「十七・八才のときのあの新鮮な驚きと願いを忘れることができない」「自分の今まで経験したことのない強い力を与えられ、神の声をきく思いでした」「魂の奥深く揺り動かされ、終生変わることはない心の拠り所を与えられた」「宗教的なりヴァイヴァルの経験にも似ていた」といった刺戟や驚きを与えられ、「毎日、心の中に光りを与えられるような喜びで緊張して耳を傾けた」「全身全霊を傾倒して心底に浸み入る思いであつた」「未知の世界であつたため大変な喜

びをもって勉強した」「何もかも新しい知識でしたから大いに楽しく意欲的でした」「学問の序の口をのぞかせていた  
だいたようなものでしたが、まことに得意な気持ち」で勉強したことは容易に想像できるのである。

このような学生たちに成瀬校長は、「あなた方と相撲をとるのである。あなた方を生まれ変わらせるのである」と  
いった情熱で、麻生校長もまた「熱涙をもって」迫ったのであり、教授たちも「各自の専攻への真面目な態度と学問  
にかける情熱、生徒の質問に対する誠実さ」で対している。そこには「靈性開発の為の生きた道場、先生も生徒も一  
つにとけ合い名状し難い授業」、「先生の人格が講義の中に生きて温かい楽しい時間」が展開したのであり、「人格の  
にじみ出た講義に心打たれた」「講師の人格に啓発された」「講義の先生としてだけでなく学生との接触が多かった」  
といった教師と生徒との人格的なつながりが生まれ、「系統的でない」「ユーモアに乏しい」「論理が飛躍する」「広く  
浅い」「百貨店式」といった授業の不満や、「マイクなどもなく」「寒く暗い講堂」といった学習環境の不備を越えて、  
「講師の人格が学生の精神生活に働きかけ、生活を楽しく豊かにし、学生の人格形成に自ずと役立つ」といったので  
ある。

大正期の日本女子大学の教授陣は「その道の第一人者の先生方の講義で入学当初胸をわくわくさせたものです」  
「東大・慶大・早大それぞれの有名な当時一流の先生方が来て下さり、個人的にもよく指導していただき、忘れるこ  
とのできない教師と生徒とのつながりがありました」といったような各界を代表する者たちが顔を揃え、「成瀬先生  
の精神教育に理解のある教授の方々がどっしり学校に落着いて実力をつけて下さった」「クラスの人数が少なく先生  
方との親密なつながりがあり、専門の授業のうちに本学の精神的な感化力が大きかった」「学問するということを高  
く評価する雰囲気があり、人生を真面目に探究する気分が学園に漲っていた」といった気風がみられた。これら教師  
たちの中には、井上秀（家政学部二回）丹下梅（家政学部一回、東北大学第一回女子入学者）大橋広（英文学部三回、家政理  
学部六回）上代たの（英文学部七回）といった本学の卒業生も名を連ねている。

おりから教育界は、デモクラシーの潮流の中で、自由教育運動の高揚期にあたっており、本学の教育においても、教師が一方的に知識を注入するといった消極的、受動的な教育をさけ、学生の自動性、自発性を尊重し、みずから為すことによつて学ぶ開発的な教授法を採用している。この「自学自動」の教育は、明治三十九年四月、豊明幼稚園、小学校の開校式並に本校五回記念式における成瀬校長の演説の中で明らかのように、創立当初から提唱され、幼稚園から大学までの一貫した教育方針であつた。「是を一言で申せば、本校教育の方法は、自動的の構成発表と云ふ事、即ち為すことによつて学ばしむるのであります。故に万事を生徒の自動的活動に任せただけであります……。」(『成瀬先生講演集』第四、一二二頁)この具体化が前述したように、学科の選択制となつて現われ、また自治生活、寮生活に、各種の学校行事に適用されていつたのである。

また、成瀬校長はその教育方針の中でも、特に「発表」の教育を重視し、日本の女子にはこの発表の訓練ができていないと憂慮し、種々の生活の場面で発表力を身につけさせることに留意している。

「我が国の婦人には、殊に此の発表 (Expression) と云うことが欠けている。之はどう云う訳であるかを考えねばならぬ。これは第一遺伝、第二我が国の習慣風俗、第三子供の時から教育によるものである。発表といふことは、人間の自然の性であり、人間の進歩の上に大切なものであるが、我が国従来の子女教育の方針は、其の反対なる抑圧 (Repression) と云うことであつて、女子は小さい時から、抑え付けて発表させない様にしたのである。従来は女が少しでも話をする、と、牝鶏が晨すると云つて、殆ど女子に対しては其の精神を発表することを禁じ、只一向に女は従順であり、優美であり、謙遜であるべきを要求し、斯かる婦人を作るには、発表をなくしなければならぬと云つて、自由を束縛して、活動を止めたのである。斯くの如くにして、育て上げられた女子は如何なる女子であるかと云うと、不具な人間であつて、人類を作る要素即ち人間たるべき人間には未だ達して居ないのである。先ず第一に斯かる女子は独立が出来ぬ、常に親により、夫に縋り、或は子を頼んで居るので、若しこれ等のものから離れたならば、乞食を

するか、墮落をするか、厄介物となるかの外致し方なく、つまり男子の寄生虫なのである。是は経済的の方面の事であるが、精神的の方面から云つてもやはり同じである。夫に死なれ子がなくなればもう其の人の生命はないのであって、女子の愛は我が夫、我が子より外には働かない。我が夫、我が子を愛すると云うことは動物にもあるのである。それ以上国家とか、社会とか、人道とか云う様なものは眼中になく、只血族間のみ愛は限られて居るのである。故に其の発表も夫の為、子の為に尽すばかりで、其の他には何にもない、女は貞操さえ守ればよいとして居るのである。

斯くの如く、日本の女子は、身体も、精神も小さく、狭く、つまり一つの制限をつけられて、それ以上には伸びられない。其の他には発表はせられないのであった。つまり女子を人類の要素として認めて居らなかつたのである。然し女子が人間であるならば、只家庭の要素であるのみならず、社会の要素であり、国家の要素であり、人間の要素でなければならぬと余は信ずる。つまり我が国の教育は、女子を女子にし過ぎた。即ち女を人間として教育しなかつたのである。而して女子自らもかくの如きものだと思つて、満足して居るのである。此の考えが変らねば、女子を救うことは出来ない。婦人を救わなければ、家庭の困難を救う事は出来ぬ。家庭を救わなければ社会は救われないのである。即ち我が国を救うことは出来ないのである。」(『成瀬先生講演集』第五、三四―三五頁)

この成瀬校長の願いは「自治生活によって自分の意見を述べることに次第に慣れてきた」「自分の思想を自由に発表するといふ訓練になった」「発表するといふことは自分の頭の中にその内容を明瞭に組み立てなければならぬので、現実社会につながる仕事をしていくのに大変役立つた」「自分の意志をよく人前でも発表できるようになり、婦人会などでも堂々と発言でき、また会員の統卒もできたのだと思う」といった成果となつてアンケートの中に示されている。

同時に、「発表の訓練を受けていない私たちの時代にはクラス会は苦痛だった」「発表会など行きすぎて人身攻撃の

ような結果になる失敗もあった」「議論が多すぎてしかも型にはまった考えでありすぎた」「若者ののびのびした活発な意見をきくことができなかった」といった声にみられるように、時には発表が強制され、型にはまったものになっていった面もあったと思われる。しかしこういった面があつたにしても、当時の学生たちはこのような訓練を通して「他人に頼る依頼心がなくなり独立心を育てられ」、「社会に出て責任ある行動を団体の中でやっていくことができる能力」を身につけていたのであり、これらの経験は、「後年ホーム・ルームの運営に大変役立った」「戦後、仕事や社会活動をするようになって非常に役立った」「自活を仕込まれたことが後の職業生活に生かされ、意欲に満ちた活動ができた」といった評価となつて現われている。

さらに、成瀬校長は眞の自己を発見し信念を涵養する方法として「瞑想」の必要を強調し、修養会などでこの習慣を養うことに努めた。「われわれは自分の内にある本性を見出してゆかねばならぬ。是が修養の根本であるといふことは仏教から言つても、キリスト教から言つても、儒教から言つても、また教育の精神から言つても一致してゐるのである。儒教でいへば活然の氣を養ふとか、仏教でいへば修行をするとかして、邪念を払ひ、精神を集注して、自分の本性を見るのでなければ、眞の力を得ることはできぬ。キリスト教でいへば祈りである。眞の祈りは会堂に集まつてするのでなく、静かな己の部屋にあつて、神と交通するのであります。その交通の最も神聖な靈の作用は Meditation であつて、深く眞理を思ふことでもあります。」

「会をすることも、講義をきくことも無論必要であるが、併しそれだけでは到底眞の自己はできないのであります。それらの事は、内にあるものが働き出して来て、初めて役に立つことになるのであります。今後あなたの方の最も力むべきことは、自分の内にあるものを見出し、自分で考へ、自分で実行して、自分の思想を作ること、自分の内に信頼すべきものを作ることであります。」

「この力を得るには、瞑想をして、深く己の心の内に入りこんで、外から色々妨げるものを除かねばなりません。読

み方によつては聖書をよむのも仏典をよむのもよい。これらは皆心の養ひになりますから、併しぜひとも、Private-hourを取つて、独居瞑想をする習慣を養はなければならぬ」(渡辺英一『成瀬先生』二四五―二四七頁)

軽井沢三泉寮における夏期修養会はこのハイライトであつた。ここにおいて学生たちは「雄大な天地自然の美しさの中に友人と一緒にとけ込んで本来の人間の姿に立ち返つた」ような思いで「一筋に道を求めて瞑想し」「自己を反省し、人生に対して真剣に考え」「自然の美しさと人間のみじめさ、自然の雄大さと自分の貧しさを肌から感じ」「各自、自分をみつめて本当に無我の境地に入ることができた」といった体験を持つたのであり、タゴール翁との出会いなども忘れ得ぬ思い出として綴られている。

同時に成瀬校長は教育実践の場、全人教育の場として、また学内の融和統一をはかり校風を樹立する場として寮教育を重視した。これについては、「自分を抑え人と共同してすべての点に生きられる力ができた」「さまざまな性格の仲間との協調生活をおくつたことが自己本位な自分の性格を変えた」「他人に対しての心の配り方が身についた」「自分以外の人の立場、境遇などを知り自分を抑制すること、人を理解するよう努力することを学んだ」「友情の尊さ人の和の大切さを教えられた」といったような感想にみられるように、寮生活を経験してよかつた面として共同生活を通して人間関係の在り方を知り利己主義にならない生活態度を身につけられた点を挙げ、生涯の思い出として回顧している者が多い。また「共同生活の中で自然に、しつけ、を体得できた」「時間の觀念を持ち自分のことは自分でする習慣を植えつけられた」「生活習慣の多様性を学び実践性を身につけた」「合理的な生活の知恵を生み出すことを習つた」「机上の学問になりがちな家政を実生活で経験できた」といった生活習慣の確立、生活技術の習得ができたといった点を評価している者も多い。反面、問題点としては、「規則のきびしさ」「勉強時間の不足」「自由の束縛」「個人・個性の無視」「世間と隔絶されたような生活」「おままごとの延長」といった批判があり、「栄養面、衛生面」でも、改善すべき点があつたという指摘がされている。

運動会、文芸会、研究発表会、展覧会、音楽会なども、発表の訓練の場、共同生活実践の場として重要な意義を持ち、四季を通じて展開されたこれらの行事は、大正期の学園生活を多に色彩どっている。なかでも運動会は創立当初から目白の名物として宣伝され、新聞雑誌などにも取り上げられた。大正二年の婦女新聞は当時の模様を、「今日は女子大学の運動会で目白の高台に花紅葉が一時に散った。正門には堅鉄扉を鎖して、脇門から一人づつ招待状を検査して入場せしめている。野次馬の混入を防ぐ為であるが此の一事を見ても、女子教育が男子教育以上に困難な事情の存する事を知るに足る」と述べ、更に「此の運動会で一番感じたことは、五千以上の人を入場せしめて些の混乱を生ぜしめず、運動係、接待係、売品係その他各局部が遺憾なく活動して、全体の組織が極めて完全に行われていたことである。一つ一つの演技は数回の練習でも上手になれるが、全体としての活動は平素の訓練に待たねばならぬ。殊に接待係や売品係や、その他場の表面に現われない裏面的任務に各自が忠実に働いているのを見た時、記者は大きな喜びを禁じ得なんだ」(『婦女新聞』大正二年十一月七日付)と各係の活躍ぶりに賛辞を寄せている。

また、死を目前にして、大正八年一月二十九日もたれた成瀬校長の告別講演は「先生が尊い生命をかけて私共に教えて下さった最後の実践倫理」としてその席に連らなつた者たちに深い感動を与え、「死について考え、死にのぞんでの態度」を教えられると同時に「母校の娘である幸福と先生の遺言を守り育てねばならない責任感」を植えつけたのである。

大正十二年の関東大震災に遭遇した学生たちは罹災者の救護、衣服の配給、被災児の世話、人口調査などに活躍し「人間のぎりぎりの時の心境にふれ」「社会の実態にふれた」経験を持ったのであり、服装も綿服が奨励されるなど学生生活にも影響がみられる。

大正十三年十月に開催された国産品奨励展覧会も世の注目を集め、皇后はじめ各宮妃、文部・大蔵・農商務大臣などが来観し、一般入場者は七日間で三万五千人を突破するという盛況であった。



大正期に本学に学んだ者たちの日本女子大学の教育に対する評価としては、本学に学んでよかった点として「精神教育」を挙げている者が最も多い。これらの者たちは実践倫理を通して、「人間としての教育を受けられた」「女子である前に人間であることを教えられた」「人として婦人として生きていく上の土台が築かれた」といった点を高く評価し、「生きるということの出発点をしっかり学ばせていただいた」「人生で一番大切なものは何かを考える態度を植えつけられた」ことが、「現在の自分を造り上げ」、「逆境にある時もうまずにがんばれる底力」となり、「戦中戦後の苦しい生活を生き抜くことができた」と述懐している。特に、宗教に対する根本的な教育を受けたことに対しては、「信仰の基盤」がつくられ、「神仏宇宙の真理に対して敬虔の念をもつ心が培われた。」「自分の限度を知り、いつも神の知恵の偉大の前に恐れる生活ができるよう祈ること」を教えられ、「霊的生活へと導かれた」といったことへの感謝が記されている。知的面の評価では、「哲学的宗教的な教養を与えられた」「物事を判断する基準が育てられた」「考える力を与えられ」、「広い視野で物事を見ることができるようになった」といった点を挙げている者が多い。また、自治生活・寮生活などを通して得られた人間関係については、「よき師よき友を得たことが生涯に通じての仕合せであり、心の支えになった」とする者が多く、「人間関係を考え、縦と横の織りなす社会性」を学び、「人間的なつながりを非常に大切にする習慣が身についた」と評価している。

このような教育をうけたことよって、「目白で育てられたという誇り」「教育を受けたという自尊心」が生まれ、「人生に対する自信」が持てたとする者もある。また、「大学の勉強は社会に出てからの基礎的なものにすぎない。大学を卒業してはじめて自分の勉強が始まると思う」「今日でも人間は一生勉強していくものだ」という気持を持ち続けている」「一生求めて勉強してゆきたい意欲に常に燃えている」「七〇才をすぎても自分を育てるための教育を忘れない」といった生涯教育への意欲や「人の為に心の限り誠意を尽してやろう」という気持が日常に働いている」「自分だけ幸福であってはならない、社会の人がみな幸福にならなければということを知り、社会に奉仕することを教えられ

た」といった社会奉仕の熱意などを表明している者もみられた。

一方、問題点としては、「あまりに会合が多く自由な研究時間が持てなかった」「高等常識的なもので専門に入り難かった」「専門的な研究・知識が得られなかった」「職業人としての教育・指導が不足だった」「学問の追求とか職業人としての職業上の実力涵養に弱さがあった」「学問の厳しさを感ぜさせる教育に欠ける点があった」「教養の域を出ない学問の在り方に不満を持った」といった問題が提起されている。また、修養生活に対する批判としては、「常に非は我にありと反省する習慣が養われていた為に批判精神に欠ける」「自己批判が過剰になり臆病になった」「あまりに修養会と名づけられたものが多く、強制される感ぜを与えられた」「他から強いられる生活に反抗を感じた」「必要以上に他人のことに干渉しすぎた」といった点が指摘されている。その他、「実社会、実生活からほど遠い雰囲気」「実社会の厳しさに対する理解の欠如」といった実社会からの遊離、「世間の人はみな眠っており目覚めているのは女子大学の者ばかり」「目白の出身者が最高の人格者であるかのような錯覚」といった特権意識、「宗教的な色彩が濃く、若さが無い」といったような学校の雰囲気に対する批判などが出されている。

以上、アンケートに示された結果の概要を記したが、これらの結果を総合してみると、大正期の日本女子大学の教育の特色は、「実践倫理はクラスの修養会に連らなり、実倫が当時の日本女子大学の教育と校内の機能運営の中心となっていた」といった感想に代表されるように、実践倫理を中心とする精神教育に重点が置かれ、「人間教育」の道場としての色彩が濃厚であったとみることが出来る。

これは、日本女子大学の開校にさきがけて発表された設立趣旨において、「吾人が執る所の教育上の主義方針たるや、第一に女子を人として、第二に婦人として、第三に国民として教育するに在り」(『日本女子大学設立趣旨』日本女子大学四十年史三九頁所収)と明らかにされているように、まず女子を「人間として」教育することを教育の前提とし、「如何なる境遇に処し如何なる職業に従ふも、人として必ず欠くべからざる資質を修養せしむる」ことを主眼とした

本学の教育方針の反映であつた。

成瀬校長は、当時の女子教育の風潮が、「教育中最も重きを置くべき普通教育」をそこつにし、「目前実用の知識芸能を授けること」でこと足れりとする実用・実益の教育にかたむく傾向を憂い、「男は男らしく、女は女らしく教育すべきは当然なりと雖も、其の主眼たるや、学生をして世渡りの道知らしむるには非ずして、円満完備の人たらしむるに在り、只事を為すの機械たらしむるに非ずして、事を成し得る人物たらしむるに在り、只知識を貯ふる書物箱たらしむるに非ずして、総明なる智力を備へたる活人たらしむるに在り、之を要するに総て心身の能力を十分に開発し、高尚有為の人たらしむるに在り」(『女子教育』一三頁)とその教育理念を明らかにし、日本将来の智母良妻たる者の資格として「高尚の女徳鋭敏の偏力強建の身体及び相応の芸能を備ふべきこと」を挙げてゐる。

また知識の面においては「深く専門の研究に入らんが為には広き基礎知識を要すると同時に、又専門に狭し常識を欠き、遂に健全なる社会生活を営むことは能はざるが如き人物を作らざらんが為にも、学生をして初めは全体に通じて略々同様なる基礎学習を多からしめ、学年の進むに従ひ、次第に狭く専門に集中せしめて、以て各自の境遇希望に従い、其の個性才能を發展せしむるを要すは勿論なり」(『大学教育法改善案』(大正五年)『成瀬先生講演集』第九、一五七頁所収)と基礎学習の重要性を説いてゐる。

これらの基礎に立つて、「女子と雖も予じめ一芸、一能に達し、非常の場合には家族を扶持し国家の公益を助くるの覚悟と伎倆とを備へ国民たるの職務を完ふすべきなり、若し夫れ女子にして這般の覚悟と伎倆なき時は、一身の不幸は云ふも更なり、遂に一家の禍を醸し、社会の厄介物となるを免れざるべし」「将来の日本女子たる者は(家を維持し社会の公益を計るとは万々望まじきものなるが)少くとも、一身又は之を扶助するの伎倆を養ひ置くは極めて必要なり、加え仮令かかる場合なしとするも、一生に一業を成就し、以て自己の幸福を増し社会の公益を計るは必ずしも女子の爲し能はざる所に非ざる也。是れ実に女子にも亦専門教育の必要なる所以なりとす」(『女子教育』二八～二九頁)

と専門教育の必要性を強調したのである。

以上、引用したところから明らかなように、本学の教育は、単なる精神主義の教育にとどまることなく、人間としての教育を骨子とし、知育・徳育・体育・芸術の各面において心身の能力を十分に開発し、各自の特性を生かして一芸一能に達し、婦人として国民として高尚有為の人たらしめることを指向したのであり、その教育理念は成瀬校長が死に臨んで書き残した「信念徹底」「自発創生」「共同奉仕」のモットーに集約されている。

更に成瀬校長は、告別講演において「設立当初の目的に基づき専門学校の現制を改め、綜合大学の組織に進むの時期に到達せるを信ずるを以て、此の際十年計画を以て之が実行を策すること」と設立当初からの念願であった女子綜合大学設立の理想を後継者たちにたくしている。この成瀬校長の遺志を継いで麻生校長は「私達の目的は美しい魂の持主であつて而かも学術上の新問題を解釈し得る思考力を具えた女性を養成しようとするに在る。斯様に私達は精神の修養に重きを置くも勿論私達の大学は修道院ではなく高等の学術研究の機関である」(『日本女子大学四拾年史』二二五頁所収)と高等の「学術研究の機関」であることを明示し、綜合大学の実現に日夜努力をほらつた。しかし女子の綜合大学は遂に文部省の許可するところとならず、大学令による大学は昭和二十四年の新制大学の発足までまたねばならなかつたのである。

このような理想を掲げ、「女子高等普通教育」の普及を目指して実践された本学の教育であつたが、これを受け手(被教育者)の側からみると、そこには幾つかのずれもみられるのである。アンケートの中で指摘されているように、時には修養生活のみが重視され、専門の学術研究、職業人としての教育などの面で欠ける面もあつたであろう。当初、必要に応じて自発的に生み出され、自律的に運営されていた規則であつても、時代が進み組織が整っていくにつれて秩序の維持が優先し、強制され、形がい化されていった面もあつたと思われる。また、高等教育を受けたことの自負が、一人よがりのエリート意識につながつていった面もあつたかもしれない。種々の時代の制約の中で、当初

の教育理念が十分に展開されず、学生たちにも徹底し得ないままに終ったこともあつたと推察される。

しかし、さまざまな問題を包含しつつも、成瀬校長によってかかげられ、燈された理想のともしびは消えることなく、ここに学び育った者たちの胸に燃え続け、戦中・戦後の変動期にも心の支えとなり、現在もなお生活の指針として生き続けているのを知るのである。

五十余年を経た現在、当時のうら若い乙女たちもすでに老境に達しているが、「世界の至る所学校であり、世界の凡ての物はこの教育の教材であり、宇宙の震動バイブレーションはこの教育者である」(成瀬先生講演集第三、一八六頁)「若し能く一芸一能に達し常に進歩して止まざるの人となり、其身微力なりと雖も聊か人を益し、世を利するを得たりとの意識を懐きたりしならんには、仮令に外なる人は日に衰ふるも、内なる人は益々壮に、益々麗しくなり、以て人々の愛敬する所となるや必せり」(「女子教育」二五四頁)の成瀬校長の言葉の如く、「いつまでも、多分死ぬまで勉強しようという意欲」を持ち続け、「一生かかって精神生活の大切さを実践し、人にも呼びかけていきたい」「自ら育つことを考え、且つ社会にも役立ちたい」といった気概をもって歩んだこれらの人々の足跡は紙面にあふれ、第二章にみられるように、家庭に、職場に、あるいは社会活動へと幅広く開花していくのである。

行間ににじむ恩師への思慕、友への感謝、母校なればこそその忘たない批判などは、また母校の発展を願う祈りであり、今日の女子教育への警鐘であろう。ここに綴られたさまざまな思い出をどのように受け止め、生かしていくことができるのか、歴史の重さ、責任の大きさを思うのである。

## 第二章 大正期の卒業生の卒業後の生活

### 一 卒業直後の進路

女子で高等教育を修めた者の極めて少数であった大正期に、本学を卒業した者たちは、どのように社会に踏み出していったであろうか。卒業直後の進路を述べる前に、まず大正期の社会情勢を概観し、さらに女子の一般的な就業状況などを労働年鑑、(第一回国勢調査・東京市社会局調査)を参照して、女子の高等教育終了者を迎え入れた当時の社会状況を把握しておきたい。

大正期を、前期・中期・後期の三期にわけて展望すると、前期は、第一次世界大戦をはさんでおり、大戦中は、経済界は空前の好景気で、軍需産業の発展や輸出の増大などのため各種の産業が発展拡大した時期である。その反面では物価が著しく高騰した。

大正中期に入った大正七年には、富山県に米騒動が起ったのをきっかけに、その後騒乱が全国的にひろがった。大正九年の経済恐慌により各地に、企業整理やストライキが続発し、景気の後退がみえはじめた。

大正後期に入って大正十二年には関東大震災がおこり、不景気は決定的となった。

この間、大正九年には第一回国勢調査が実施され、また大正十一年には東京市役所が東京市内の職業をもつ婦人についての調査をおこなうなど、社会調査が近代的手法をもってとりおこなわれている。これらの調査結果から当時の

女子の職業の状況についてみることにしよう。婦人労働者や職業婦人の一般的状態はどのようなものであっただろうか（労働年鑑 第六卷四四頁～四六頁より）。

資料1 第一回国勢調査より女子就労者数（単位千人）

職業の種類	職 員	労 務 者	家事使用人	計
農 業	—	五、八九五	一四九	六、〇四五
水 産 業	—	四〇	七	四七
鉱 業	—	九八	一四	一一二
工 業	八	一、一九九	一二六	一、三二三
商 業	一三	五八六	一九七	七九六
交 通 業	七	五三	一七	七七
公務自由業	一三九	一一二	八八	三四九
その他有業者	—	一七四	九	一八三
家事使用人	—	—	五五	五五
無 職 業	—	—	五六	五六
計	一六八	八、一六七	六五八	八九九三

その業態の範囲に於て共に拡大されつつあるのである。前記大正九年国勢調査推計により、女職員数十六万八千人中、十三万九千人は公務自由業に従うところの人々である。

東京市社会局が大正十一年十一月・十二月にわたって、東京市内の職業婦人についての調査をしたが、その概略はつぎのとおりである。

教師、タイピスト、事務員、店員、看護婦、交換手の諸職業九百人について年齢をみると、十五才以上二十五才未満の者が大部分であつて七一・四%を占め、年齢と共に減少している。配偶関係は、教師では、未婚者二八・八%有配偶者五九・一%を示しているが、他の職業においては、未婚者が八三・六%乃至九八・三%（交換手）であつて、有配偶者は一〇%を超過するものはない状態である。扶養者の有無については、離婚者、寡婦においては扶養者のある者が離婚者で七二・七%寡婦で八五・七%あるが、未婚者では九・六%を示すに過ぎない。職業別にみると、教師が四八%を示しているが、タイピストでは扶養者のある

#### ■一般の状態について

大正九年第一回国勢調査の推計数によれば女職員十六万八千人、女労働者八百六十七千人、家事使用人六十五万八千人、合計八百九十九万三千人となり全人口の一六・一%また女子全人口の三二・二%となる。職業の種類とその従事する業態とは、資料1に示すとおりであるが、職種の内、労働者の七二・一%は農業に従事するもので、工業は一四・七%にあたる。

#### ■職業婦人

経済環境の変遷につれて、近來著しき現象の一つとなつて現われつつあるものに職業婦人の問題がある。この職業婦人の問題たるや、その数的に於て、又

資料2-1 職種と収入 (東京市社会局職業婦人についての調査 大正十二年)

職種	俸給(平均)	副収入	総収入
教師	六七円二三銭	五五五八銭	七二四八一銭
タイピスト	四〇円二七銭	一四八二銭	四二四九銭
事務員	三三円七銭	一四六二銭	三三四六九銭
店員	三三円二五銭	五一銭	三三円七六銭
看護婦	三九円一五銭	二四九八銭	四二四一三銭
交換手	三五円六〇銭	二四八銭	三七四六八銭
合計	三八円九六銭	二四一九銭	四一九一五銭

の者にあつては補助を受けている者が七一・〇%ある。これらについて、職業別にその割合をみると、資料2-2 職業婦人と扶養にあるとおりである。

資料2-2 職業婦人と扶養

職種	補助なしに生活する者	扶養する者	補助している者	補助を受けている者	合計
教師	一八・二%	二二・二%	五七・六%	三・〇%	一〇〇・〇
タイピスト	五三・八	—	七・七	三八・五	一〇〇・〇
事務員	二二・六	一〇・六	一六・四	五〇・四	一〇〇・〇
店員	二四・四	九・五	七・二	五八・九	一〇〇・〇
看護婦	七五・〇	二〇・〇	二・五	二・五	一〇〇・〇
交換手	三一・八	七・四	一八・二	四二・六	一〇〇・〇
平均	二七・九	一一・二	二〇・四	四〇・五	一〇〇・〇

これらの資料からもわかるように、大正期は漸やく女子が労務や家事使用以外の職域にも進出が可能となつていわゆる「職業婦人」という呼称で呼ばれるような女子の職業人が、少なくとも調査対象としてとりあげられ得るまでに増加して来た時期であつたといえよう。すなわち大正九年の第一回国勢調査結果では女子の就業者は総数八百九十九

者は全然なく、平均において一二・五%である。教育程度は、教師、タイピスト、事務員などに高いのは当然で、いま平均についてみると、尋常小学校卒業二八・九%、高等小学校卒業三一・二%、中等学校卒業一六・六%、職業教育を受けた者一七・〇%である。住居については、家庭にある者が最も多く(七八・一%)、寄寓者一〇・五%で下宿する者は〇・三%にすぎない。

収入については諸職業の平均を見ると、上の表のとおりである。(資料2-1 東京市内職業婦人の職種と収入)

生計については支出状態が発表されていないが七十円以上の収入者にあつては補助を受けている者は絶無であるが、三十円以下



表15 卒業直後の進路 (数字は%)

回生・学部		項目	卒業後 もさらに勉学 を続けた	職業に ついた	職業では ないが社会 的な仕事に ついてた	専念した 家庭で いごごに	家業の 手助けを した	家事の 手伝いを した	卒業後 すぐに結 婚した	不明	合計	
											実数	%
回生	前期	17.2	43.0	4.3	17.2	3.2	21.5	14.0	7.5	93	127.9	
	中期	13.5	49.2	4.3	6.5	1.1	13.0	11.4	10.8	185	109.8	
	後期	7.0	43.2	5.4	18.1	2.7	19.5	10.5	8.1	370	114.5	
専攻学部	家政学部	10.6	28.5	5.1	22.6	3.0	26.4	14.0	5.5	235	115.7	
	家政学部	9.3	61.7	5.3	10.1	2.2	11.9	10.6	8.4	227	119.5	
	国文学部	4.8	57.1	6.0	7.1	3.6	11.9	8.3	13.1	84	111.9	
	英文学部	16.7	36.1	2.8	15.3	—	19.4	6.9	16.7	72	113.9	
	社会事業学部	16.7	53.3	3.3	6.7	—	10.0	13.3	6.7	30	110.0	
合計		10.3	45.8	4.9	14.7	2.3	17.9	11.3	8.8	648	116.0	

万人で、女子の全人口の三分の一に達していたのであるが、このうちの大多数は、労務に従事する者八百七万人及び家事使用人の六十六万人で占められ、この労務者と家事使用人で全女子就業者の約九八%を占めている。「職員」として就業している者は、全体の中での割合は極く少ないが、労働年鑑が指摘しているように、女子の就業は数においても職種においても、かつてなかったひろがりをもちつつあったわけである。

このような状況において、当時女子が専門職として進出のできた一つの典型的な職種は、「教員」であったといえる。明治三十二年に高等女学校令が発せられ、高等女学校の教員として多数の女教員が必要となったことによるが、さきの東京市社会局の資料からもわかるとおり、「教員」は数においても俸給の高においても他職種にぬきんでている。勤続の状況について、配偶者の有無から考察すると、有配偶者率の高いことは他と比較にならないほどで、教育程度の高さと相俟って、最も安定度の高い専門性豊かな職業であったことは明らかである。

さてこのような社会情勢にあって、本学を卒業した者たちは、卒業直後にどのような進路をとったのであろうか。

卒業直後の進路について調査結果をまとめたのが表15である。

一見して気づくのは、卒業時期による差よりも、学部による差にかなりのものがあることであろう。

学部別にみると、家政学部が他学部と傾向が異なり、他学部では何らかの職に就いた者が数としては多いのに対し、家政学部では「家事の手伝い」「けいこごと」などをしたという者が多く半数を占める。直ちに「結婚生活」に入った者の比率も、他学部に比べると高い。職に就いた者は三割に満たない。

家政理学部・国文学部・社会事業学部の三学部では、職に就いた者が五割から六割以上で、「家事の手伝い」や「けいこごと」はそれぞれ一割前後を示すにすぎない。

英文学部は、家政学部と他の三学部とのおちよど中間で、就職者が全体の「三分の一強」いるのに「家事の手伝い」と「けいこごと」の両者でほぼ同率の「三分の一強」となっている。

また卒業の時期別にみると、当時の社会情勢の推移を反映して、第一次大戦による好況期といわれる中期卒業者に就職率がやや多く「家事の手伝い」や「けいこごと」をした者の率は低下している。

以下に各進路の内訳を述べよう。

### 1 勉学を続けた場合

卒業直後の進路として「さらに勉学を続けた」と回答した者は全体で六十七名であった。これは全体の約一割にあたる。

内訳は、外国へ留学した者（視察一名を含む）が十名、他大学（主として国立大学）へ入学したり、聴講生となった者が八名あり、母校（日本女子大学）において、先生を手伝いながら勉学した者や、再入学、他課程の継続履習などをした者が八名、その他、外国語、文学の研究などの者が十三名などである。

### 2 職業に就いた場合

前にも触れたが、卒業後の進路としては、職業に就いた者が最も多く、全体では四五・八%となっている。

資料3-1 東京音楽学校(女子)卒業者の進路(数字は%)

職 回 生	東京音楽学校 職員	師範学校 教員	高等女学校 教員	小学校 教員	その他の学校 教員	研究科・選科 生	外国 留学	芸術従事 者	その他の業務 者	就職未定 者	合 計	
											実 数	%
大正前期	0.4	6.0	29.4	8.4	2.8	12.1	1.4	—	—	39.5	212名	100.0
大正中期	—	6.5	34.8	7.9	3.3	8.3	0.1	2.5	2.5	33.5	278	100.0
大正後期	—	9.5	25.2	7.2	4.1	9.8	—	1.6	1.9	40.7	317	100.0
合 計	0.1	7.5	29.6	7.8	3.4	9.9	0.6	1.5	1.5	37.9	807	100.0

資料3-2 東京及び奈良女高師卒業者の進路(数字は%)

職 回 生	学 校 種 別	女 高 師 職 員	師 範 学 校 職 員	高 等 女 学 校 教 員	其 他 の 学 校 教 員	幼 稚 園 保 母	女 高 師 研 究 生	就 職 未 定 者	合 計	
									実 数	%
大正前期	東京女高師	3.9	14.0	61.6	8.7	5.2	0.1	6.0	484	100.0
	奈良女高師	1.8	6.7	79.5	6.1	0.9	0.6	4.3	327	100.0
大正中期	東京女高師	3.8	11.6	66.6	5.1	5.9	0.4	6.6	509	100.0
	奈良女高師	—	11.5	84.9	1.3	0.3	0.3	1.7	305	100.0
大正後期	東京女高師	3.0	10.1	76.1	6.5	—	—	4.3	507	100.0
	奈良女高師	—	8.8	83.6	4.7	—	—	2.9	408	100.0
合 計	東京女高師	3.5	11.9	68.2	6.7	3.7	0.3	5.7	1,500	100.0
	奈良女高師	0.6	8.9	82.7	4.1	0.4	0.3	3.0	1,040	100.0

当研究所が過去に行なった昭和二二年度から四〇年度卒業生百六十五名に対する調査においては、卒業後に職業経験ありとする者六八・三%であった。が、これは卒業後三年乃至二〇年経た者についてであって、卒業後間もなく就職した場合のみではないから実際にはもっと低いはずである。同調査と同じく「女子の生涯教育」の中の「女子の大学卒業者の職業」広田寿子は、昭和四〇年度本学卒業生の就業率を、家政学部六二%、文学部五七%と報告している。

\* 女子教育研究所 研究双書3『女子の生涯教育』「女子大学卒業生の生活、意見調査」

当時の女子の高等・専門教育機関の卒業生の卒業後の進路について

表16 卒業生の就職の職種（数字は％）

項 目 回生・学部	団 体 役 員	大 学 の 助 手 研 究 員	高 女 教 員	幼 稚 園 小 学 校 教 員	其 他 の 学 校 職 員 (寮監含む)	官 吏 (大使館勤務含む)	会 社 員	記 者 出 版 者	マ ス コ ミ	栄 養 士	桜 楓 会	無 答	合 計	
													実 数	%
回 生 別	大	8.3	69.5	—	5.6	—	2.8	—	—	—	2.8	11.1	36	100.0
	正	—	8.5	57.4	4.3	5.3	2.1	3.2	4.3	—	6.4	8.5	94	100.0
	大	0.7	6.0	55.0	7.9	7.3	9.3	4.6	5.3	1.3	1.3	1.3	51	100.0
専 攻 学 部 別	家	—	6.3	35.9	12.5	9.4	9.4	4.7	1.5	3.1	10.9	6.3	64	100.0
	政	—	9.1	71.2	2.3	5.3	0.8	2.3	0.8	—	1.5	6.8	132	100.0
	文	—	2.2	66.7	4.4	2.2	4.4	2.2	15.6	—	—	2.2	45	100.0
	英	4.2	12.5	58.3	—	8.3	—	8.3	8.3	—	—	—	24	100.0
合 計	—	—	6.3	18.8	12.5	43.8	12.5	6.3	—	—	—	—	16	100.0
合 計	0.4	7.1	57.7	5.7	6.4	5.7	3.9	4.3	0.7	3.2	5.0	281	100.0	

ては、国立の教育機関については、日本帝国文部省年報にその資料がある。しかし、私立校の場合にはこれに類するものを求めることが難しく、各学校の校史といったものにも、卒業後の進路について頁をさくものは殆んど見当らない。さて、日本帝国文部省年報によれば、専門学校では僅かに音楽学校に女子の卒業生があるほか、東京および奈良の女子高等師範学校生徒の卒業後の進路が掲載されている。これらの学校卒業生と直ちに本学卒業生の場合とを比較することが当を得ないことは、学校設立の目的からみても当然である。しかし、大正期に女子の専門、高等教育機関の卒業生がどのような進路をとったかを知る上には、極めて貴重な資料と思われるので、本調査結果と同様に大正期を前・中・後期にわけて、それぞれの時期での各学校生徒の卒業後の進路別をみたのが、資料3—1および3—2である。

さて、資料3—1は東京音楽学校女子卒業者の場合であり、前・中・後期を通じてはほぼ五割が就職し、一割強が勉学を続けている。東京および奈良女高師卒業者の場合は、研究生として母校に留まり勉学を続けるのは極めて稀であり、また就職未定の者も、全体を通ずると五分内外で学校の性格上当然ではあるが残りの約九割五分が高女教員・師範学校教員その他の教職についている。

では本校卒業者の就職はどのようであったかという点と表16に示すとおりである。

表16より明らかなように、最も多くの者が就いたのは、やはり高女教員である。前期では就職者の七割、中期では六割、後期では五割五分といったおよその割合で、高女の教員として就職している。

その他では「幼稚園保母」ならびに「小学校教員」と、本学の「寮監」となった者を含む「その他の学校職員」が多く、概して教職が多い。とはいえ、僅少ではあるが、前期・中期・後期と時期を経るにつれ、教職以外の職域に若干の拡がりが見られる。

学部別に職種の状態をみると、家政理学部、国文学部に高女教員が多く、七割近くを占め、英文学部がこれに次いで、六割近くの者が高女教員となっている。

これらの資料からも、大正期における高等・専門教育を修了した女子の、社会の受け入れがどのようなものであったかがうかがえるのであるが、この間の事情については、『日本就職史』（尾崎盛光著、文芸春秋社）の中で、大正末期の不況時における労働市場の様相について、つぎのように、大正十四年五月一日号の雑誌「エコノミスト」の記事が紹介されている。

「男子労働者の間に就職難の声高きにも拘らず、婦人労働者のみはひっぱり尻の状態にある。大正一三年一ケ年で男子労働者は求職二七万人に対し求人二四万人、婦人は求職一万七千人に対し求人四万一千人……」さらに、同年一月二八日付朝日新聞では「いわゆるインテリ女性のほうも大変な売れ行きであったらしい。津田英学塾の今年の卒業生に対し、東京・大阪の各女学校から英語の先生の申込が殺到している」という記事のあったことを紹介している。

このような傾向は当然本学卒業生にもあてはまることであつたろう。特に高女教員の需要は大であり、高等教育を終えた多くの女子が学園から教壇へと巣立っていった様子が、これらの資料からよく理解される。

### 3 「けいこ」と「を行なった場合

学校を卒業してから結婚するまでの間、どのような過ごしかたをしたかをみると、いわゆる結婚適齢期にあたる

表17 けいこごとの種類

けいこごと	人数
華道	27
茶道	26
和裁	18
洋裁 (手芸を含む)	11
音楽 (洋楽)	8
音理	6
料舞	4
謡曲・仕舞	4
日本舞踊・地唄	3
書道	3
絵画・盆石	2
琴・三味線・長唄	17
その他及び不明	5
合計	130

注 1人で何種もけいこごとをしている場合があり、実人員数合計は95名であった。

関係もかなり多い。

## 二 卒業後の家庭生活

### 1 結婚の時期

女子の高等教育の歴史も浅く、卒業生の数も少なかった当時、結婚についてはどのように社会に迎え入れられたかをみるため、結婚の年齢や、配偶者の職業等を検討してみた。

結婚年齢は表18のとおりで、二十一才から、二十五才にかけて結婚年齢が六割以上と多い。現代の卒業生の場合は二十四才、二十五才に集中している(前出『女子の生涯教育』・女子教育研究双書3、「女子大卒業生の生活・意見調査」一〇五頁第六表「結婚の年齢」)のであるが、大正期の場合、かなり、年齢の分布の幅が広いことがわかる。これは入学時の年齢がすでに現代よりはまちまちであったことも理由の一つと考えられる。本調査報告、「第一部第一章入学者の年齢」によれば、女学校卒業後直ちに進学したと考えられる者は全体の約八割である。一般の場合の結婚年齢は、当時

女子では、何らかの「ならいごと」が行なわれるという風潮が現代では強い。

大正期ではどうであろうか。

学校卒業後は「けいこごと」に専念したと回答した者は全体の約一割五分であった。その内容は表17のとおりである。

華道・茶道が多く、(これは現代でも変わらない傾向である——本研究所の最近行なった調査による) ついで和裁・洋裁が多く、音楽

表18 結婚年齢一大正  
と昭和の比較 (100%)

		結婚の年齢	%
大 正 期		～19才	0.5
		20	2.3
		21	11.9
		22	13.2
		23	15.4
		24	13.9
		25	12.1
		26	6.8
		27	6.8
		28	4.0
		29	2.3
		30～34	4.8
		35～39	3.3
		40才以上	1.5
	無 答	1.3	
		対象人員数	605名
昭 和 期		21才以下	3.4
		22～23才	29.0
		24～25才	41.4
		26～27才	17.2
		28～29才	5.7
		30才以上	3.4
	無 答	—	
		対象人員数	1518名

〔『女子の生涯教育』p. 105 第6  
表より〕

は何才ぐらいであったかを、内閣統計局編纂「日本帝国人口動態統計」より調べた結果が資料4である。これによれば、大正年間を通じて、初婚者の平均年齢は、ほぼ満二十三才といつて

資料4 平均婚姻年齢および最  
頻結婚年齢

年 次	平均初 婚年齢	最頻年齢(順位別)		
		第1位	第2位	第3位
明治45年	22.9才	20才	19才	21才
大正1	22.9	20	19	21
2	23.0	20	19	21
3	23.2	20	19	21
4	23.0	20	21	19
5	23.1	20	21	19
6	23.2	20	21	19
7	23.3	20	21	19
8	23.2	20	21	19
9	23.0	20	21	19
10	23.0	20	21	19
11	23.0	20	21	19
12	23.1	20	21	22
13	23.1	20	21	22
14	23.1	20	21	22
昭和15	23.1	20	21	22
1	23.1	20	21	19
2	23.1	20	21	19
3	23.1	20	21	19

(厚生省編「人口動態統計」および内閣統計  
局編)「日本帝国人口動態統計」より

よい。が、実際に最も多数が結婚しているという意味での最頻年齢を、一位から三位までとってみると、表18のように、二十才・十九才・二十一才といったところに集中し、二十才前後で、極めて多くの者が結婚している。

このような一般の傾向からみると、本学卒業者では、二十三才、二十四才、二十二才がやや多い程度で、二十五才以上で結婚した者もかなりいたのであって、一般での最頻年齢層が、二

十才・十九才・二十一才であったこととくらべると、たしかに在学年数だけのずれはあったといえる。「調査概況」の大正時代の本学入学者のところでも、父母の入学に対する反対理由の一つとして、「婚期の遅れを心配する」者が、特に母親では反対意見の最も多いものであったことが指摘されていた。

なお、本調査の対象者の既婚率は、表19のとおりで、ほぼ九割三分にあたっている。

表19 既婚率(数字は%)

項 目		既 婚	未 婚	無 答	合 計	
					実数	%
回 生	大 大	90.3	9.7	—	93	100.0
	正 正	93.5	4.9	1.6	185	100.0
	正 後	93.2	6.8	—	370	100.0
専 攻 学 部	家 家	95.7	4.3	—	235	100.0
	政 理	93.0	6.6	0.4	227	100.0
	国 文	90.5	8.3	1.2	84	100.0
	英 文	86.1	12.5	1.4	72	100.0
	社 会	93.3	6.7	—	30	100.0
合 計		92.9	6.6	0.5	648	100.0

これら職業が示したものを次に掲げておく(資料5)。時代の隔たりのため、この結果を本調査結果に適用する場合、若干の誤差があらうかと思われるが、配偶者の職業に、どのような階層点を与えられるかの一資料となり得よう。」

### 3 子ども

結婚した者たちは、何人の子どもを生み、育てたのであろうか。

表21は、大正期卒業者と戦後の卒業生の子どもの数を比較対照したものである。現代では、子どもは二人か一人といたった場合が多く、三人となると激減してくるが、大正期卒業者では、三人、四人、二人といった子持ちが多く、五

表20 配偶者の職業

配偶者の職業	%
会 社 員	30.9
官 吏	14.7
大 学 教 官	13.2
軍 医 師	9.4
中 学 校 教 員	6.3
技 術 師	2.3
商 業 官 員	2.3
司 法 官	1.7
芸 術 家	1.8
牧 師・僧 侶	1.3
記 者・出 版 業 者	1.3
農 林 漁 業 生	0.7
大 学 職 他	2.0
無 職	1.5
無 答	0.7
無 答	3.3
合 計(実数)	605名

(100.0%)

### 2 配偶者の職業

結婚時における配偶者の職業は、どのようであったかといえば、表20のとおりで、会社員が最も多く官吏・大学教官・医師の順に多いほか、軍人や中学校教員がこれに次いでいる。

〔なお、参考のために、日本社会学会が、昭和三〇年に発表した「日本社会の階層的構造」より、階層分析にあたってとられる基準となる職業分類と各職業の



資料5 職業とその社会的階層点

職業大分類	格付けのための職業	階層点
専門的職業	教授	91
	医師	84
	教諭	70
	住職	65
	技師	72
管理的職業	市長	75
	課長	75
事務的職業	事務員	55
	警員	52
	官	57
販売的職業	店主	47
	店員	37
	勧誘員	42
	行商	28
	理髪師	42
熟練的職業	工師	43
	物工	41
	自動車工	42
	印刷工	40
	パン工	34
半熟練的職業	工手	41
	盤工	34
	紡績手	41
非熟練的職業	農夫	51
	農夫	30
	焼夫	24
	炭夫	37
	炭夫	24
	炭夫	24
	運搬夫	22

人以上もかなりあるわけで、相当の開きがあることがわかる。「産児制限」といったことが、軍国主義の体制の「産めよやせよ」の中で自由に普及され得なかった時代と、戦後との社会的背景のちがいを感ぜさせられる。

三 職業生活

1 職業経験の有無

本学卒業直後に職業に就いた者は、前述のとおり全体の約四割五分で、職種としては高女教員が圧倒的に多かった。

表21 子どもの数 (数字は%)

		大正の生	戦後の生
未婚		6.6	7.3
既婚	子0人	9.3	14.3
	1人	12.5	26.3
	2人	17.3	42.4
	3人	18.4	9.1
	4人	16.4	0.3
	5人	11.6	0.3
	6人	3.7	—
7人以上	3.1	—	
無答		1.7	—
合計		100.0	100.0
実人員合計		648名	1655名

表22 職業経験の有無(数字は%)

項 目 回生・ 学部		職業と はな ない も つた こ と	過 去 に 職 業 を も つ た こ と が あ る	現 在 職 業 を も つ て い る	無 答	合 計	
						実 数	%
回 生 別	大 大	26.9	49.5	14.0	9.7	93	100.0
	正 中	23.2	49.7	20.5	6.5	185	100.0
	前 後	26.2	40.5	29.2	4.1	370	100.0
専 攻 学 部 別	家 政 学 部	35.7	32.3	23.8	8.1	235	100.0
	家 政 理 学 部	19.8	53.7	22.9	3.5	227	100.0
	家 国 文 学 部	16.7	48.8	29.8	4.8	84	100.0
	英 文 学 部	20.8	50.0	22.2	6.9	72	100.0
	社 会 事 業 学 部	23.3	43.3	33.3	—	30	100.0
合 計		25.5	44.4	24.6	5.6	648	100.0

のばらつきはあっても、ほぼ一様に分布している点に注目したい。  
本調査の対象となった者の約七割が、長短の期間何らかの形で職業生活を持ったことである。

### 3 職 種

職業の中で最も長い期間就いている職業、または現職者にあつては現職を、その人の主な職業としてとつたのが次の表24である。先に卒業直後の職業について掲げた表16と表24を比較するとき、その職域が広いこと、専門職、管理職が増えていることのなかに、卒業生が示した社会での確固たる足跡を見出したといつてよいだろう。それは職種

そこでの職業経験も含めて、卒業後現在までに職業に就いたことのある者がどれくらいかという点、表22のとおりで実にほぼ七割にのぼっている。

出身学部別にみると、卒業直後の進路での傾向と同様に、家政学部出身者が他学部より職業に就いたことのない者が多く、家政学部国文学部出身者に職業経験を持つ者の割合が高い。

### 2 継続の期間

職業継続の期間をみるため、勤務年数の合計をとつて表にしたのが表23である。

合計勤務年数が5年未満の者が約二割五分あり、最も高い比率を示しているが、それ以上では、五年きざみでとつた各期間に、多少

表23 合計勤続年数(数字は%)

回生・学部	項目	1～5年	6～10年	11～15年	16～20年	21～25年	26～30年	31～35年	36～40年	41年以上	無答	合計	
												実数	%
回生別	前期	26.4	7.4	5.9	1.5	4.4	4.4	5.9	4.4	20.6	19.1	68	100.0
	中期	26.7	9.2	6.3	9.9	7.7	6.3	4.9	2.8	12.7	13.4	142	100.0
	後期	23.4	11.0	11.7	13.5	7.0	4.8	5.1	6.6	6.6	10.3	273	100.0
専攻学部別	政治学部	21.9	11.3	9.9	13.2	6.6	6.6	2.7	4.6	7.3	15.9	151	100.0
	家政学部	27.0	9.3	9.3	8.3	8.3	3.8	6.0	4.4	13.7	9.9	182	100.0
	国文学部	20.0	14.3	10.0	8.6	5.7	4.3	8.6	2.9	10.0	15.7	70	100.0
	英文学部	29.8	5.3	7.0	8.8	5.3	5.3	5.3	14.0	7.0	12.3	57	100.0
	社会事業学部	30.4	4.3	8.7	26.1	4.3	8.7	4.3	—	13.1	—	23	100.0
合計		24.8	9.9	9.3	10.8	6.8	5.2	5.2	5.2	10.3	12.4	483	100.0

数によっても明らかである。前出の表16の卒業直後の職業では「高女教員」を筆頭に10種を数えるのみであったのに、職業中の主たる職業をとった表24では、同じ分類に従って21種に分類され、さまざまな分野・領域への進出を把握することができる。

#### 4 永年勤続者

職業を持った卒業生たちの進出の跡を辿るために、職業生活31年以上の者100名について、その職業を調べてみた。

(なお、先の項で触れたように、この調査の対象者たちのうち職業経験のある者は六九%、三十一年以上に及ぶ者はその中で二〇%強の百名である。この百名のうち、既婚者は七十名、未婚者は三十名であった。)

#### ■職業経歴

職業経験を大別すると次のようになる。

- ① 高女教諭をふり出しにした者。
- ② (主として母校の) 大学・専門学校・研究所等の助手をふり出しにした者。
- ③ その他。

右の①高女教諭をふり出しにする者の中では、

- ④ 一貫して高女(戦後は新制の中学・高校)教員の職にあった者。この中に

は校長・学園長の職に就いた者が含まれる。

㊸ 高女教諭より短期大学・大学の教官に昇進した者。(戦後の学制変革に際して、短期大学や大学が数多く設立されたが、この中には高女を母体とする場合もあることが考えられる。)

㊹ 教職以外の職業に転職した者。

と分類できる。

また㊺の母校等の研究機関の助手をふり出しにする者の中では、

④ 大学教官としての職にあつて、教授への道を進んだ者。

㊻ 高女または中・高教員へ転じた者。

㊼ その他の職業に転じた者。

がある。

③のその他は雑多であり、公務関係、社会事業関係、マス・コミ、出版関係などさまざまである。

最も多いのは①の④、すなわち、高女教員(中・高校教員)として一貫して後期中等教育の現場に教師として過ごした者で二十四名を数える。この内七名は校長・学園長などの責任ある管理職に就いている。

その他の職業から高女(中・高)教員に転職した者を含めると、二十七名が最終職業として、高女(中・高)教員となっている。その他では、大学教官への道を進んだ者が合計して二十三名にのぼっている(表25職業経歴参照)。

三十年・四十年と長い職業生活の間に、どのような種類の職業に就いたかをみるため、次に職歴中にみられる職種を全て採り上げ、その頻度を表にまとめた(表26参照)。この表では、一人が何種もの職業に就いた場合もそれぞれ計上しているので、合計が二百九十三となっている。

表25と表26とから、永年職業を持続した者たちの職業領域での発展の様子がうかがい知れる。

表24

大学 助手	中 高 校 教 員 ( <small>を 含 む 旧 制 高 女 教 員</small> )	幼 ・ 小 学 校 教 員	各 種 学 校 教 師	官 吏	会 社 員	マ ス コ ミ ・ 出 版	栄 養 士	商 業	芸 術 家	農 林 漁 業	無 答	合 計	
												実 数	%
4.4	44.1	2.9	2.9	—	1.5	4.4	1.5	2.9	—	1.5	16.2	68	100.0
1.4	33.8	4.2	6.3	4.3	11.3	2.1	0.7	0.7	0.7	—	12.7	142	100.0
1.5	33.7	4.0	9.2	6.6	13.2	1.8	1.5	2.6	0.7	—	8.4	273	100.0
0.7	17.9	6.6	9.9	8.6	13.9	—	2.6	4.0	0.7	0.7	15.2	151	100.0
3.3	49.4	1.6	6.0	2.2	6.6	1.6	1.1	0.6	0.6	—	8.3	182	100.0
1.4	41.4	2.9	8.6	4.3	8.6	7.1	—	2.9	1.4	—	8.6	70	100.0
1.8	35.0	1.8	7.0	1.8	17.5	5.3	—	1.8	—	—	12.3	57	100.0
—	17.4	13.1	—	13.1	17.4	—	—	—	—	—	4.3	23	100.0
1.9	35.2	3.9	7.4	5.0	11.0	2.3	1.2	2.1	0.6	0.2	10.8	483	100.0

表25 職業経歴

項 目		高女教諭から			大学助手から			その他の職業から					合 計	
		高女 校 教 員 と し て く	中 高 女 校 教 員 と し て く	大 学 大 短 大 含 む 教 諭 へ	大 学 教 諭 へ	高 女 中 校 教 員 へ	高 女 高 校 教 員 へ	大 学 教 諭 へ	大 学 教 諭 へ	マ ス コ ミ ・ 出 版 へ	公 務 員 へ	高 女 中 校 教 員 へ		高 女 高 校 教 員 へ
前期	既婚	7(3)	1	2	2	1	—	—	—	—	—	—	3	16
	未婚	—	1	1	—	—	—	1	1	—	—	1	—	5
中期	既婚	4(1)	3	5	4	1	—	1	—	—	—	—	5	23
	未婚	1	—	1	1	—	—	—	1	—	—	1	1	6
後期	既婚	7(2)	4	8	1	—	1	—	1	3	1	5	31	
	未婚	5(1)	2	5	1	—	—	1	—	—	—	5	19	
合 計		24(7)	11	22	9	2	1	3	3	3	3	19	100	

(注) ( ) は内数で校長

以上職種的面から職業生活の経過を辿ったのであるが、継続の状況を次に表わしてみたいと思う。結果は表27 職業継続の状況にまとめられている。ここでは、職業継続のタイプとして、次の四型に分類してみた。

① 継続型  
② 準継続型(中断期間が4年以下)

③ 中断型(中断期間が5年以上)

④ 中途型

概括すれば、卒業後職を得てから一貫して職業を持続した継続型が四十七名で最も多く、内既婚者は二十八名、未婚者は十九名であ

表24 職 種 (数字は%)

回生・学部		項 目				経営者・役員	部 課 長	団 体 役 員	議 員 其 他	管 理 的 職 業 其 他 の 經 営	大 学 教 授	中 高 校 長	医 師	尼 僧	家 裁 調 停 委 員
		大 大 大	正 正 正	前 中 後	期 期 期										
専攻学部別	家 家 政 学 部	4.0	0.7	—	2.0	0.7	5.9	0.7	1.3	—	—	—	—	4.0	
	家 家 政 学 部	1.6	—	0.6	—	—	6.6	2.7	—	—	—	—	—	7.2	
	国 文 学 部	2.9	—	—	—	—	1.4	4.3	—	—	—	—	1.4	2.9	
	英 文 学 部	—	—	—	—	—	10.5	—	—	—	—	—	—	5.3	
	社 会 事 業 学 部	—	—	4.3	4.3	—	13.1	—	—	—	—	—	—	13.1	
合 計		2.3	0.2	0.4	0.8	0.2	6.4	1.9	0.4	0.2	5.6				

る。既婚者の場合にいずれの型に入るか不明の場合が多い(七十名中十三名)のは残念であるが、家庭生活との両立の問題から、未婚者より中断、中途型が多いことが予想され、たしかに、既婚者の方に、準継続型・中断型が多い。中途型は数少なく、全体としては継続型の占める割合が大であるのは、この対象者が三十一年以上という長期の職業経験者に限られているためであろう。

大正期に、高等専門教育を受け、職業人としてその生涯を貫いてきたという事実は、(それが労働階層であるなら、勿論女子であってもその職業の歴史は古くかつ広汎なものがあるが)専門職、或いは公職についてきたのであるから、女子の専門職としての文字通りのパイオニアであったことを物語るものといえよう。それも特殊な、例えば音楽学校卒業者の場合のような特殊技能に恵まれてという訳ではなく、また女高師出身者のように、特別に専門的な職業教育を施されたのでもないところに、これらの人々の歩みの価値があるといえる。

これらは特に既婚者の場合に子どもを何人位持ったかをみることでもわかる。未婚者の場合はともかく、既婚者七十名中子どもがいない者は十二名であって、あとの五十八名は多い人で七人以上の子持ちさえあり、平均しても三人の子どもを持っていることをみても推察のできるところである。(これを現代の卒業生の有職者と比較してみると、『女子の

表26 職業領域

職 種	既婚者	未婚者	合 計
経 営 者 ・ 役 員	3	1	4
部 課 長 員	1	—	1
団 体 役 員	7	2	9
議 員 ・ そ の 他	4	3	7
その他の経営管理的職業	7	—	7
大 学 教 授	32	17	49
中 学 校 長 員	4	1	5
家 裁 調 停 委 員	6	2	8
大 学 助 手	10	4	14
中 ・ 高 校 教 員	67	26	93
幼 ・ 小 学 校 教 師	6	1	7
各 種 学 校 教 師	26	5	31
官 社 吏 員	15	3	18
会 社 技 師	10	5	15
マ ス コ ミ ・ 出 版 士	1	—	1
栄 養	4	6	10
	1	—	1
商 業	2	1	3
農 林 漁 業	2	—	2
無 職	1	—	1
そ の 他	5	2	7
合 計	214	79	293

生涯教育』中の現在職業を持っている者では、未婚が約三割弱子どもが無い者が約二割強と合わせて約半数を占め、子どもを持つ者でも一人又は二人の場合がほとんどで、三人以上の子持ちは全有職者中六分程度にすぎない。大正期の永年勤続者では二割四分が三人以上の子持ちである。表28参照)

#### 四 社会活動

職業以外に社会的な活動（各種の団体やグループに所属して社会的な広がりを持った実践活動）を行なった経験を持つ者はどの位あるであろうか。またその活動の種類はどのようなものであったらうか。

表27 職業継続の状況

	継 続 型		準継続型		中 断 型		中 途 型		不 明		合 計	
	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%	実数計	%
既 婚	28	40.0	13	18.6	12	17.2	4	5.7	13	18.6	70	100.0
未 婚	19	63.3	4	13.3	3	10.0	2	6.7	2	6.7	30	100.0
合 計	47		17		15		6		15		100	

表28 有職者の子の数(数字は%)

未・既婚・子供数		大(全)正(体)	大正の卒業生の内31年以上勤続者	戦後の卒業生の内現職者
未 婚		6.6%	30.0%	27.1%
既 婚	子供0人	9.3	12.0	22.5
	1人	12.5	16.0	18.2
	2人	17.3	17.0	26.2
	3人	18.4	7.0	5.5
	4人	16.4	10.0	0.3
	5人	11.6	2.0	} 0.3
	6人	3.7	2.0	
7人以上	3.1	3.0		
無 答		1.7	1.0	—
合 計		100.0	100.0	100.0

(1) 社会活動の経験の有無

社会活動の経験の有無については表29のとおりで、社会活動をしたことのある者は全体の四割八分強で、卒業の時期別にはほとんどかわりがないようである。専門学部別にみると、社会事業学部出身者は調査対象者が極めて少ないとはいえず、さすがに社会活動経験者が多く七割を数え、ついで国文学、家政理学部に社会活動に参加したと回答している者の割合が多く認められ、この三学部ではほぼ半数がそれ以上の参加経験者があることになる。

この傾向は卒業直後の進路における就職者の割合と卒業学部との関係とやや近似しており、

表29 社会活動の経験の有無(数字は%)

項 目	社会活動の経験あり	社会活動の経験なし	無 答	合 計	
				実数	%
専 攻 学 部 別	家政学部	43.8	30.2	26.0	235 100.0
	家政理学部	49.8	27.8	22.5	227 100.0
	国文学部	56.0	27.4	16.7	84 100.0
	英文学部	38.9	37.5	23.6	72 100.0
	社会事業学部	70.0	13.3	16.7	30 100.0
合 計	48.1	29.0	22.8	648 100.0	

表30 社会活動への参加と職業経験(数字は%)

	職業経験なし	過去に職業あり	現職あり	無 答	合 計
社会活動参加経験あり	40.0%	49.0%	60.4%	25.0%	312名 48.1%
社会活動参加経験なし	33.3	28.8	26.4	22.2	188 29.0
無 答 ・ 不 明	26.7	22.2	13.2	52.8	148 22.8
合 計	165(100.0)	288(100.0)	159(100.0)	36(100.0)	648(100.0)



社会事業、国文、家政理学部出身者には、家政・英文学部出身者よりも割合としてはやや高い就職率が示されていたことを思い出させる（表15参照）。そこで、社会的なひろがりを持った社会活動への参加状況と職業経験との間に関連が見られるかどうか調べてみた。（前出の当研究所女子教育研究双書『女子の生涯教育』中の生活、意識調査においては社会活動参加状況と、今後の就労に対する意欲との間に関連のあることを指摘している。即ち、「現職ある者」では、社会活動に参加している者の割合が高く、「就職を希望している層」では、社会活動への参加、不参加の比率がほぼ半々であり、「就労意欲のない者」或いは就労意欲が不明確な者では、参加している者の割合の方が低い。同双書3・167ページ第17図より）

さて、本調査では表30のとおり、職業経験のない者ではその約四割が社会活動に参加したことがあり、「過去に職業を持ったことがある者」では約五割に社会活動経験ありと答える者があり、さらに、現職者では約六割が社会活動に参加したと答えている。この結果、職業経験と社会活動参加経験との間にやや関連性があることが指摘され、職業生活に関連して社会活動が展開する場合があることが推測される。

さらにここで見逃し得ないことは、全体的に見て社会活動への参加率が高いということである。被調査者の年齢層が高いため、調査の対象となる年月が長く、その間での社会活動への参加の有無ということ、若年層に対する調査の場合よりも参加経験を持つ者が多くなることは容易に想像されることとはいえ、これらの人々が経てきた時代の背景をぬきにしてこの社会活動参加率を云々するわけにはいかない。それは次の社会活動の種類別の調査結果でも明らかである。

## (2) 社会活動の種類と内容

どのような社会活動に参加したのかをみるため、過去、現在を問わず、社会活動を次のように分類し、その団体名および、加入して活動した者の数を一覧にしたのが表31である。（（ ）内の数字は活動した者の人数）

この表によりわかることは、太平洋戦争を境として明確に活動団体の種類がちがうことである。戦争中は、大日本

表31 社会活動の種類

合計	職域団体	政治団体	同窓会	趣味サークル	学習サークル	宗教団体	社会福祉団体	有志団体	地域団体	官公職団体	活動領域の例	
											戦前(中)	戦後
182						仏教婦人会(2)		新婦人協会(10)	愛国国防婦人会(57) 大日本連合婦人会(42) 大日本婦人会(12)	物価統制委員(13) 大日本婦人衛生会	戦前及び戦後	
			高女同窓会(2) 桜楓会(25)		全国友の会		日赤奉仕団(14)	YWCA			戦後	
627	(16)	民風主 社風主 由民主 党党党 (8)		(各 種) (7)	草の実会(20)	創価学会(24)	民生委員(115)	主婦連 日本婦 者同盟 有権 (97)	地域婦 農協婦 人部会 (136)	教育委員(178) 社会教育委員 家裁調停委員	( )は内数	
809	16	8	27	7	20	26	129	107	276	191人	人数計	

(注) 尚これは延数であって、1人で多い場合は21種類の団体役員や官公職関係の各種の委員・サークル活動等を経験している例もあり、実人員数は301名である。

婦人会、愛国婦人会、国防婦人会、大日本連合婦人会といった各種の婦人団体が、国策に添って誕生し、国家によって統制され、活動を強いられた時代を経て来たということであらう。

やがて戦後となり、婦人に参政権が与えられたのははじめ各種の権利が与えられた。いろいろな官公職関係団体により、あるいは有志的な団体による社会活動が自由に行ない得るようになった時が来たのである。

これらの卒業生が、年齢からいって終戦時には大体四〇才から五〇才台という、子育てからも解放された活動期にあったことを考えると、戦後一斉に社会活動の各方面において、活動に参加されたであろうと推測することは容易である。それは、

戦前・戦中よりもむしろ戦後において、公的な色彩の強い教育委員、社会教育委員、家裁調停委員としてあるいは民生委員、保護司、児童委員などとして活動した、あるいは現在も活躍中の人々の多いことから明らかである。また衆議院や参議院において、直接国の政治に携われた人々も含めて、政党活動その他の政治活動を行なった人は本調査結果では八名であった。

(なお、試みに、「議會制度七十年史」の内、衆議院および参議院の議員名鑑によれば、戦後の衆議院第二回総選挙(昭和二十一年四月十日実施)より、第二十八回総選挙(昭和三十三年五月二十二日実施)までにおけるものと、参議院第一回選挙(昭和二十二年四月二十日実施)における当選議員の内、本学卒業生は五名あり、内四名が大正期の卒業生であった。)

## 五 ま と め

大正年間に本学を卒業した卒業生は、卒業後長くて六十年、短かくても四十五年間という半世紀に亘る年月をすごして来た。この間卒業生たちは社会人として家庭人としてどのように過ごし活動して来たのであろうか。本章では、卒業直後の進路、家庭生活、職業生活、社会活動について、調査結果を要約してみたい。

本学卒業生の卒業直後の進路は出身学部によって傾向が異なるが、全体としては「職業」や「社会的な仕事」にいた者が約半数を占めた。「けいこ」と「家事・家業の手助け」さらには「結婚して家庭に入った」者が約四割で卒業後も「勉学を続けた」者が約一割である。

学部別傾向としては、家政学部に「家事」「けいこ」と「結婚」といった家庭生活志向型が多いのは、専攻の方向からも当然であろう。それに対して、家政理学部、国文学部・社会事業部では、「職業」「社会的な仕事」といった社会生活志向型がほぼ六割と、過半数を占めている。

英文学部が、この両型の間といった感じであるのは興味深い。

時期別では、大正中期の卒業生に、当時の日本経済の隆盛な時勢を反映し、職業に就いた者の割合が多く、この時期の「けいこごと」や「家事手伝い」の割合が減少している。就職者の職種は、「高女教員」が圧倒的に多く、他は「母校の研究室助手」「母校附属各校教員」を除くと、極めて少数が官公庁や、民間に就職しているにすぎなかった。卒業後の生活の中で、「結婚の年齢」をみると、当時の一般の結婚年齢が、二十才、十九才、二十一才に集中しているのに対し、本学卒業生の場合は、二十三才、二十四才、二十二才、二十五才、二十一才の順で、分布の幅が広く二十五才以上の結婚年齢の者も少なくない。

配偶者の職業は、会社員、官吏、大学教授、医師等が多く、専門的、管理的職業の者が多く、高い社会階層に属することがわかる。子どものものある者については、その子の数は、三人、二人、四人、の場合が若干多いとはいえ、一人、五人、六人以上とさまざまであり現代の母親たちが子どもの数を二人または一人、多くて三人、と少なく抑えて産んでいるのと比べ、大正から昭和へと軍国主義の体制下で産児制限の普及され得なかった時代の、さまざまな社会的思潮の背景を思わせられる。

職業生活を経験したことのある者は、卒業直後での職業経験を含めて約七割であった。さらに現職のある者が調査時点において約二割五分あり、調査対象者の四分の一に達している。

職業継続の年数は、五年以下が約二割五分に達するといえ、十年、二十年、三十年、あるいは四十年以上とさまざまである。

職種はまた実に多彩である。卒業後の進路では職種の数は極めて限られていたのに比べ、現職或いは職歴中の最も長い勤続年数を示す主な職種の内容は、専門職、管理職がふえているのは勿論、広い職域への拡大を物語っている。

この点については、職業生活三一年以上に及ぶ者百名について職業経歴をみると一層明らかである。  
すなわち、

- ① 高女教員をふり出しにする者は、五十七名あり、
- ① その後も一貫して高女教員（新制中高教員を含む）であつた者が二十四名。（内、校長、学園長などの管理職が七名）
- ㊦ 短期大学・大学の教官へと転じた者が十一名。
- ㊧ 教職以外の職に転じた者が二十二名。
- ② 本学またはその他の研究機関での助手をふり出しにする者が十二名あり、
- ① 大学教授への道を進んだ者が九名。
- ㊦ 高女（または新制中学、高校）の教員へ転じた者が二名。
- ㊧ その他の職業に転じた者が一名。
- ③ ①②以外の職業をふり出しにする者が三十一名あり。
- ① 大学教授への道に転じた者が三名。
- ㊦ マスコミ、出版関係者が三名。
- ㊧ 公務員となつた者が三名。
- ㊨ 高女教員（または新制中学・高校）へ転じた者が三名。
- ㊩ その他が十九名であつた。

またこれらの分類の背後にある多彩な職業経歴を調べるため、三一年以上の勤続年数の間の全職種を数えた結果、実に二九三種にのぼつた。さらに職業継続の状況を分類した結果はつぎのとおりであつた。

- ① 継続型（一貫して職業生活をもつづけた場合） 四十七名
- ② 準継続型（短期間四年以下の中断はあるが、ほぼ一貫している場合） 十七名
- ③ 中断型（五年以上の中断期間をもつ場合） 十五名

④ 中途型（卒業後何年か経ってから就業した場合）

六名

⑤ 不明

十五名

社会活動への参加状況についてみると、参加の経験がある者が約半数あり、参加経験なしとする者は約三割である。（二割が不明）学部別にみると、サンプル数が少ないとはいえ、社会事業学部に参加経験ありとする者が高率であることが指摘される。ついで、国文学部と家政理学部に多く、約半数が参加したと答えているが、家政学部と特に文学部に少ない。家政学部にはその専門のありかたから見、家庭生活の中で家政の執行者としてその専門とする学識がよく發揮されたであろうことは想像に難くない。職業経験と社会活動経験との間には多少の関連があるようで、職業経験ある者に社会活動の経験者の比率が高くなっている。これは、職業生活との関連での社会活動の展開とみるべきであるのか、あるいは、社会生活志向型と家庭生活志向型といった類型の別を見るのが妥当かは一概にはいえぬ。しかし、この点を社会活動の内容に照らしてみると、数字上ではやはり職業生活との関わりからの社会活動経験者が多いことが指摘されよう。

これらの経歴を通じて、職業生活であれ、社会活動であれ、或いは家庭の主婦としての生活の中であれ、それぞれが何らかの形で本学で受けた高等教育を生かし、さまざまな分野で指導的立場をもったり、メンバーとしての役割を荷い続けて来た歩みの、一步一步の重さを感じないではいられない。

これをすべて母校の教育効果と断ずることの是非はともかくとして、少なくとも、先年の当研究所の戦後の卒業生たち（二十才代後半から四十才代）の生活意識調査で示された、社会活動や職業生活への意欲或いは悩み、戸惑いなどが、こと新しい戦後の問題なのではなくて、既に先輩たちがつもつと困難な状況の中で歩き、実践された道であったことを、この調査は明確に示したといえる。

大正期の卒業生に、学生時代を回顧し、卒業後の歩みをふり返っていただいたこの調査は、調査としては型破りの

ものであったかもしれない。そして被調査者となられた方々には大へんに御迷惑で御面倒なことをお願いしたわけであるが、この調査で語られた事柄の重みは、他の調査に見られないものであったと信ずる。第一章で示された母校の教育に対するさまざまな感慨は、第二章での実際の歩みと重なるとき、大きな意味を私どもに示しているのではないだろうか。

### おわりに

本調査は、大正期に日本女子大学に学び巣立った多くの卒業生の方々の協力の成果である。ある方は口述筆記で、ある方は病を押して貴重な意見、感想を寄せられた。これらの方々の努力によつて、大正期の学生生活に関する被教育者の側からのなまの声を集録でき、卒業後の生活の歩みを跡づけることができた。今後の女子教育研究に、一つの資料を提供しえたのではないかと考える。

第一章「大正期の学園生活」は主として山本和代が、第二章「大正期の卒業生の卒業後の生活」は主として落合孝子が分担執筆した。調査表の作成、調査結果の分析にあたっては、一番ヶ瀬康子教授（女子教育研究所主事）中島邦教授（女子教育研究所元主事）、品川和子氏（元女子教育研究所研究員）の参加を得た。調査の集計、整理にあたっては真橋美智子研究員、松平慶子、加島真理子、川島匂（いずれも本学卒業生）の諸氏の助力に負うところが多い。

今後、この調査を一つの手がかりとして、私学の存在意義を問い、女子教育の今日的課題に迫りたいと考えている。次に今回配布した調査票をかかけておこう。

〈山本和代（本学講師）／落合孝子（十文字学園女子短期大学助教）〉

## 大正期の本学卒業生に対する調査

(一) 1. あなたが、日本女子大学に在学されたのは、いつ頃ですか。

期 間 明治 ( ) 年から 大正 ( ) 年まで  
大正 昭和

入学時の年齢 (満 ) 歳 現在の年齢 (満 ) 歳

2. (A) あなたが、本学の存在をお知りになったのは、どのようなことからですか。

1. なんとなく知っていた
2. 学校の先生から聞いた
3. 家族・親戚の者から聞いた
4. 知人から聞いた
5. 新聞、雑誌等の出版物を通して知った
6. その他 (具体的に)

(B) あなたが本学に入学なさったのは、どのようなお気持ちまたは動機からですか。あなたのお気持ちに近かったものに 2 つ以内で○印をおつけください。

1. 専門の勉強をしたかったので
2. 女学校だけでは何となく物足りなかつたので上の学校に進みたいと思つて
3. 日本女子大にここがれて
4. 上京したかったので
5. よい先生の教えを受けたかったので
6. 精神教育を受けたいと思つて
7. 精神的独立を得たいと思つて
8. 何か将来、社会の役に立ちたいと思つて
9. 卒業後経済的に自立したいと思つて
10. 資格を取りたい (たとえば教員免許など) と思つて
11. 両親のすすめによる



12. 教師のすすめによる
13. 特に動機はなかった
14. その他（具体的に）

3. (A) ご両親は、あなたが本学に入学なさることについてどのようなご意見をお持ちでしたか。

父は（ ）

母は（ ）

(B) またご両親以外で、あなたの進学に、賛成なり反対なり積極的に意見を述べられた方がありましたら、あなたとの間柄およびその方のお考えなどについてお書きください。

(C) 当時のお宅（父上）のご職業について、お書きください。

4. あなたの学生生活をふりかえって、次のような面で、特に記憶に残っていること、および印象に残っている先生がありましたらお書きください。

A. 実践倫理について

B. 講義について

C. 自治生活について（クラス会、縦の会、係、修養会などのうち、特に印象に残っているものについてお書きください。）

- D. 寮生活について（寮生活をなさった方は、寮生活を経験してよかったと思われた点、問題であると思われた点についてお書きください。）
5. そのほか学生生活を通じて思い出に残っていることがありましたらお書きください。
  6. あなたは学生時代にどのような本や雑誌をお読みになりましたか。特に愛読されたものについて、書名、雑誌名をお書きください。
  7. あなたが、女子大学の教育をお受けになって最もよかったと感じておられるのは、どのような点ですか。また問題があると感じていらっしゃる点がありましたらお書きください。
  8. 現在、あなたが生活信条、または座右の銘としておられるようなことがありましたらお書きください。

ご協力ありがとうございました。

(二) ○こちらの調査表にもご記入くださいますようお願い申し上げます。

(点線から右は集計のための欄ですから、ご記入にならないでください)

1	2	3	4	5	6	
現在の ご年齢						満
歳						

1. ご結婚およびご家族についてお答えください。

(A) ご結婚について

1. 既婚 { 1. ご結婚の年齢 (      歳)  
          2. ご結婚は卒業時から何年目にあたりましたか (      )年
2. 未婚

(B) あなたが現在、家族として生計をともにしていらっしゃるのはどなたですか。あてはまる  
ところに○をおつけください。

1. 夫      2. 息子      3. 娘      4. 息子の嫁      5. 娘の主人  
6. 孫      7. 夫の父      8. 夫の母      9. 自分の父      10. 自分の母  
11. 家事手伝い      12. 自分の兄弟、姉妹、あるいはその家族  
13. 夫の兄弟、姉妹あるいはその家族      14. その他の親族  
15. 知人、友人      16. その他 (具体的に)

2. [既婚の方に]

(A) あなたは、本学をご卒業後、ご結婚なさるまでの間どのようにお過ごしになりましたか。

- |                      | 種 | 類 | 期 | 間 |
|----------------------|---|---|---|---|
| 1. 卒業後もさらに勉学を続けた     |   |   | 約 | 年 |
| 2. 職業についた            |   |   | 約 | 年 |
| 3. 職業ではないが社会的な仕事についた |   |   | 約 | 年 |
| 4. 家庭でいいことに専念した      |   |   | 約 | 年 |
| 5. 家業の手助けをした         |   |   | 約 | 年 |

⑨	⑩	⑪	⑫	⑬
---	---	---	---	---

⑭	⑮	⑯	⑰
⑱	⑲	⑳	㉑
㉒	㉓	㉔	㉕
㉖	㉗	㉘	㉙
㉚	㉛	㉜	㉝

⑳	㉑
---	---

6. 家事の手伝いをした
7. 卒業後すぐに結婚した
- (B) ご結婚当時のご主人の職業についてご記入ください。  
(たとえば官吏、会社員、医師、大学講師などのように具体的にお願いします)  
記入

(C) お子さんは何人おもちになりましたか。

1. 既婚だが子どもはいない
2. 子どもは \_\_\_\_\_ 人もった

(男 \_\_\_\_\_ 人)  
(女 \_\_\_\_\_ 人)

◎〔下記からは既婚、未婚を問わずお答えください〕

3. あなたは本学を卒業なさってから現在または過去に職業（定期的な収入を伴うものであれば、パートタイムでもけっこうです）におつきになったことがありますか。あてはまるものに○印をおつけください。

(A) 職業について

1. 職業をもったことはない
  2. 卒業後、現在まで、ずっと継続して何らかの職業をもっている
  3. 過去に職業をもったことはあるが現在はもっていない
  4. 現在は職業をもっているが、卒業後継続してもっていない
- (B) [A. 職業について、で2, 3, 4に○印をつけた方のみ、ご記入ください]  
あなたの現在または過去のこの職業について年代順に下欄にご記入ください。

職 歴	期		間
	年	年	
(2, 3, 4に○) 印をつけた方			約 年間

38)

34)

35)

36)

37)

39)

過去にもった職業			
(2, 4に○印をつけた方 現職)			

4. (A) 職業生活以外に、何か社会的な活動（各種の団体やグループに所属するなど職業生活以外に社会的な広がりをもった活動）をなさったご経験がおりますか。

1. 社会的な活動の経験がある 2. 経験はない

(B) [(A)で1（経験がある）]に○印をつけた方は団体名または活動の種類（たとえば愛国婦人会、日赤奉仕団、矯風会、民生委員、など）について年代順に下記の欄にご記入ください。

団体名または活動の種類	期 間	
	年 年	約 年間

5. 最近、家庭の主婦が家庭以外の仕事にたずさわることが多くなっております。これに対して主婦は家において家庭の仕事に専念した方がよいという意見と、主婦であっても、家庭以外の仕事をもった方がよい、という意見がありますが、あなたはどのようなようにお考えになりますか。あなたのお考えに近いものに1つ○印をおつけください。

1. 家庭の仕事は、それだけで十分に手をとるのだから、主婦は家庭の仕事に専念した方がよい
2. 主婦とはいえ、家庭以外の仕事もなるべく持った方がよい
3. どちらともいえない
4. わからない

③⑨

④⑩

④⑪

5. その他 (具体的に)

その他、何か補足意見がありましたら、おきかせください。

6. 家庭の主婦が家庭以外の仕事を行う場合、最も大きな問題として、育児の問題があります。子ども(学齢期までの子どもを指す)を育てるということと家庭以外の仕事につくということについて次のような意見がありますが、あなたのお考えはどの意見に最も近いでしょうか。ご経験にてらして最も近いと思うものに1つ〇印をおつけください。

1. 子どもの養育は母親にとって一番重要な仕事だから、なにをにおいても家庭を中心に母親の手だけで育てるべきで、他人の手にゆだねて、家庭以外の仕事につかない方がよい
2. 子どもは母親の手だけで育てなくても、適当な人(祖母、伯・叔母、お手伝いさんなど)があれば養育の援助を受けて、余力を家庭以外の他の仕事にむける方がよい
3. 子どもの養育だけに手を取られるよりは、できるだけ保育施設などを利用して家庭以外の仕事もする方がよい

4. 子どもは自分だけのものではなく、社会のものだから、むしろ全面的に社会施設で育て、母親は家庭以外の仕事につく方がよい

5. その他 (具体的に)

その他、何か補足意見がありましたら、おきかせください。

7. あなたは現在、どのようなことを生活の中心(はりあい)にしているのでしょうか。あてはまるものに1つ〇印をおつけください。

1. 孫の世話や家事 (種類 \_\_\_\_\_)
2. けいこごと (種類 \_\_\_\_\_)
3. 自分に関心がある勉強や研究 (種類 \_\_\_\_\_)
4. 職業生活 (種類 \_\_\_\_\_)
5. 奉仕活動 (種類 \_\_\_\_\_)
6. その他の社会活動 (種類 \_\_\_\_\_)

7. 好きなこと (旅行・社交・娯楽など) をして気楽にすごす
8. 特にない
9. その他 (具体的に)
8. 下記の点であなたは現在のご生活にどの程度満足しているのでしょうか。あてはまるところに1つ○印をおつけください。
- A. 家族関係 (同居の家族との生活で、互いの考え方や態度などから得られる満足度)
1. 非常に満足している
  2. だいたい満足している
  3. どちらともいえない )
  4. やや不満である (理由 )
  5. 非常に不満である (理由 )
- B. 経済問題 (衣・食・住に関して得られる満足度)
1. 非常に満足している
  2. だいたい満足している
  3. どちらともいえない )
  4. やや不満である (理由 )
  5. 非常に不満である (理由 )

④

⑤

ご協力ありがとうございました。

■執筆者紹介（執筆順）

- 中 鳥 邦・日本女子大学教授  
日本女子大学女子教育研究所員
- 遠 藤 明 子・日本女子大学専任講師
- 半 田 たつ子・日本女子大学女子教育研究所嘱託
- 菅 支 那・日本女子大学名誉教授
- 山 本 和 代・日本女子大学講師  
日本女子大学女子教育研究所員
- 落 合 孝 子・十文字学園女子短期大学助教授  
日本女子大学女子教育研究所非常勤研究員
- 亘 理 淑 子・日本女子大学助教授
- 熊 坂 敦 子・日本女子大学教授
- 宮 崎 礼 子・日本女子大学助教授
- 一番ヶ瀬康子・日本女子大学教授  
日本女子大学女子教育研究所主事
- 品 川 和 子・元日本女子大学女子教育研究所員
- 真 崎 美智子・日本女子大学女子教育研究所員

大正の女子教育

1975年5月20日 初版発行 ©

編 者 日本女子大学女子教育研究所  
発行者 長 宗 泰 造  
印刷所 株式会社 厚 徳 社  
発行所 株式会社 国 土 社

検 印  
麿 止

東京都文京区目白台1-17-6  
電 話 (943) 3 7 2 1 (代)  
振 替 口 座 東 京 9 0 6 3 1